岩手県文化財調査報告書第107集

平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

―― 第50次発掘調査概報 ――

平成12年3月

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第107集

平泉遺跡群発掘調査報告書

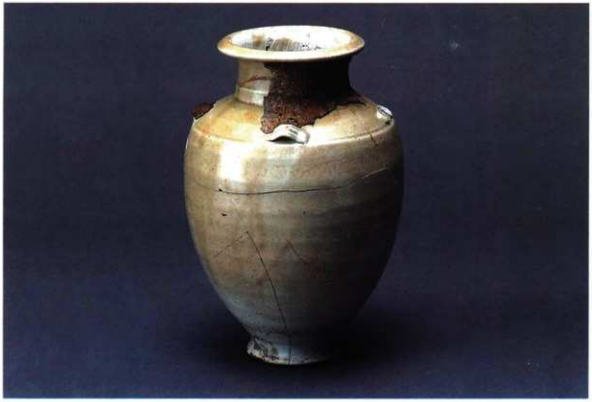
柳 之 御 所 遺 跡

―― 第50次発掘調査概報 ――

平成12年3月

岩手県教育委員会

柳之御所遺跡50次調査区



白磁四耳壺

印章（背面）

印章（印面）

序　　言

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、12世紀北方の王者としてかの地で繁栄を誇った奥州藤原氏の遺した遺跡であり、古から先人先学がこの地を訪れ往時の栄華に思いを馳せた地であります。

本遺跡は一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道４号改修平泉バイパス建設にともない、昭和63年より㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会により事業予定地内の緊急発掘調査が実施されました。調査の進行にともない、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・井戸跡・塀跡が発見され、また夥しい量のかわらけ・墨画資料・各種木製品など質量ともに内容豊かな遺物が出土しました。これらの遺構・遺物は、12世紀後半、特に奥州藤原氏三代秀衡との関連が強く、本遺跡が『吾妻鏡』にみられる『平泉館』であるとの考えも多くの歴史家から指摘されているところであります。

このような経過のなかで、遺跡保存と治水事業の共存を図るという埋蔵文化財に対する建設省のひとかたならぬご理解により、平成５年には永久に保存されることとなりました。また、平成９年３月には『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定され、古代末から中世への日本歴史の転換期の様相を遺す重要な遺跡として周知されました。

本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、この遺跡を後世に伝えるとともに広く活用されることを願い、将来的には史跡公園として整備し、平泉文化を全国に発信してまいりたいと考え、平成10年度より、本格的な発掘調査を実施しているところであります。

本年度は、第１次３ヵ年計画の２年次に相当し白磁四耳壺や鋼印など、あらためて柳之御所遺跡の重要性を再認識させる遺物の発見もありました。特に「12世紀」と時代の特定できる印の出土は本邦初であり、我が国の印章史の空白期を埋める大変貴重な資料になるとともに、地名の特定も含め今後の奥州藤原氏研究に一石を投ずるものと思われます。

本報告書は、平成11年度第50次調査発掘成果をまとめたものであり、本書がいかばかりなりとも文化財保護と考古学研究発展の一助となれば幸いと存じます。

調査の実施と報告書作成にあたり、ご指導ご援助賜りました、柳之御所遺跡調査研究指導委員会の諸先生方、文化庁記念物課、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会をはじめ建設省東北建設局岩手工事事務所等関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成12年３月

岩手県教育委員会
教育長　**大隅　英喜**

例　　言

1　本書は、岩手県教育委員会が平成11年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る調査結果の概要報告である。本事業は文化庁の国庫補助金の交付を受けて実施したものである。

2　本事業は、岩手県教育委員会事務局文化課が主体となり㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

岩手県教育委員会文化課　　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

文　化　課　長　伊藤　学司　　所　　長　佐藤　基

主幹兼課長補佐　高橋　信雄　　調査第一課長　小田野哲憲

主任文化財主査　佐々木　勝　　文化財専門調査員　羽柴　直人（担当）

文　化　財　主　査　斎藤　邦雄（担当）

野外調査、室内整理は主に斎藤邦雄と羽柴直人が担当し、本書の編集も両名で行った。室内整理作業では、小野寺公子、庄子とし子、矢崎木綿子、丸山聡子、大内智弘、吉田泰代、山田実の協力を得た。

3　遺構の呼称は昭和63年度に㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用した。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。

ＳＡ：塀・柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＣ：道路状遺構　ＳＤ：溝・堀　ＳＥ：井戸・井戸状遺構

ＳＧ：園池　ＳＫ：土坑・柱穴の一部　ＳＸ：その他　ＳＩ：竪穴住居　ＰＰ：柱穴

例：50ＳＢ１　第50次調査の第１号掘立柱建物跡

4　図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については一部を除いて１／３を基本にしておりスケールを図中に示した。遺構遺物写真については縮尺は不定である。

5　調査成果の一部については、柳之御所遺跡調査研究指導委員会、岩手考古学会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。

6　第Ⅴ章「岩手県平泉町柳之御所遺跡出土銅印」については、国立歴史民俗博物館の平川南氏に御寄稿を頂いた。

7　遺構の埋土観察、遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』を参考にした。

8　後述する「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」の委員の方々をはじめとして、下記の方々・機関のご協力を得た。（順不同：敬称略）

国立歴史民俗博物館　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　岩手県立博物館　平泉町教育委員会　平泉町文化財センター　柳之御所資料館　福島大学　㈶水沢市埋蔵文化財調査センター　難倉考古学研究所　平川南　永嶋正春　玉井哲雄　黒崎直　小泉和子　大石直正　岡田清一　前川佳代　菅野文夫　横口定志　菅野成寛　大平聡　伊藤博幸　本沢慎輔　及川司　八重樫忠郎　菅原計二　鈴木江利子　金丸義一

9　本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は、岩手県教育委員会が保管している。今回の報告に関する総括的な報告は、本事業の第１次３ヵ年計画が終了した時点で行う予定である。

目　次

序言

例言

第Ⅰ章　はじめに……9

1　調査経過……9

2　本年度の調査について……9

第Ⅱ章　検出遺構……14

1　建物……14

2　井戸状遺構……24

3　かわらけ集中……27

4　土坑……28

5　塀……28

6　溝……28

第Ⅲ章　出土遺物……30

1　かわらけ……30

2　国産陶器……35

3　古代の須恵器……37

4　中国産陶磁器……43

5　瓦……46

6　木製品……53

7　土製品……56

8　石製品……56

9　金属製品……56

10　近世陶磁器……58

第Ⅳ章　まとめ……69

1　遺構……69

2　遺物……70

第Ⅴ章　付編……71

岩手県平泉町柳之御所遺跡出土銅印……71
(国立歴史民俗博物館　平川南)

報告書抄録

[図版目次]

第１図　50ＳＢ１、50ＳＢ２……13
第２図　50ＳＢ３……14
第３図　50ＳＢ４……15
第４図　50ＳＢ５……16
第５図　50ＳＢ６……17
第６図　50ＳＢ７～９……18
第７図　50ＳＢ10～13……19
第８図　50ＳＢ14、15……20
第９図　50ＳＢ16～19……21
第10図　50ＳＢ20～22……22
第11図　50ＳＢ23～28……23
第12図　50柱列１～８……24
第13図　37ＳＥ2、かわらけ集中（50ＳＥ1）、50ＳＥ2……25
第14図　50ＳＥ３……26
第15図　50ＳＫ１～３……27
第16図　50ＳＤ１～８、42ＳＤ１、12、37ＳＤ９　29
第17図　かわらけ①（１～12）……30
第18図　かわらけ②（13～62）……31
第19図　かわらけ③（63～93）……32
第20図　かわらけ④（94～141）……33
第21図　かわらけ⑤（142～193）……34
第22図　かわらけ⑥（194～226）……35
第23図　常滑産陶器①（1001～1031）……36
第24図　常滑産陶器②（1032～1054）……37
第25図　渥美産陶器①（1055～1081）……38
第26図　渥美産陶器②（1082～1104）……39
第27図　渥美産陶器③（1105～1127）……40
第28図　渥美産陶器④（1128～1155）……41
第29図　瀬戸産陶器⑤（1156～1180）、美濃器系陶器（1181～1187）……42
第30図　水沼産陶器（1188）、瓷器系陶器（1189）、須恵器（1190～1205）…43
第31図　中国産陶磁器①（2001～2019）……45
第32図　中国産陶磁器②（2020～2036）……46
第33図　瓦（3001～3008）……47
第34図　木製品①（4001～4008）……48
第35図　木製品②（4009～4023）……49
第36図　木製品③（4024～4031）……50
第37図　木製品④（4032～4050）……51
第38図　木製品⑤（4051～4071）……52
第39図　木製品⑥（4072～4091）……53
第40図　木製品⑦（4092～4095）……54
第41図　木製品⑧（4096～4098）……55
第42図　土製品、石製品、金属製品①（5001～5012）…56
第43図　金属製品②（印章　5013）……57
第44図　近世陶磁器（6001～6007）……58

[写真図版目次]

写真図版１　航空写真……83
写真図版２　50ＳＢ１、ＳＢ２……84
写真図版３　50ＳＢ３柱穴断面……85
写真図版４　50ＳＥ１、50ＳＥ2、37ＳＥ2……86
写真図版５　50ＳＥ３①……87
写真図版６　50ＳＥ３②……88
写真図版７　50ＳＥ３③……89
写真図版８　50ＳＫ１～３、50ＳＡ１……90
写真図版９　50ＳＡ１～５……91
写真図版10　50ＳＡ５～８……92
写真図版11　50ＳＡ９～13、50ＳＤ１、２……93
写真図版12　50ＳＤ３～８、42ＳＤ１……94
写真図版13　50ＳＤ８、37ＳＤ９、42ＳＤ12……95
写真図版14　かわらけ①（１～35）……96
写真図版15　かわらけ②（36～71）……97
写真図版16　かわらけ③（72～111）……98
写真図版17　かわらけ④（112～149）……99
写真図版18　かわらけ⑤（150～188）……100
写真図版19　かわらけ⑥（189～226）……101
写真図版20　国産陶器①（1001～1033）……102
写真図版21　国産陶器②（1034～1070）……103
写真図版22　国産陶器③（1071～1099）……104
写真図版23　国産陶器④（1100～1131）……105
写真図版24　国産陶器⑤（1132～1171）……106
写真図版25　国産陶器⑥・須恵器（1172～1205）107
写真図版26　中国産陶磁器①（白磁四耳壺2008）　108
写真図版27　中国産陶磁器②（2001～2007、2009～2018）…109
写真図版28　中国産陶磁器③（2019～2035）……110
写真図版29　瓦（3001～3008）……111
写真図版30　木製品①（4001～4008）……112
写真図版31　木製品②（4009～4023）……113
写真図版32　木製品③（4024～4028）……114
写真図版33　木製品④（4029～4032）……115
写真図版34　木製品⑤（4033～4049）……116
写真図版35　木製品⑥（4050～4061）……117
写真図版36　木製品⑦（4062～4073）……118
写真図版37　木製品⑧（4074～4091）……119
写真図版38　木製品⑨（4092～4098）……120
写真図版39　土製品、石製品、近世陶磁器（5001～5011、6001～6007）…121
写真図版40　金属製品（5013、5012、5009）…122

[表目次]

37ＳＥ２遺物出土レベル……26
かわらけ集中（50ＳＥ１）遺物出土レベル……26
50ＳＥ３遺物出土レベル……27
柳之御所遺跡50次かわらけ観察表①……59
柳之御所遺跡50次かわらけ観察表②……60
柳之御所遺跡50次かわらけ観察表③……61
柳之御所遺跡50次かわらけ観察表④……62
柳之御所遺跡50次国産陶器観察表①……62
柳之御所遺跡50次国産陶器観察表②……63
柳之御所遺跡50次国産陶器観察表③……64
柳之御所遺跡50次国産陶器観察表④……65
柳之御所遺跡50次須恵器観察表……65
柳之御所遺跡50次中国産陶磁器観察表……66
柳之御所遺跡50次瓦観察表……66
柳之御所遺跡50次木製品観察表①……66
柳之御所遺跡50次木製品観察表②……67
柳之御所遺跡50次木製品観察表③……68
柳之御所遺跡50次土製品、石製品、金属製品観察表……68
柳之御所遺跡50次近世陶磁器観察表……68

第Ⅰ章　はじめに

1．調査経過

柳之御所遺跡の発掘調査は、藤島亥治郎東京大学名誉教授・故板橋源岩手大学名誉教授らから構成される平泉遺跡調査会によって、昭和44年度から開始され昭和47年度に間に都合10次の調査が行われた。しかし、調査範囲が小規模であったこと、建物跡検出をその主目的としていたため遺跡全体の構造究明には限界があった。さらに昭和57～59年度には、一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道４号改修平泉バイパス建設にともなう事前の範囲確認調査が平泉町教育委員会によって実施され、建物跡や堀跡の一部が検出された。

昭和63年度から建設省の委託を受け開始された北上川上流改修一関遊水地事業及び国道４号改修平泉バイパス建設計画に係る事前の緊急発掘調査が財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと平泉町教育委員会により実施された。その結果、大規模な堀に囲まれた建物群・園池跡・井戸跡や堀の外側に広がる区画溝をもつ建物群、さらにおびただしい量のかわらけ・国産陶磁器や中国産磁器の優品・多様な木製品や金属製品などの出土品は、研究者のみならず多くの人達の注目を集めた。遺跡の年代も、出土遺物などから平安時代末期12世紀第３四半期を中心とする時期で、藤原秀衡を中心とした奥州平泉文化最盛期に営まれたことが明らかとなった。

このような経過のなかで、岩手県教育委員会では文化庁の指導を受けて遺跡の範囲・中心地域推定の資料を得るため平成４・５年度にわたり範囲確認調査を実施した。これらの緊急調査の発掘成果と範囲確認調査の結果を踏まえ、「平泉遺跡群発掘調査指導委員会」は、平成５年度に開催された委員会で柳之御所跡が『吾妻鏡』の記述にある『平泉館』との見解を示すとともに保存が必要との意見を出した。平成５年に、建設省では遺跡保存と治水事業の両立という観点から事業計画の変更を行い遺跡を保存するという英断を下した。さらに、平泉町は国に対して史跡指定を申請し、これを受けて国の文化財保護審議委員会は平成７年に文部大臣に史跡指定の答申を行ない、平成９年には国指定史跡『柳之御所遺跡』として官報告示された。

平成10年度から、岩手県教育委員会では現地平泉町に柳之御所遺跡調査事務所を開設し史跡整備のための資料を得る目的から本格的な調査を継続的に実施している。

2．本年度の調査について

(1) 柳之御所遺跡調査研究指導委員会

当教育委員会では、柳之御所遺跡調査研究指導委員会の指導にもとづいて、柳之御所遺跡の発掘調査と調査研究、史跡整備等を計画的・継続的に実施している。

① 平成11年度第１回柳之御所遺跡調査研究指導委員会

平成11年５月10日（月）　岩手県水産会館

・柳之御所遺跡第50次発掘調査計画について

・平泉遺跡群関連発掘調査計画について

② 平成11年度第２回柳之御所遺跡調査研究指導委員会

平成11年10月７日（木）　平泉町役場　柳之御所遺跡発掘調査現場　平泉遺跡群発掘調査現場

・柳之御所遺跡第50次発掘調査成果について

・平泉遺跡群関連発掘調査成果について

・現場視察～柳之御所遺跡（文化課）　志羅山遺跡（平泉町教育委員会）

泉屋遺跡（財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

柳之御所遺跡調査研究指導委員会

氏　　名	役　　職	専門分野	備　　考
入間田宣夫	東北大学東北アジア研究センター教授	古代・中世史	
牛川　善幸	長岡造形大学教授	造園学	
岡田　茂弘	東北歴史博物館館長	考古学（古代）	
小野　正敏	国立歴史民俗博物館助教授	考古学（陶磁器）	
河原　純之	千葉大学教授	考古学（中世）	委員長
工藤　雅樹	福島大学教授	考古学・古代史	副委員長
斉藤　利男	弘前大学教授	中世史学	
佐藤　　信	東京大学教授	古代史学	
田辺　征夫	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長	考古学（歴史）	
村田　健一	奈良国立文化財研究所建造物研究室主任研究官	古代建築	平成11年度就任

(2) 調査の目的と調査の方法

平成11年度は柳之御所遺跡発掘調査第１次３ヵ年計画の２年次にあたり、堀内部地区の中心建物群の東側～北東側の地区を主要な発掘調査対象区として実施することにした。具体的には(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成元年に行った第23次調査区と隣接した場所であり、また当教育委員会文化課が平成４年、平成５年に行った第37次・第42次の範囲内容確認調査の調査区と重複する部分である。今次調査は以下を主要な課題として行った。

① 池跡及び中心建物群を囲む23ＳＡ１塀跡の追跡。

② ４間９間の南北棟の東側の状況及び建物群の伸長。

③ 42ＳＤ１大溝とされていた遺構の時期及び伸展状況の追跡。

④ 37次・42次の内容確認調査の時期に確認されていた溝・塀類の時期及び伸展状況の把握。

発掘調査にあたって昭和63年度に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが行った緊急調査時に設定したグリッドに従った。グリッドの呼称についても同様である。調査が今後も継続されることから再度基準点の設置を行った（基準点１　Ｘ座標：-111,970.000　Ｙ座標：25,030.000　グリッド杭70-70）。基本的には遺構の内容把握を主目的にしており、遺構の所属時期の確定・遺構の性格等を把握することであり、

検出したすべてについて最終的な段階まで精査を行っておらず必要最低限の段階で調査を終了しているものもある。なお、半截あるいは完掘した遺構については砂で埋め戻し、さらに砂と土で遺構面を覆い可能なかぎり旧状に復旧し保存を計っている。

(3) 調査要項

柳之御所遺跡発掘調査年次経過

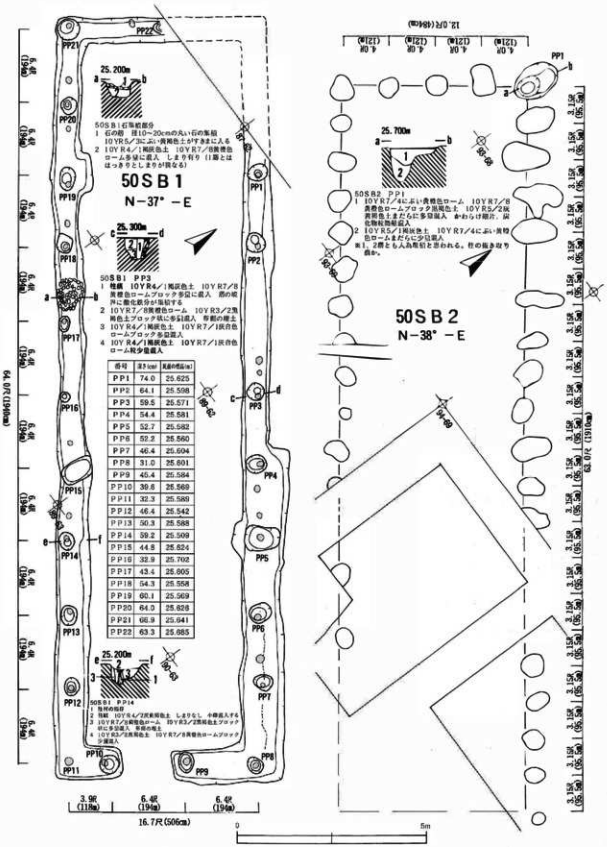
年次		調査次数	調査面積	調査期間	予算（千円）	備考
第一次計画	平成10年度	第49次	500㎡	5月15日～10月31日	18,211	国庫補助
	平成11年度	第50次	1,800㎡	5月13日～10月31日	32,236	国庫補助
	平成12年度	第52次	2,500㎡	5月上旬調査開始		
第二次計画	平成13年度		3,100㎡			
	平成14年度		3,100㎡			
	平成15年度		3,100㎡			

※平成11年度までは実績、12年度以降は予定

柳之御所遺跡発掘調査年次別調査概要

年次		調査次数	調査成果（調査予定）概要
第一次3カ年計画	平成10年度	第49次	・堀内部地区の中心建物群、特に最大建物である南北棟4間9間42SB1（28SB4と一部重複）の東側地区の解明。 ・23次調査次の23SB2　建物跡の延長確認。 ・23SA3　柱列跡、23SA1　塀跡の延長確認。 ・48SB1　建物跡の延長確認と所属時期の検討。 ・北上川に向かい形成されている小規模谷地形の解明。
	平成11年度	第50次	・池跡及び中心建物群を囲む23SA1塀跡の追跡。 ・4間9間の南北棟の東側の状況及び建物群の伸長。 ・42SD1大溝とされていた遺構の時期及び伸展状況の追跡。 ・37次、42次の内容確認調査の時期に確認されていた溝・塀類の時期及び伸展状況の把握。

年　　次		調査次数	調査成果（調査予定）概要
第一次3カ年計画	平成12年度	第５２次	・堀内部地区、中心建物群の西側及び北西側地域の解明。 ・祭祀遺構周辺域の解明。 ・無量光院との対峙地域の解明。 ・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。
第二次3カ年計画	平成13年度		・未調査区域であり、中心建物群の北側地区の解明。 ・中心建物群を囲むと推定される塀跡の検出。 ・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。
	平成14年度		・未調査区域であり、中心建物群の北側地区の解明。 ・中心建物群を囲むと推定される塀跡の検出。 ・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。 ・現存する微高地状の高まりの性格把握。 ・北上川縁地域の状況把握。
	平成15年度		・未調査区域であり、中心建物群の北側地区の解明。 ・中心建物群を囲むと推定される塀跡の検出。 ・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。 ・現存する微高地状の高まりの性格把握。 ・北上川縁地域の状況把握。 ・堀外部地区との連絡施設（道路・橋等）の確認。



番号	深さ(cm)	底面の標高(m)
PP1	74.0	25.625
PP2	64.1	25.598
PP3	59.5	25.571
PP4	54.4	25.581
PP5	52.7	25.582
PP6	52.2	25.560
PP7	46.4	25.604
PP8	91.0	25.601
PP9	45.4	25.584
PP10	36.6	25.569
PP11	32.3	25.589
PP12	46.4	25.542
PP13	50.3	25.588
PP14	59.2	25.509
PP15	44.8	25.524
PP16	32.9	25.702
PP17	43.4	25.605
PP18	54.3	25.558
PP19	60.1	25.569
PP20	64.0	25.628
PP21	66.9	25.641
PP22	63.3	25.665

第1図　50SB1、50SB2

第Ⅱ章　検出遺構

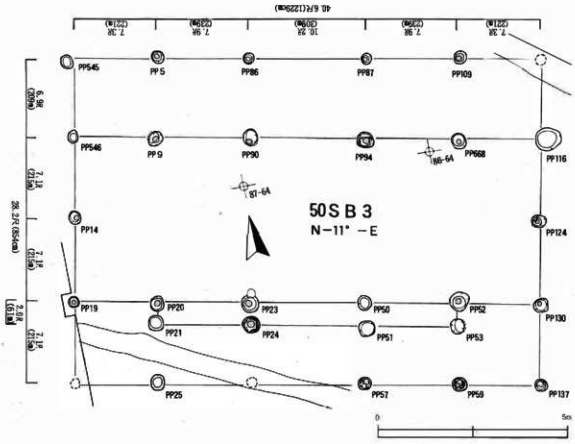
50次調査では、建物、井戸、かわらけ集中、土坑、溝、塀の遺構が検出された。名称を付し図示した遺構の他に、検出したが未調査のため、名称を付していない遺構も存在する。検出した遺構は12世紀のもの、近世のもの、また時期不明のものがある。近代以降のものは「攪乱」として扱った。

12世紀の遺構は塀、建物などの重複から３時期の変遷に分類できる。古い順からⅠ期→Ⅱ期→Ⅲ期とする。Ⅲ期の遺構は新段階と古段階の２つに分けられる。それぞれⅢ期新、Ⅲ期古と称する。新、古どちらに所属するか分からないもの、両方にまたがっていると判断される遺構は単にⅢ期と称する。

近世の遺構は主に「平泉御蔵場」に関連する遺構と考えられる。御蔵場とは年貢米、買米を集積、出荷する施設である。

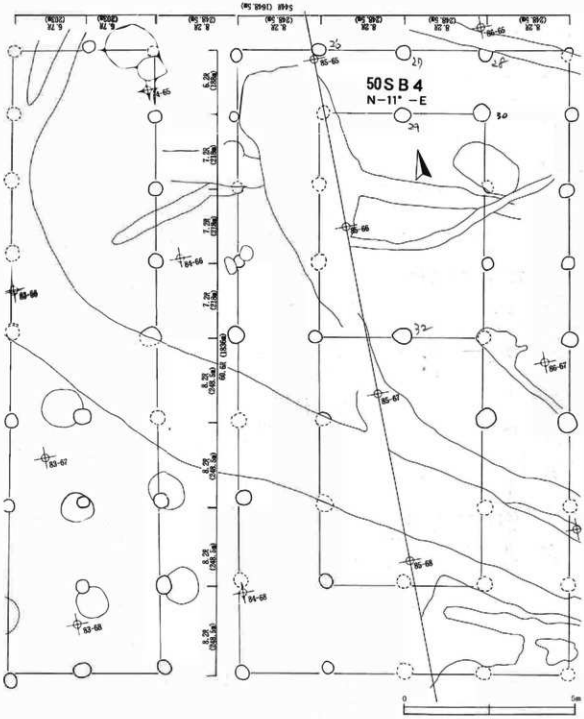
1．建物

28棟を図示した。他に柱列を８条図示している。いずれも掘立柱建物である。



番号	深さ(cm)	柱底の標高(m)	番号	深さ(cm)	柱底の標高(m)	番号	深さ(cm)	柱底の標高(m)	番号	深さ(cm)	柱底の標高(m)
PP5	15.7	26.148	PP24	22.3	26.092	PP59	12.9	26.066	PP124	17.7	25.928
PP9	43.0	25.850	PP25	43.4	25.988	PP86	20.1	25.974	PP130	9.6	25.976
PP14	19.8	26.182	PP50	17.7	26.015	PP87	11.4	25.986	PP137	24.5	25.850
PP19	27.9	26.208	PP51	32.0	25.895	PP90	25.2	26.010	PP545	7.7	26.225
PP20	34.4	26.046	PP52	41.7	25.735	PP94	14.6	26.030	PP546	15.8	26.172
PP21	50.6	25.886	PP53	47.0	25.706	PP109	9.8	25.990	PP668	26.0	25.850
PP23	28.5	26.020	PP57	10.1	26.150	PP111	24.8	25.847			

第2図　50ＳＢ３

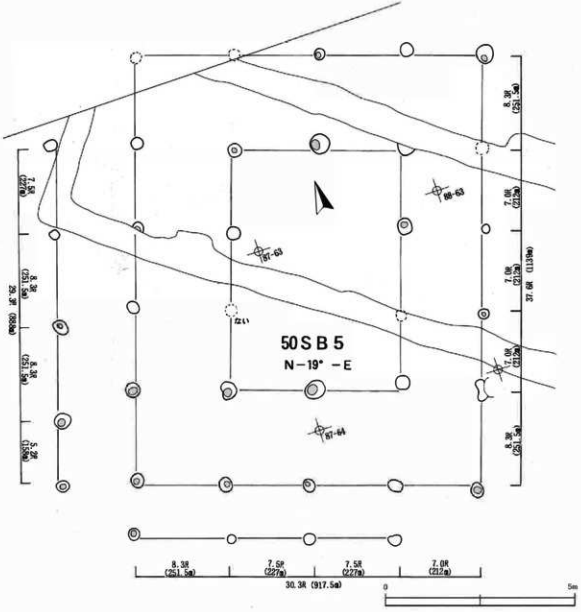


第3図　50SB4

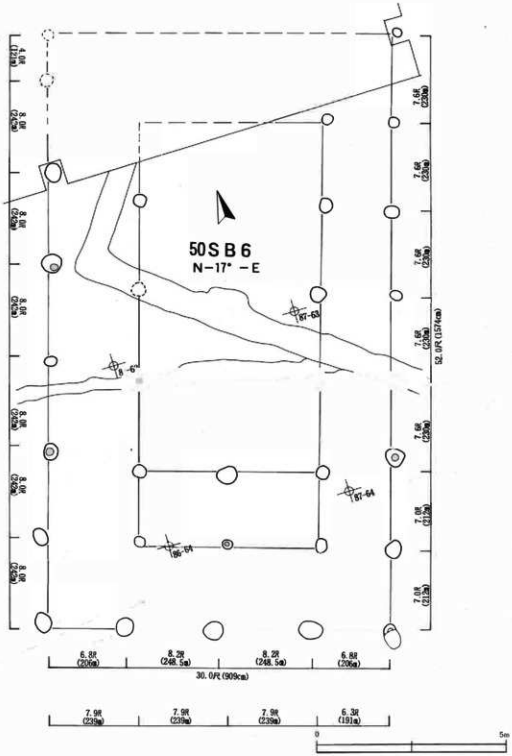
12世紀の所属と推測される掘立柱建物は12棟ある。柱穴や塀などの切り合い関係、建物の軸方向からそれぞれの所属時期を推測する。

これらの建物はプランが重複するが、直接柱穴どうしが切合い関係があるものは少ない。直接切り合いがあるのは、50ＳＢ３（新）と50ＳＢ６（古）、50ＳＢ７（新）と50ＳＢ10（古）である。この前後関係は確実なものであるが、他の時期想定には推測も混じる。

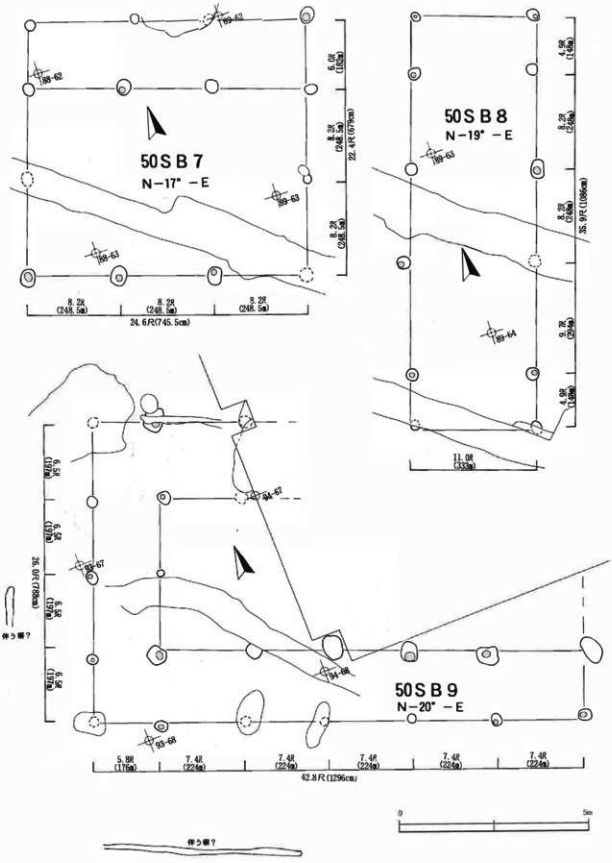
12世紀Ⅰ期・・・・50ＳＢ６　50ＳＢ10　50ＳＢ19
12世紀Ⅱ期・・・・50ＳＢ５　50ＳＢ８　50ＳＢ９
12世紀Ⅲ期古・・・50ＳＢ４　50ＳＢ17
12世紀Ⅲ期新・・・50ＳＢ３　50ＳＢ16
12世紀Ⅲ期・・・・50ＳＢ７　50ＳＢ18（Ⅲ期だが古、新どちらの所属か不明）



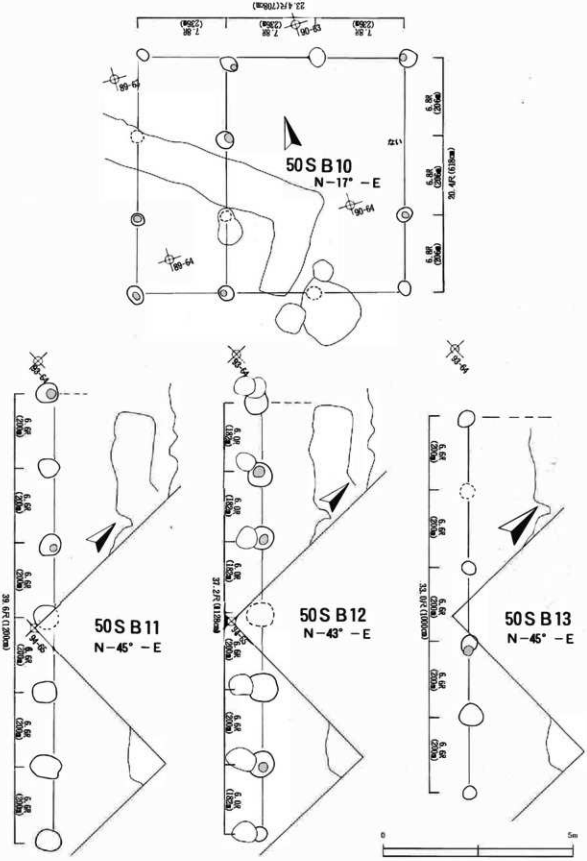
第4図　50ＳＢ５


50SB6
N−17° −E
6.8尺 (206cm)
8.2尺 (248.5cm)
8.2尺 (248.5cm)
6.8尺 (206cm)
30.0尺(909cm)
7.9尺 (239cm)
7.9尺 (239cm)
7.9尺 (239cm)
6.3尺 (191cm)
52.0尺(1574cm)
0
5m

第5図　50SB6


50SB7
N−17° −E
50SB8
N−19° −E
50SB9
N−20° −E
89-62
89-63
89-64
94-67
94-68
89-68
8.2R (248.5cm)
24.6R(745.5cm)
22.4R(679cm)
6.0R (182cm)
11.0R (333cm)
35.9R(1086cm)
4.8R (146cm)
26.0R(788cm)
6.5R (197cm)
42.8R(1296cm)
7.4R (224cm)
5.8R (176cm)
伴う柵?
0
5m

第6図　50SB7～9

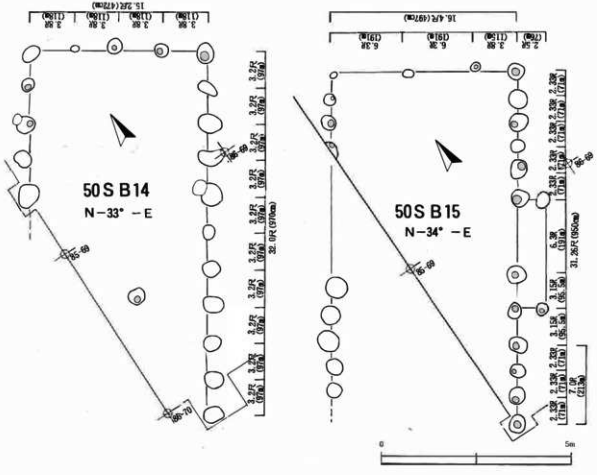


第7図　50SB10～13

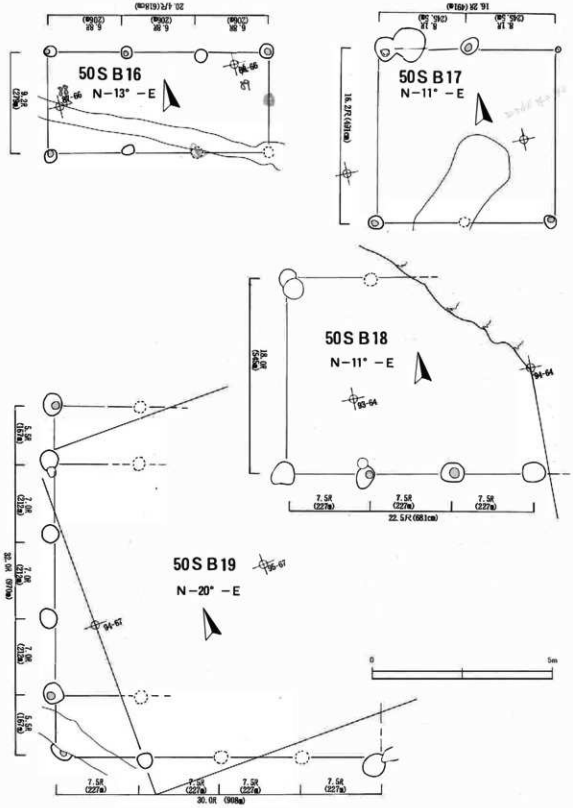
近世に所属する建物は50ＳＢ１、50ＳＢ２、50ＳＢ14、50ＳＢ15、50ＳＢ11、50ＳＢ12、50ＳＢ13がある。これらは「平泉御蔵場」の建物と推測される。50ＳＢ１、50ＳＢ２、50ＳＢ14、50ＳＢ15の４棟が土蔵、50ＳＢ11、50ＳＢ12、50ＳＢ13の３棟が米俵を仮置きする壁の無い「吹屋」と推測される。50ＳＢ１は布掘を持つ掘立柱建物である。50ＳＢ２、50ＳＢ14、50ＳＢ15は半間おきに柱を配する建物である。50ＳＢ１は２間半×10間のプランで、他の３棟は全体が検出されていないが50ＳＢ１とほぼ同規模の建物と推測される。この土蔵４棟は全部が同時存在ではなく時間差を置いて建っていた可能性が高い。50ＳＢ14と50ＳＢ15は重複関係にあるが、50ＳＢ15が新しい。吹屋の50ＳＢ11、50ＳＢ12、50ＳＢ13の３棟はプランが重複しており同時存在ではない。50ＳＢ11と50ＳＢ12には柱穴の切り合いがあり、50ＳＢ11（新）、50ＳＢ12（古）の関係がわかる。これらの御蔵場関係の建物は17世紀末～19世紀初めの時代に納まるものと推測される。

時期不詳の建物は、50ＳＢ20～50ＳＢ28がある。柱穴を掘り下げた調査をおこなっておらず時期特定が難しい。12世紀か近世の所属の可能性が高い。50ＳＢ20は柱間寸法が長く、総柱の建物であり古代の所属の可能性もある。これらの建物の性格、年代の把握には今後の検討を要する。

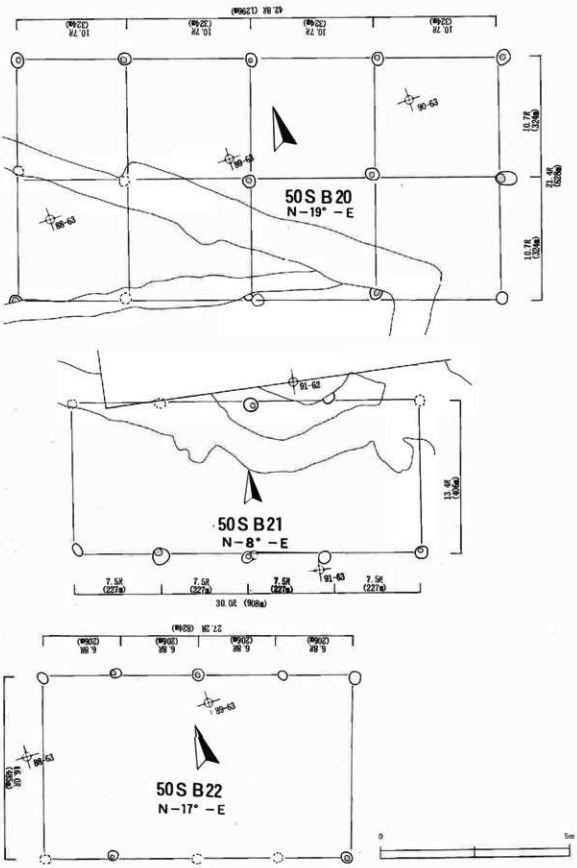
８条の柱列も所属時期は不詳である。



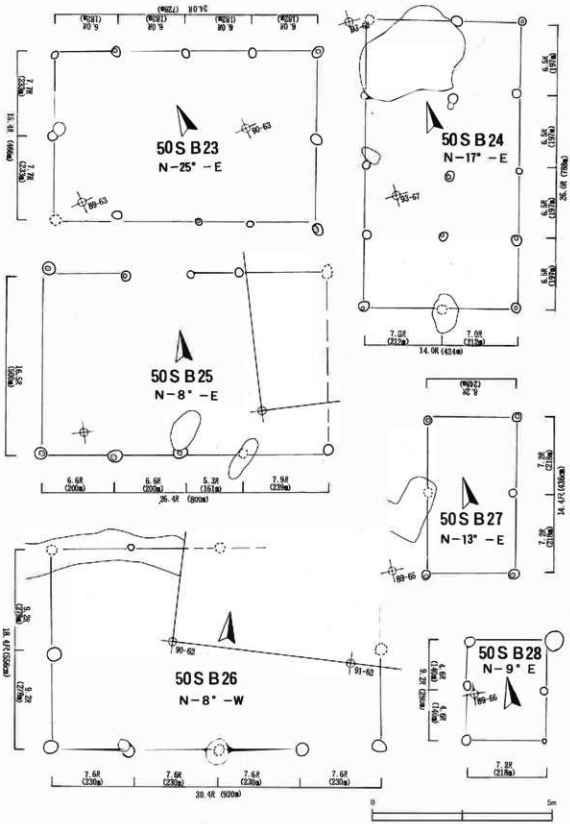
第8図　50ＳＢ14、15



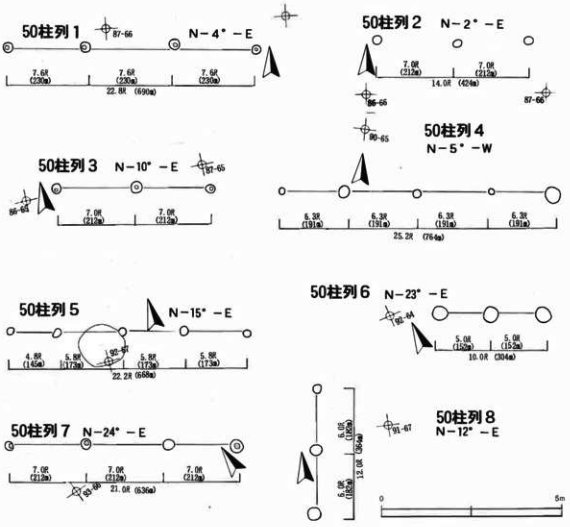
第9図　50SB16～19



第10図　50SB20～22



第11図　50SB23～28



第12図　50柱列1～8

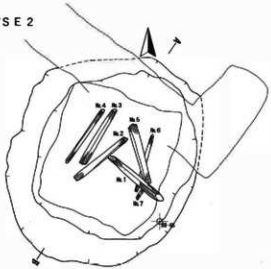
2．井戸状遺構

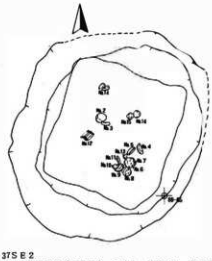
井戸状遺構は3基を調査した。37ＳＥ２（37次調査の際にすでに名称が付されている）は12世紀Ⅲ期新の所属と推定される。かわらけ、部材などが出土した。検出面で井戸本体の外周を環状に囲むように粘土が貼られていた（土層断面４層）。この用途、意味は現在のところ判断しかねる。

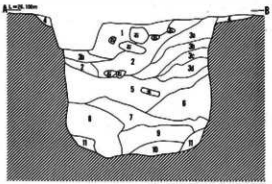
50ＳＥ２は深さが１ｍあまりで「井戸状」の名称は不適切であるが、煩雑をさけるため調査時に付けた名称のままにしている。12世紀の遺構であるが、期の所属は不明である。

50ＳＥ３は塀との位置関係から12世紀Ⅰ期の所属と推定される。しかし直接の遺構の切合い関係はないので確定ではない。この井戸からは多量の遺物が出土した。堆積状況は下部の４、５層が人為的に一時に埋められた層、なかばの３層が多くの遺物を含む有機質分の多い土の層、上部の１、２層は３層とはやや時間差を置いて堆積した層と読み取れる。３層はａ～ｇの７つに分層しているが、間層として入る筋状の粘土層や混入物の違いにより分けたものである。やや時間をかけて人為と自然の両方が介在して生成された層と考えられる。

37SE2







37SE2

1　10YR2／3黒褐色　シルト　粘性なし　砂を多量に含む
　炭化物2%、かわらけ細片を少量含む　下層に人頭大～こぶし大の円礫を含む

2a　10YR3／3暗褐色　シルト　粘性大　炭化物3%　かわらけを多量に含む　手頭大～こぶし大の礫を含む

2b　基本的には2a層と同じ　砂をほとんど含まない　炭化物2%

3a　10YR7／6明黄褐色　粘土が主体　かわらけ微量に含む
　暗褐色土を斑状に含む　しまり大　炭化物1%

3b　基本的には3a層と同じ　浅黄橙色粘土が卓越　炭化物1%

3c　ほとんど3a と同じ

3d　明黄褐色粘土と暗褐色粘土の混土　粘性、しまり大

4　10YR8／4浅黄橙色　粘土　しまり大　非常に硬い　円傾状にめぐる　意識的に埋めている。

5　3b層に酷似　一部グライ化している　炭材を含む

6　10YR8／4浅黄橙色粘土主体に暗褐色土が若干混じる　拳大の扁円礫を多量に含む

7　基本的には5層に類似する　暗褐色土を2%含む

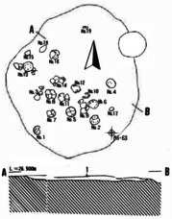
8　礫層　半頭大～拳大の礫がびっしりつまる

9　10YR7／2　オリーブ灰色　グライ化した粘土層

10　10YR7／2　オリーブ灰色　埋めもどした砂層

11　10YR7／2　オリーブ灰色　粘土混じりの砂層（砂が卓越する）

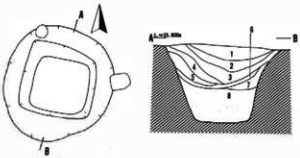
かわらけ集中（50SE1）



50SE1

1　10YR6／4にぶい黄橙色土と10YR3／3暗褐色がまだらに混合　しまりがなりあり　かわらけを多量に含む

50SE2



50SE2

1　10YR3／1黒褐色土　7.5YR6／8橙色の砂が縞状に混入　炭化物少量混入　遺物の出土はとんどなし

2　10YR4／1褐灰色土　10YR7／8黄橙色ローム、7.5YR6／8橙色の砂、炭化物ブロック状に多量混入　遺物の出土はとんどなし

3　10YR4／1褐灰色土　炭化物、10YR7／8黄橙色ローム縞状に混入　遺物の出土はとんどなし

4　10YR7／8黄橙色ローム　10YR5／1褐灰色土まだらに多量混入　遺物の出土はとんどなし

5　10YR7／8黄橙色ローム　10YR5／1褐灰色土まだらに少量混入　遺物の出土はとんどなし

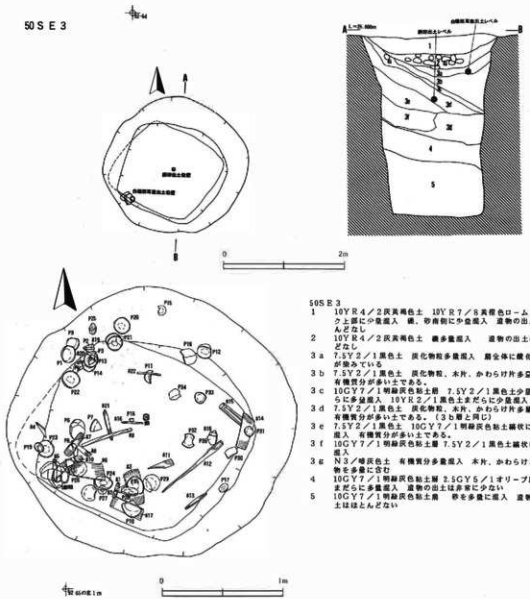
6　10YR5／1褐色土　遺物の出土なし

7　10YR5／2灰褐色砂層　遺物の出土なし

8　10YR7／8黄橙色ローム　10YR5／1褐灰色土、10YR5／2灰褐色砂多量に混入遺物の出土なし

0　2m

第13図　37SE2、かわらけ集中（50SE1）、50SE2



第14図 50SE3

37SE2遺物出土レベル

No	掲載番号	出土レベル(m)	その他
No2	70	23.949	かわらけ
No3	77	23.892	かわらけ
No4	68	24.005	かわらけ
No5	75	24.044	かわらけ
No6	76	23.908	かわらけ
No7	63	23.905	かわらけ
No8	85	23.904	かわらけ
No9	65	23.897	かわらけ
No10	78	23.918	かわらけ
No11	67	23.921	かわらけ
No12	4091	23.869	木製品
No13	69	23.917	かわらけ
No14	77	23.872	かわらけ
No15	92	23.842	かわらけ
No16	71	23.851	かわらけ

No	掲載番号	出土レベル(m)	その他
No1	4092	24.867	加工材 レベルは最も低い位置
No2	7093	24.751	加工材 レベルは最も低い位置
No3	4094	24.480	加工材 レベルは最も低い位置
No4	4096	23.969	加工材 レベルは最も低い位置
No5	4097	24.425	加工材 レベルは最も低い位置
No6	4098	23.955	加工材 レベルは最も低い位置
No7	4095	23.845	加工材 レベルは最も低い位置

かわらけ集中(50SE1)遺物出土レベル

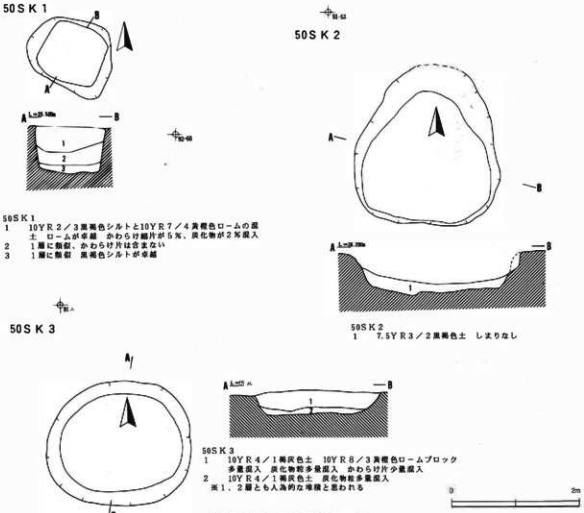
No	掲載番号	出土レベル(m)	その他
No1	107	26.237	かわらけ
No2	108	26.210	かわらけ
No3	94.95	26.230	かわらけ
No4	109	26.194	かわらけ
No5	110	26.229	かわらけ
No6	111	26.250	かわらけ
No7	112	26.244	かわらけ
No8	113.114	26.266	かわらけ
No9	96.115.116	26.278	かわらけ
No10	117	26.269	かわらけ
No11	118	26.252	かわらけ
No12	97.119	26.244	かわらけ
No13		26.208	98.99.100.101.102.120.121の一括
No14	103.104.122	26.243	かわらけ
No15	104	26.232	かわらけ
No16	123	26.225	かわらけ
No17	124	26.223	かわらけ
No18	125	26.192	かわらけ
No19	105	26.224	かわらけ

50SE3遺物出土レベル

No	取組番号	高さ(m-A.P.m)	その他	No	取組番号	高さ(m-A.P.m)	その他	No	取組番号	高さ(m-A.P.m)	その他
P1	56	25.075	かわらけ	P21	4.9	24.115	かわらけと枕重なっていた	本5	4057	24.535	木製品
P2	2008	25.191	2008と同一個体片	P22	2	24.144	かわらけ	本6	4025	24.517	木製品
P3	37	25.166	かわらけ	P23	17	24.216	かわらけ	本7	4003	24.260	木製品
P4	61	25.126	かわらけ	P24	3	24.211	かわらけ	本8	4014	24.219	木製品
P5	5	25.127	かわらけ	P25		24.227	壁土　実測図掲載なし	本9	4010	24.238	木製品
P6	47	25.061	かわらけ	P26	35.45	24.000	かわらけ	本10	4002	24.280	木製品
P7	48	25.033	かわらけ	P27	25	23.995	かわらけ	本11	4027	24.405	木製品
P8	54	24.977	かわらけ	P28	1	24.320	かわらけ	本12	4071	24.435	木製品
P9	62	25.075	かわらけ	P29	18	24.470	かわらけ	本13	4001	24.525	木製品
P10	46	24.688	かわらけ	P30	10	24.535	かわらけ	本14	4033	24.640	木製品
P11	8	24.779	かわらけ	P31	27	24.820	かわらけ	本15	4009	24.585	木製品
P12	22	25.231	かわらけ	P32	51	24.280	かわらけ	本16	4004	24.270	木製品
P13	44	24.763	かわらけ	P33	26	24.342	かわらけ	本17	4031	24.350	木製品
P14	34	24.763	かわらけ	P34	11	24.359	かわらけ	本18	4084	24.036	木製品
P15	28	25.125	かわらけ	P35	7	24.004	かわらけ	本19	4048	24.986	墨書木片
P16	6	25.019	かわらけ	P36	36	24.036	かわらけ	本20	4043	24.898	墨書木片
P17	32	25.052	かわらけ	本1	4074	24.705	木製品	本21	4042	24.799	墨書木片
P18	2007	24.696	白磁皿	本2	4078	24.712	木製品	本22	4041	24.832	墨書木片
P19	24	24.445	かわらけ	本3	4032	24.782	木製品		2008	25.185	白磁四耳壺
P20	55	24.199	かわらけ	本4	4079	24.528	木製品		5013	24.625	印章

3．かわらけ集中

当初、直径約１ｍの円内に多数のかわらけが分布するプランを検出し、それを井戸状遺構と考え「50ＳＥ１」の名称を付した。しかしそれを掘り下げたところ、すぐに底面に達し井戸状遺構ではなく、かわらけが集中した遺構と判断した。煩雑を避けるため遺構名は調査時のままにしている。かわらけはロクロかわらけ



第15図　50SK1～3

のみである。33点を図示した。かわらけの出土状況に意図的な配列などは読み取れなかった。このかわらけ集中は50ＳＢ５の柱穴よりも古い。

4. 土坑

50ＳＫ１、50ＳＫ２、50ＳＫ３の３基を調査した。いずれも12世紀の所属と考えられるが、用途、性格は不明である。

5. 塀

50ＳＡ１～50ＳＡ13の13条を検出した。平面の形態は付図（遺構配置図）を参照していただきたい。50ＳＡ３、50ＳＡ４、50ＳＡ９、50ＳＡ11は時期不詳で、他は12世紀の遺構と考えられる。各塀の所属時期は以下のように推測する。

12世紀Ⅰ期・・・・50ＳＡ２　50ＳＡ13　軸方向　Ｎ－17°－Ｅ
12世紀Ⅱ期・・・・50ＳＡ５　50ＳＡ７　軸方向　Ｎ－３°－Ｅ
12世紀Ⅲ期・・・・50ＳＡ１　50ＳＡ10　50ＳＡ12（いずれも古期、新期にまたがると推測）
軸方向　Ｎ－11°－Ｅ
12世紀Ⅲ期古・・・50ＳＡ６　50ＳＡ８　軸方向　Ｎ－11°－Ｅ

50ＳＡ７、50ＳＡ８は板材を並べた板塀である。50ＳＡ１、50ＳＡ２、50ＳＡ５は材を隙間なく連続して並べた塀である。50ＳＡ６、50ＳＡ10、50ＳＡ12、50ＳＡ13は材の痕跡がはっきりしない部分が多いが、材を隙間なく連続して並べた塀である可能性が高い。

50ＳＡ５は23ＳＡ１の南北辺の延長線上から検出され、同一の塀の可能性が指摘できる。また50ＳＡ７は溝50ＳＤ８と平行関係にあり同時存在と推測される。50ＳＡ１はその延長が東側（第42次調査区）でも検出されており、約60mの長さを確認できる。

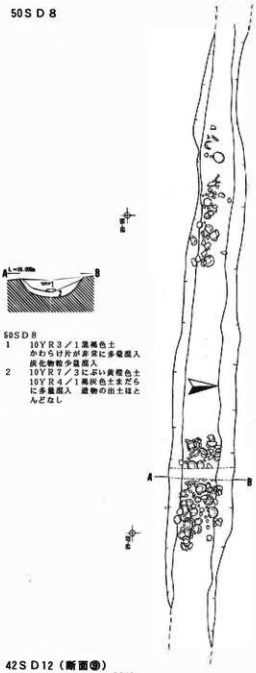
6. 溝

11の溝について調査した。その結果37ＳＤ９、42ＳＤ１、42ＳＤ12、50ＳＤ２、50ＳＤ３、50ＳＤ４、50ＳＤ５、50ＳＤ６、50ＳＤ７が近世以降のものと判断された。12世紀の溝には50ＳＤ８がある。50ＳＤ１は時期を特定するのが難しく時期不詳とする。また遺構名を付さなかったが92－68グリッド内の溝の断面を記録した。おそらくこれは12世紀の溝と推測される。溝の平面図は50ＳＤ８を除き付図（遺構配置図）を参照していただきたい。断面は第16図に示した。

42ＳＤ１は大規模な溝で、埋土中に大量のかわらけを含んでおり、従来12世紀の可能性が考えられていた。しかし、今次の調査で埋土中から17世紀前半の肥前産の皿（6002）が出土し、42ＳＤ１が近世以降の所属だということが明らかになった。この溝はおそらく平泉御蔵場を囲画する目的の溝と考えられる。

50ＳＤ８は、42次調査で検出された大規模建物の42ＳＢ１の東側に位置するＬ字形の溝に直接つながる同一の溝である。12世紀Ⅱ期の所属と考えられる。溝の軸方向（直交する）はＮ－３°－Ｅである。埋土全体から、かわらけが出土したが、東西の２箇所に特にかわらけが集中する部分がみられた。出土したかわらけはロクロかわらけが手づくねよりも圧倒的に多い。

50SD8



50SD8
1　10YR3／1黒褐色土
　かわら片が非常に多量混入
　炭化物粒少量混入
2　10YR7／3にぶい黄橙色土
　10YR4／1褐灰色土まだら
　に多量混入　遺物の出土ほと
　んどなし

42SD12（断面⑨）

1　10YR3／3暗褐色シルト　粘性しまりともになし　炭化物粒子2%含む
2　10YR5／4にぶい黄褐色シルト　粘性しまりともになしロ
3　10YR5／4にぶい黄褐色シルト　シルトがマトリックスに砂が混じる
4　10YR3／4暗褐色シルトと砂層が2～3枚づつ互層をなす
5　10YR4／2灰黄褐色シルトがマトリックスで砂を含む　磨耗したかわら付属片を比較的多く含む
※2～4層は水成の堆積層を呈する

0　2m

50SD1（断面①）

1　10YR6／2灰黄褐色土　かわら付属片ロームブロック少量混入
2　10YR5／1褐灰色砂　流水底と思われる

50SD2（断面②）

1　10YR6／1褐灰色土　炭化物粒、かわら付片が少量混入
2　10YR5／1褐灰色砂　流水底か

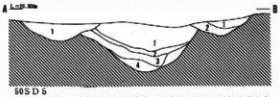
50SD3（断面③）

1　10YR5／2灰黄褐色土　10YR7／8黄橙色ロームブロック少量混入　埋土から近代の磁器片出土

50SD4（断面④）

1　10YR5／2灰黄褐色土　10YR7／8黄橙色ロームブロック少量混入

50SD5・50SD6・42SD1（断面⑤）



50SD5
1　10YR4／3にぶい黄褐色土　磨耗したかわら片非常に多量に混入　丸礫多量に混入

50SD6
1　10YR4／3にぶい黄褐色土　10YR7／8黄橙色ロームまだらに少量混入
2　10YR7／8黄橙色ローム　10YR4／3にぶい黄褐色土まだらに多量混入

42SD1
1　10YR4／3にぶい黄褐色土　同色の砂多量混入　磨耗したかわら付非常に多量に混入　丸礫多量に混入
2　10YR5／1褐灰色土　10YR8／4橙黄橙色ロームブロック多量混入　磨耗したかわら付片少量混入
3　10YR4／1褐灰色土　磨耗したかわら付片少量混入
4　10YR5／1褐灰色砂　10YR7／8黄橙色ロームまだらに多量混入

50SD7（断面⑥）

50SD7
1　10YR4／1褐灰色土　かわら付片微量混入

遺構名なし（92-68内）（断面⑦）

50SD8？（炭焼）
1　10YR3／2黒褐色土　10YR7／8黄橙色ロームブロック少量混入
2　10YR7／8黄橙色砂
3　10YR3／2黒褐色土　10YR7／8黄橙色砂まだらに多量混入

37SD9（断面⑧）

37SD9
1　10YR4／1褐灰色土　しまりなし　礫、かわら付片多量混入
2　10YR5／3にぶい黄褐色土　しまり良い

第16図　50SD1～8、42SD1、12、37SD9

第Ⅲ章　出土遺物

出土遺物は、かわらけ（手づくね、ロクロ）、国産陶器（常滑産、渥美産、須恵器系、水沼産）、古代の須恵器、中国産陶磁器（白磁、青白磁、青磁、陶器、染付）、瓦、木製品（下駄、櫛、筥、折敷、部材など）、土製品（手あぶり？、羽口など）、石製品（砥石、碁石？）、金属製品（印章、提子の金具）、近世陶磁器が出土した。

1．かわらけ

手づくねかわらけの分類は以下のとおりにした。

C3類　2段なで　口唇端部断面が丸い。

C4類　2段なで　口唇端部がつまみ上げたようになる。

C5類　2段なで　口唇部に面取りを施す。

D2類　1段なで　口縁部が直線的に立ち上がる。

D3類　1段なで　口唇端部断面が丸い。

D4類　1段なで　口唇部に面取りを施す。

かわらけは226点を図示した。1～62が50ＳＥ3、63～93が37ＳＥ2、94～126がかわらけ集中（50ＳＥ1）、127～193が50ＳＤ8、194～226が他の遺構からの出土である。個々のかわらけの特徴は観察表に記してある。

また以下のかわらけはほぼ同時に廃棄された一括性のあるセットと把握できる状態で出土した。

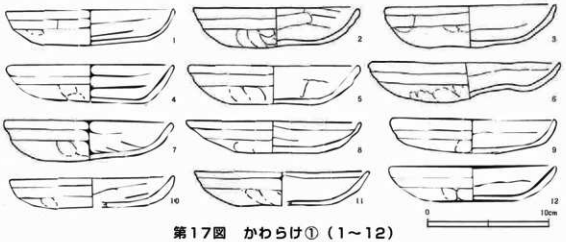
①50ＳＥ3、3層出土の1～62　②37ＳＥ2底面出土の63、67～73、75～80、83、85、92

③かわらけ集中（50ＳＥ1）出土の94～126　④50ＳＤ8の127～193である。①は手づくねかわらけがロクロかわらけの量より多い。そして大型の手づくねかわらけは1点を除き口径が13.5cm以上の大型品である。唯一、43のかわらけは口径が11.7cmと大型かわらけの小型品の範疇に含まれる。

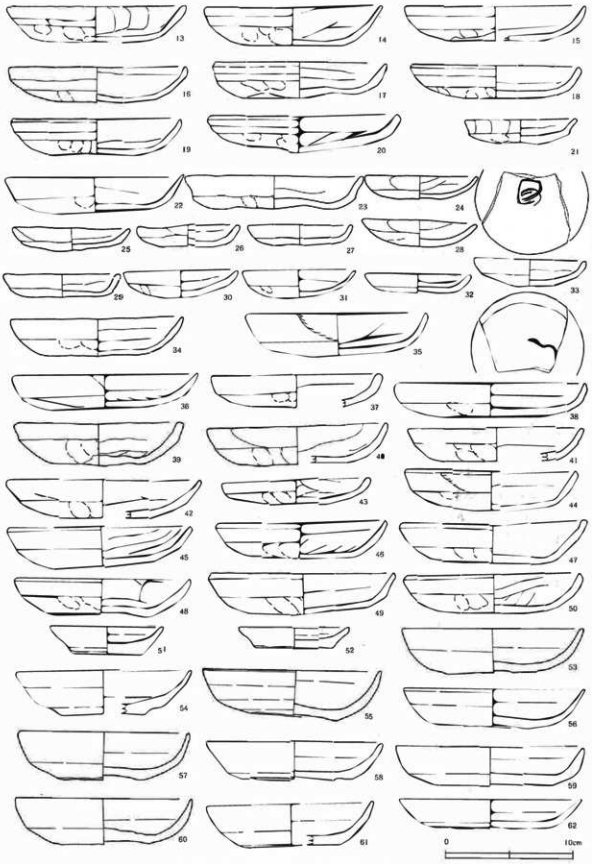
②は17点のうち1点がロクロかわらけで、他は手づくねかわらけである。手づくねかわらけは11点が1段なで、5点が2段なでである。63は口径12.7cmで大型かわらけの小型品の範疇に含まれる。

③は全品がロクロかわらけである。

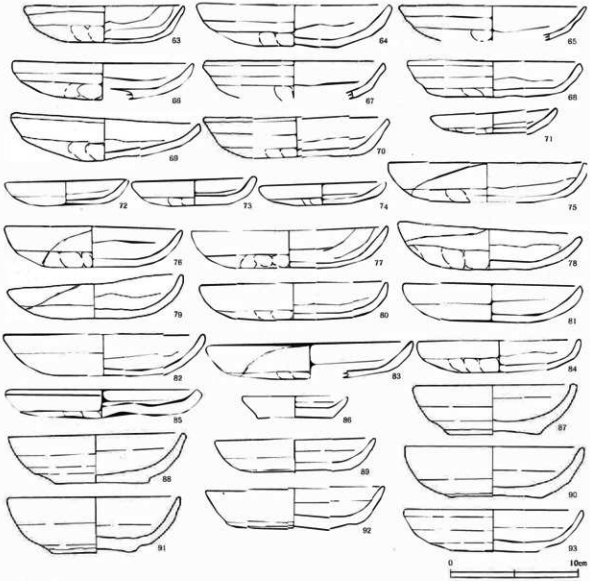
④はロクロかわらけの量が手づくねより圧倒的に多い。手づくねかわらけは16点のうち10点が2段なでである。大型かわらけの小型品は存在しない。



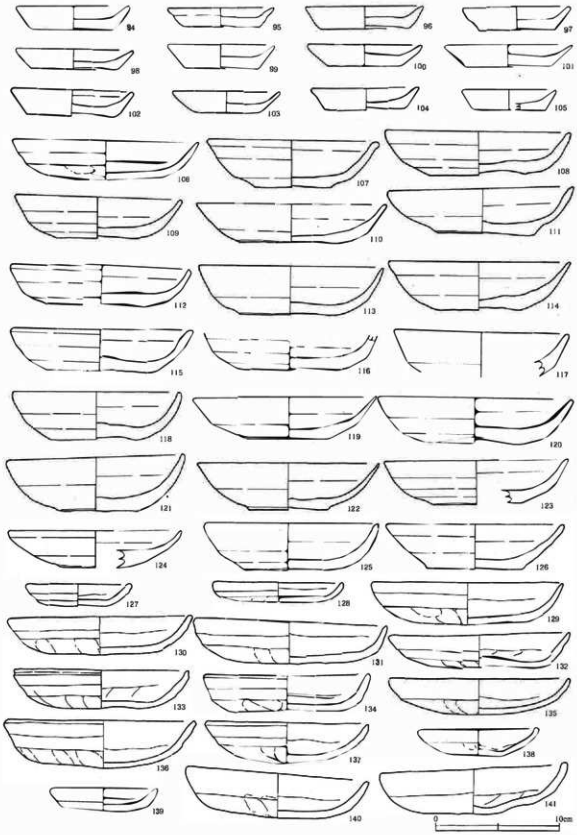
第17図　かわらけ①（1～12）



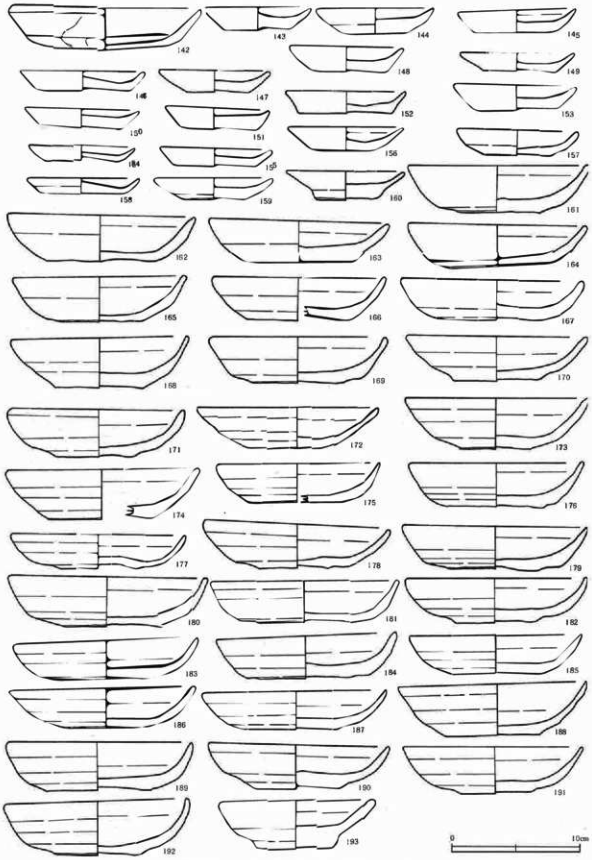
第18図　かわらけ②（13～62）



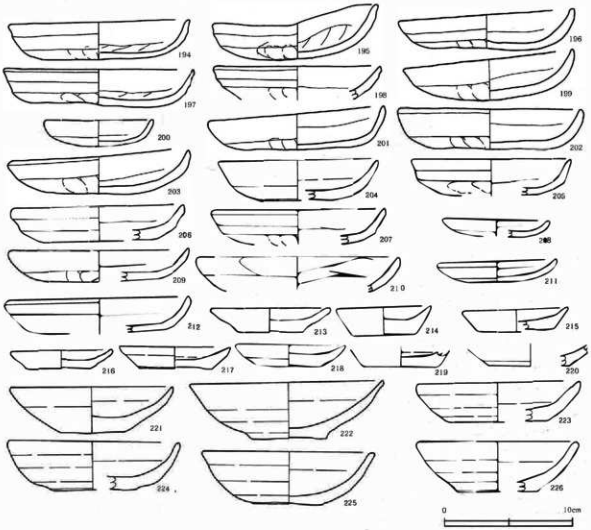
第19図　かわらけ③（63～93）



第20図　かわらけ④（94～141）



第21図　かわらけ⑤（142～193）



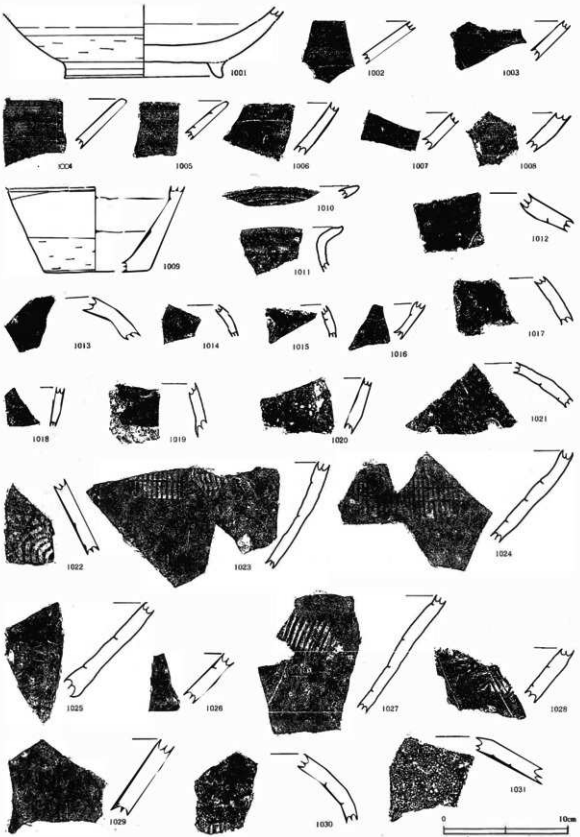
第22図　かわらけ⑥（194～226）

2. 国産陶器

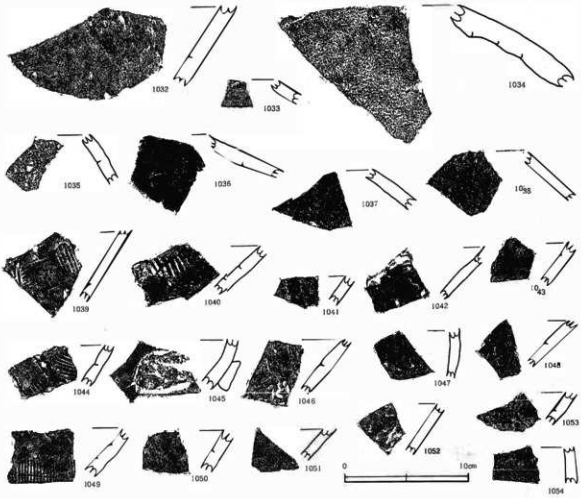
12世紀の国産陶器は出土した全点を図示した。常滑産陶器54点、渥美産陶器126点、須恵器系陶器７点、水沼産陶器１点である。他に13～14世紀の可能性がある瓷器系陶器（1189）も出土している。全体の器形がわかるものは少なくほとんどは細片である。よって、詳しい編年的位置を示せないものが多い。多くは12世紀後半に属するものと推測される。

1057は渥美産片口鉢である。50ＳＥ３の３層から白磁四耳壺に接する状態で出土した。口縁部の破片が接合しないが、器形全体を推定することが可能である。内面底辺部～体部下半は非常に磨耗しており器面が荒れている。

1188は水沼産片口鉢である。37ＳＥ２の２層から出土した。石巻市の水沼窯産である。破断面の胎土は暗赤褐色である。平泉遺跡群でも水沼産陶器の出土量はそれほど多くなく重要な資料である。



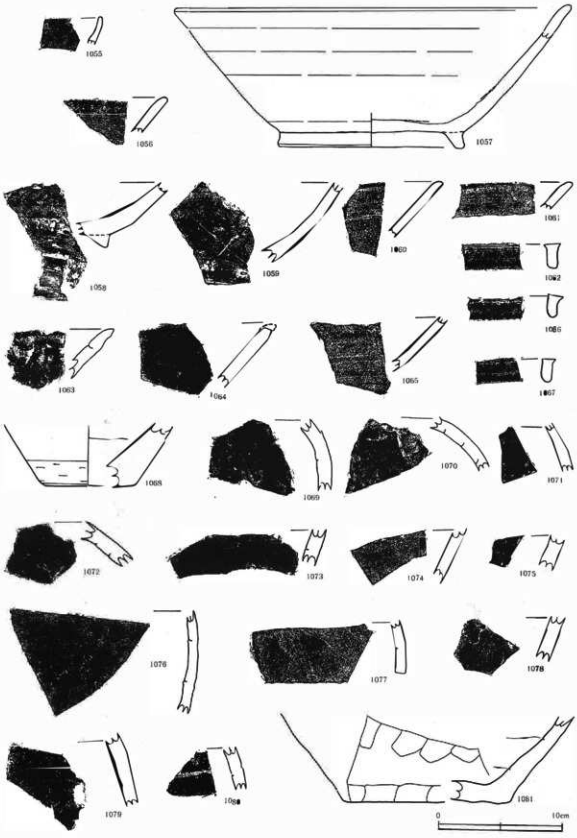
第23図　常滑産陶器①（1001～1031）



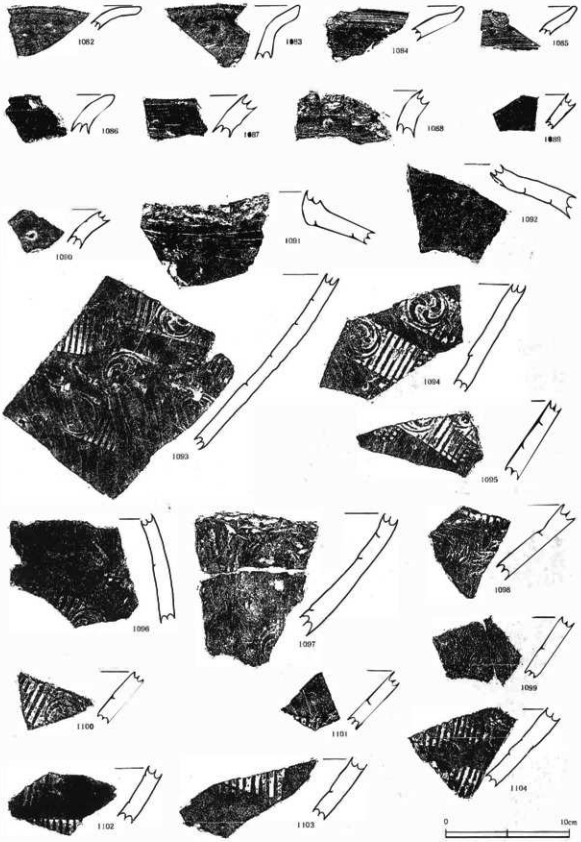
第24図　常滑産陶器②（1032～1054）

3．古代の須恵器

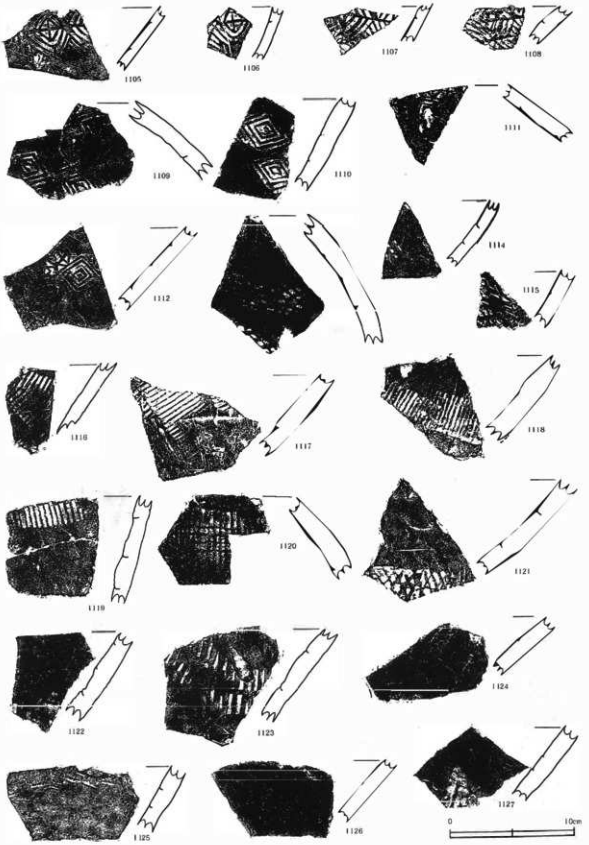
古代の須恵器と考えられるものが出土している。出土した16点全てを図示した。これらは現段階の知識では古代の須恵器の可能性が高いと考えられるが、中世の須恵器系陶器の可能性も捨てきれないものもある。なお本次の調査区では古代の土師器片は出土していない。



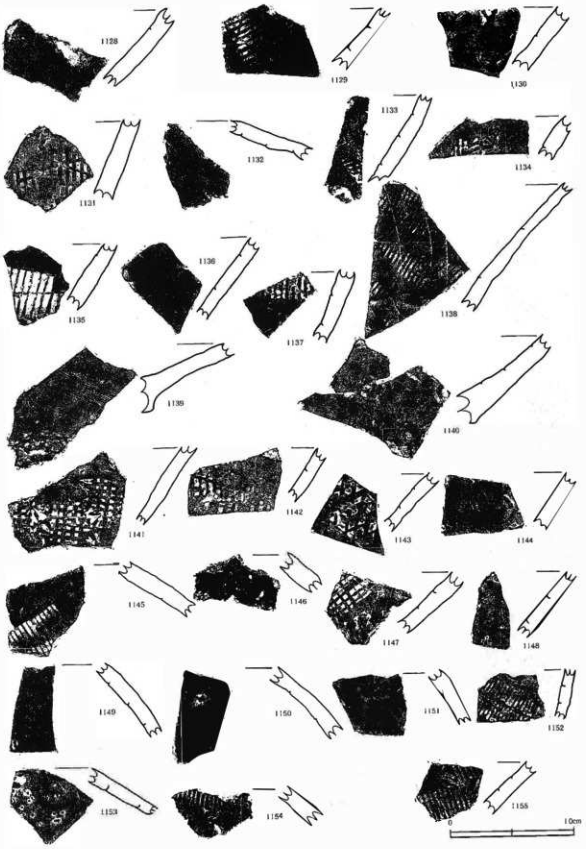
第25図　渥美産陶器①（1055～1081）



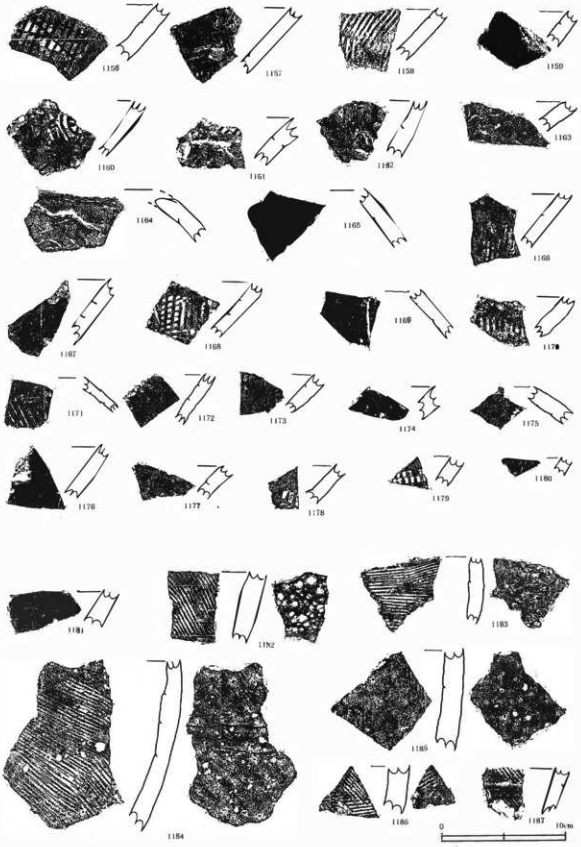
第26図　渥美産陶器②（1082～1104）



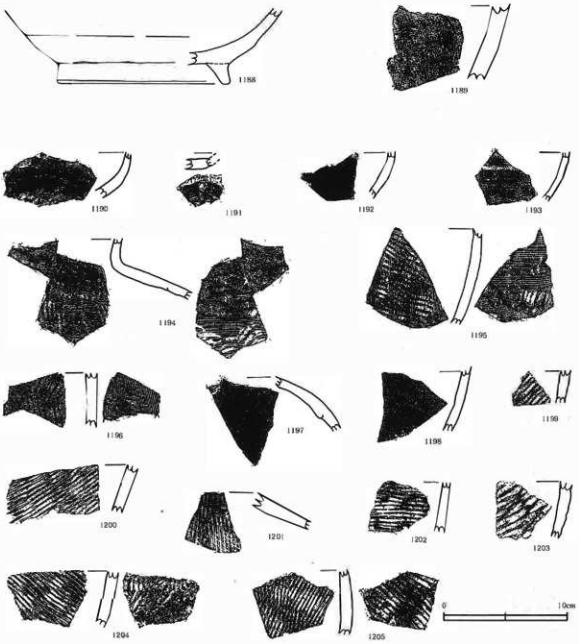
第27図　渥美産陶器③（1105～1127）



第28図　渥美産陶器④（1128～1155）



第29図　渥美産陶器⑤（1156～1180）、須恵器系陶器（1181～1187）



第30図　水沼産陶器（1188）、瓷器系陶器（1189）、須恵器（1190～1205）

4．中国産陶磁器

12世紀に属する中国産陶磁器は33点図示した。これは出土した全点である。白磁19点、青白磁４点、青磁２点、陶器８点である。他に15世紀後半～16世紀の染付皿２点も図示した。2026は中国産の青磁として取り扱ったが、その時期、産地を明らかにできず、確実に中国産の青磁か否か明らかにすることができなかった。佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定いただいたのであるが、近世の肥前産の青磁ではないとの判断をいただいている。

特筆されるのは50ＳＥ３から出土した白磁四耳壺（2008）である。割れた状態で出土したが、接合する

とほぼ完器になった。このような白磁四耳壺の完形品は平泉遺跡群では初めての出土である。大宰府分類のⅢ系に相当し、12世紀第3四半期の輸入と考えられる。中国福建省付近の産と推測される。口縁部は玉縁状をなす。外面の色調にはむらがあり、白色の部分と黄色がかった色を呈する部分がある。内面はロクロ目が顕著で薄く釉がかかる。口縁部内面には縦方向のカンナ痕が顕著に残る。他の供伴遺物との関係から、この壺が廃棄されたのは12世紀後半とすることができる。

この壺の特異な点は漆の染み込んだ布で覆われていることである。出土した時点では多くの部分が漆布で覆われていたことが観察できたが、器面と布の間に泥が入っていた状態であり、多くの部分は取り上げの際に剥落した。残された部分を観察すると、意図的に漆の染みた布を器面に密着するように貼りつけたと考えられる。

外底面の無釉の部分にも漆の付着と布の痕跡が残されている。そして口縁から首の内面にも漆の痕跡がみられる。よって漆布が貼り付けられてた範囲は外底面から口縁外面までの外面全部、そして口縁内面の頸部付近までと推測される。この布の材質については未同定であるが麻布と推測される。

この漆布が白磁四耳壺に貼り付けられた意味については、現在答えを出しかねている。そもそもガラス質の磁器の表面に漆の染みた布を貼りつけても、乾燥すれば剥落してしまうはずである。現に出土した状態でも無釉の外底面には漆が付着しているが、釉のある他の部分は布と器面の間に泥が入り剥がれた状態であったのである。

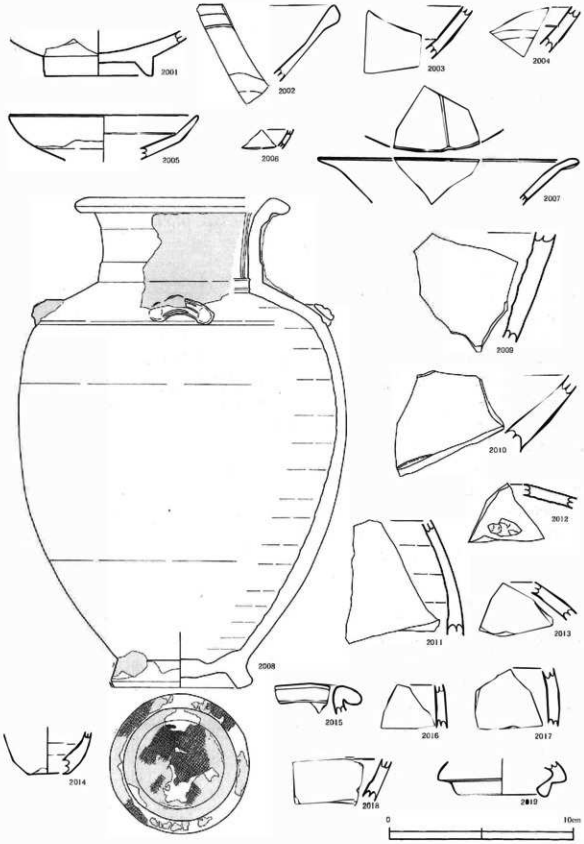
内部に何かを入れ密封するのが目的であったとも考えがたい、密封するのであれば、外底面まで覆う必要はなく、頸部から口唇にかけて覆えばよいであろう。また首部内面にも布を密着させる必要はない。

運搬などの際に器を保護するためにおこなったというのも考えがたい。梱包するのであればもっとやわらかい弾力性のあるもので覆った方が適切である。また中国産陶磁器が多量に出土する陸揚げ港である博多遺跡群でもこのような事例は無いという。

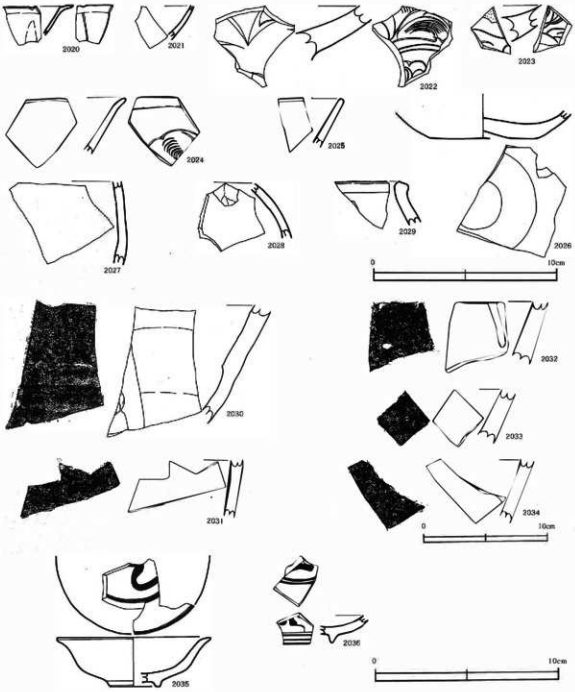
祭祀的な意味を与えるにしても出土状況には意図的に設置、埋納したような様子は看取できず、むしろ割れたものを廃棄したといった感じである。

貼りついている布には漆が染み込んでいる。この漆という点に注目して漆工の面から追求したい。蒔絵の工程の一つに「布着せ」という工程がある。これは漆を塗る前の素地を整えるために、素地に麻布を糊漆で貼る作業である。四耳壺の器面に底部から口縁外面、そして首部の内面にぴったりと布を漆で貼りつけている状況は、この「布着せ」に類似すると思われる。この白磁四耳壺は「布着せ」の工程が終わった段階で不都合（壺が割れたとか、布が剥落したなど）が生じたため廃棄されたと考えられないだろうか。即ちこれは白磁四耳壺を素地として、蒔絵の装飾をおこなうとした可能性が考えられる。だがこの考えには難点もある。それは上述のように白磁の釉がついた器面には漆布はなじまず、乾燥すれば剥落するという点である。また本遺物以外に、平泉遺跡群で陶磁器を素地とした蒔絵や漆塗り製品は1点も出土していない。今回の漆布を貼りつけた白磁四耳壺は試行的な行為、即ち試作による結果で、それが技法上の不都合、他の出土が無い理由づけになるかもしれない。

柳之御所遺跡ではこれまでに、刷毛、漉布、など漆工に関連する遺物が出土している。また中尊寺の漆芸は高度なレベルのもので、蒔絵や螺鈿の技術が平泉内に存在していたことを示している。これらのことは、今回のこの漆布が付着した白磁四耳壺も漆芸に関連したものである可能性を強める事象である。



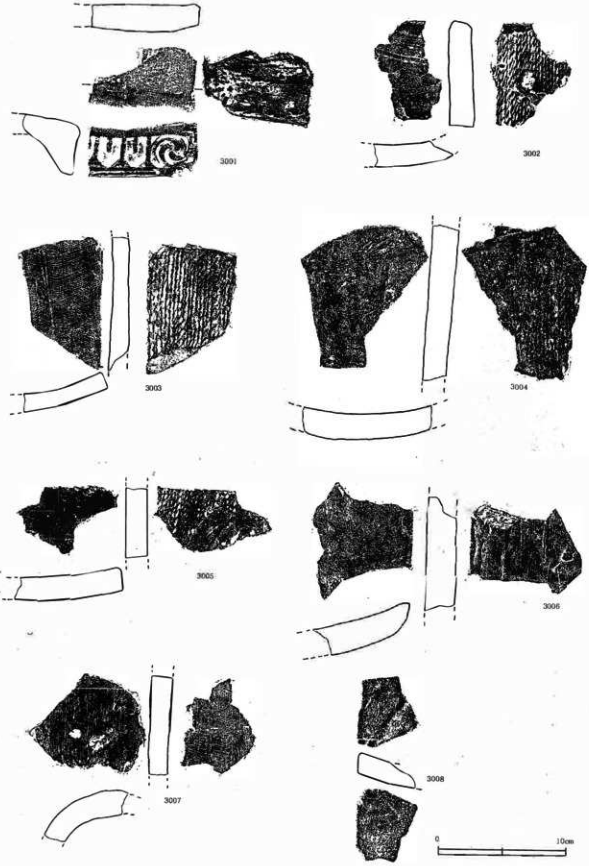
第31図　中国産陶磁器①（2001～2019）



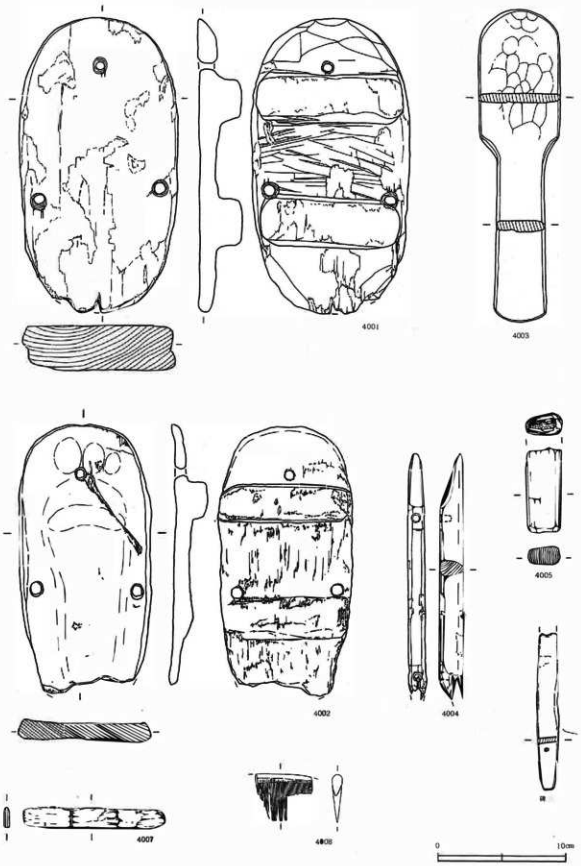
第32図　中国産陶磁器②（2020～2036）

5．瓦

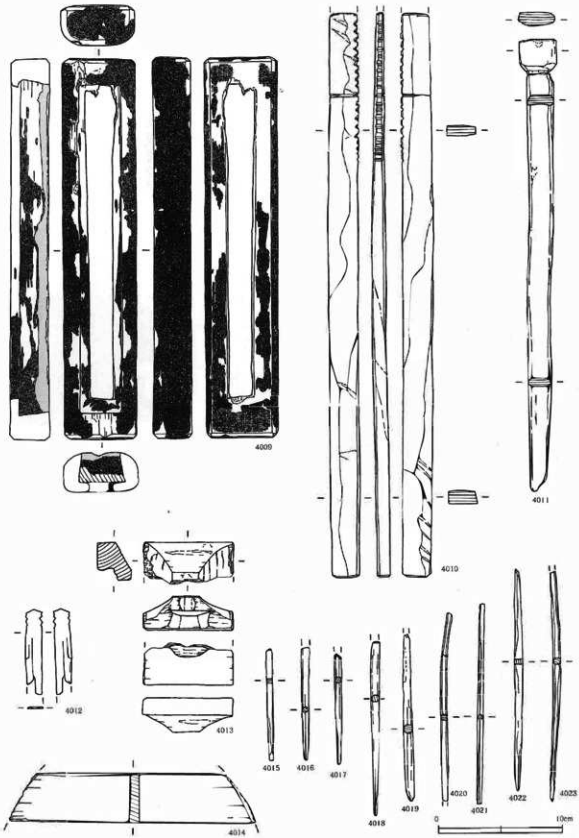
12世紀の瓦を8点図示した。出土した全品である。軒平瓦1点、平瓦6点、丸瓦1点である。平瓦としたものは熨斗瓦の可能性もあるが、その別を判断できないので平瓦として扱う。3001の軒平瓦は右端に巴文を配しその左からは除刻の剣頭文が連続する。3006は外面が暗灰色、破断面が赤褐色を呈し水沼産陶器に似る。水沼産の可能性が考えられる。



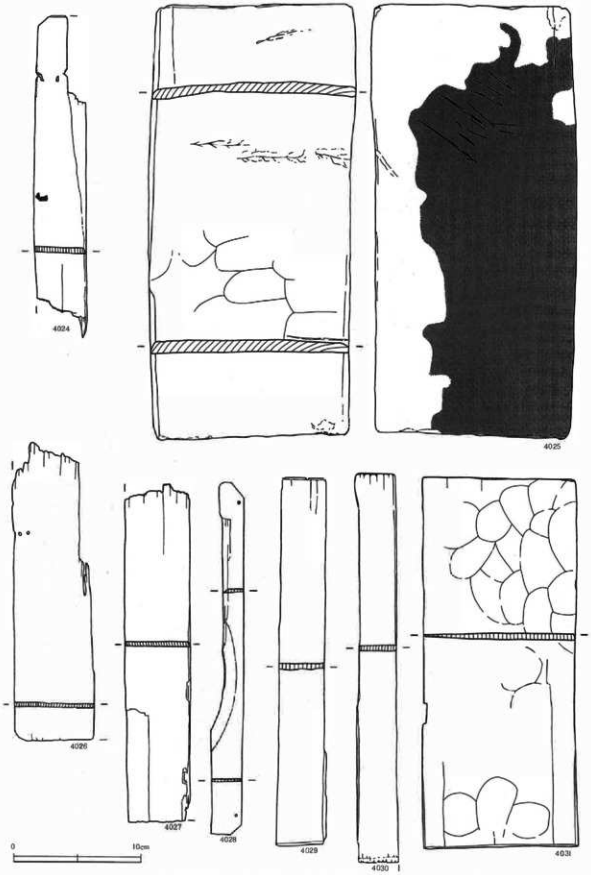
第33図　瓦（3001～3008）



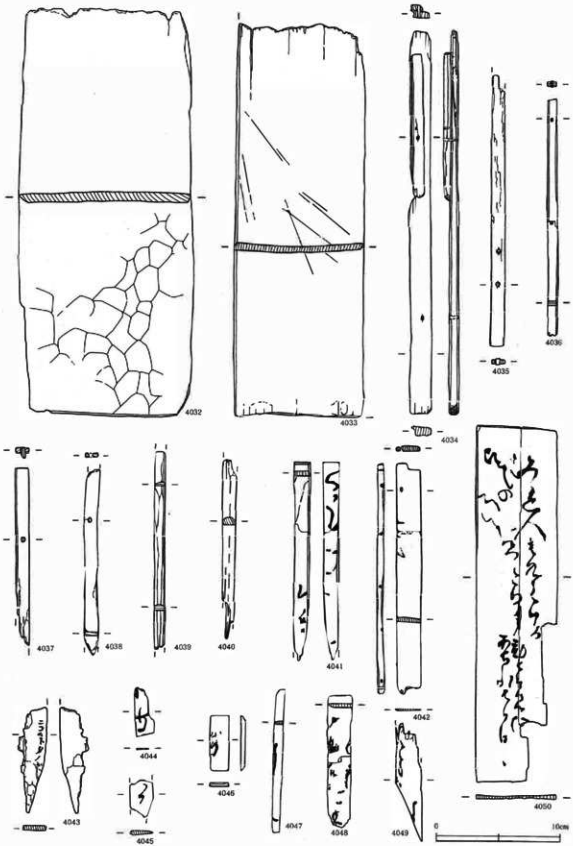
第34図　木製品①（4001～4008）



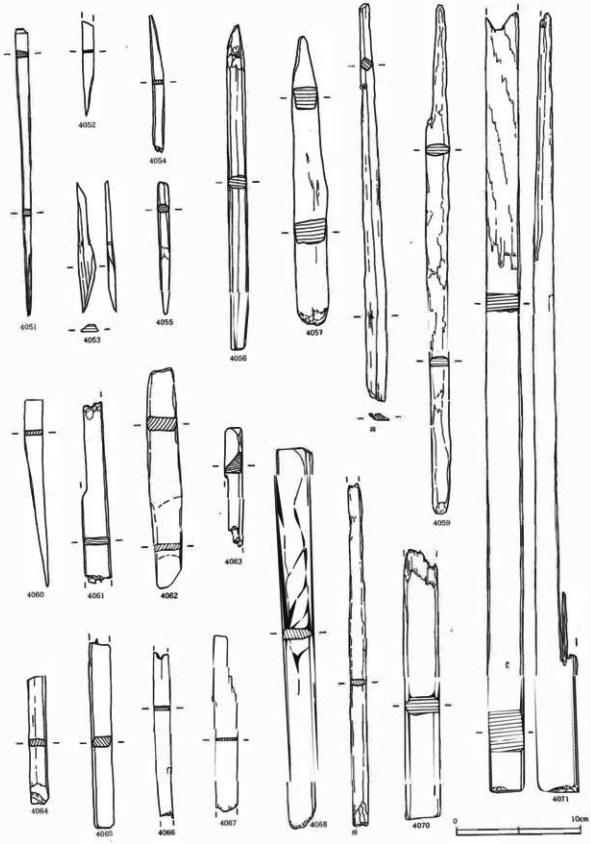
第35図　木製品②（4009～4023）



第36図　木製品③（4024～4031）



第37図　木製品④（4032～4050）



第38図　木製品⑤（4051～4071）

6. 木製品

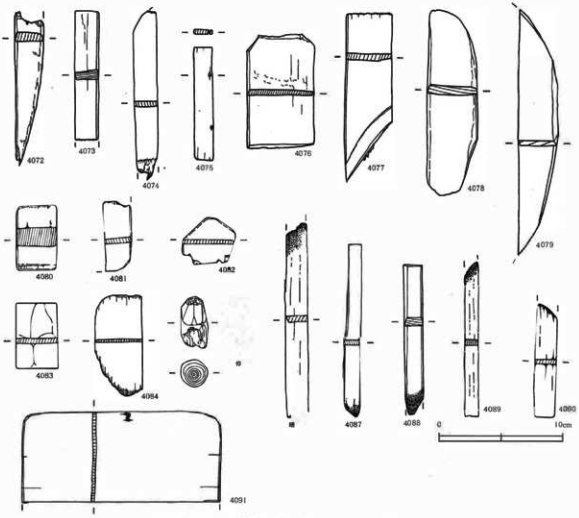
50SE3、3層出土のもの90点、37SE2出土のもの8点を図示した。

4009は断面形が蒲鉾形で、内側が刳り貫かれた形状である。外面、内面ともに漆が塗られている。底面の両端に布の痕跡がある。内面にも漆塗があることから、何らかの容器の類と考えられるが具体的な用途はわからない。

4010は細長い板状の製品で、一方の端部の側面に刻みが19個施されている。これらの刻みの間隔は均一ではない。端部から10番目の刻みに対応する正面と背面に線が刻まれている。また刻みのある端部をよく観察すると完結しているのではなく、刻み部分から折れていることがわかる。ここにも正面と背面にも線があり、そこから欠損しているのである。この欠損部の線と10番目刻みの線の間の長さは6.75cmである。全体の厚さは均一ではなく刻みのある側に比べると刻みの無い側がやや厚い。用途、製品名は不明である。類似した形態の資料が富山県立山町辻遺跡で出土している。

4041～4050には墨書があるが、いずれもまだ未解読である。

4092～4098の部材は37SE2の埋土中から出土したが、井戸枠などのように組み合わさった状態で出土したのではなく、ばらばらの状態で出土した。よって、これらの部材が37SE2に伴うものであるか、他所から廃棄されたものかは判断できない。



第39図　木製品⑥（4072～4091）

第40図　木製品⑦（4092～4095）

第41図　木製品⑧（4096～4098）

7. 土製品

5001は柱状高台かわらけの高台部分である。5002、5003は素焼の火鉢、手あぶりの類と推定される。5002はその脚部、5003はその本体部分である。どちらの胎土も手づくねかわらけの胎土に似る。5004～5007は羽口である。5006、5007は12世紀のものではない可能性もある。

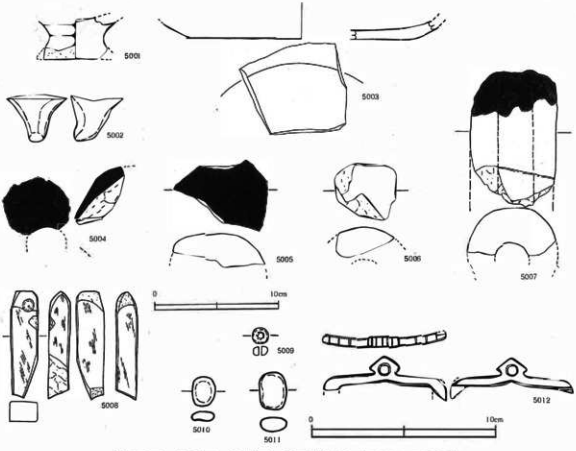
8. 石製品

5008は砥石で4面使用であるが、12世紀のものである確証はない。5009は材質が未同定であるがガラス製の玉と推定される。色は白色を呈する。時期は不詳。5010、5011は白色の石で碁石の可能性がある。

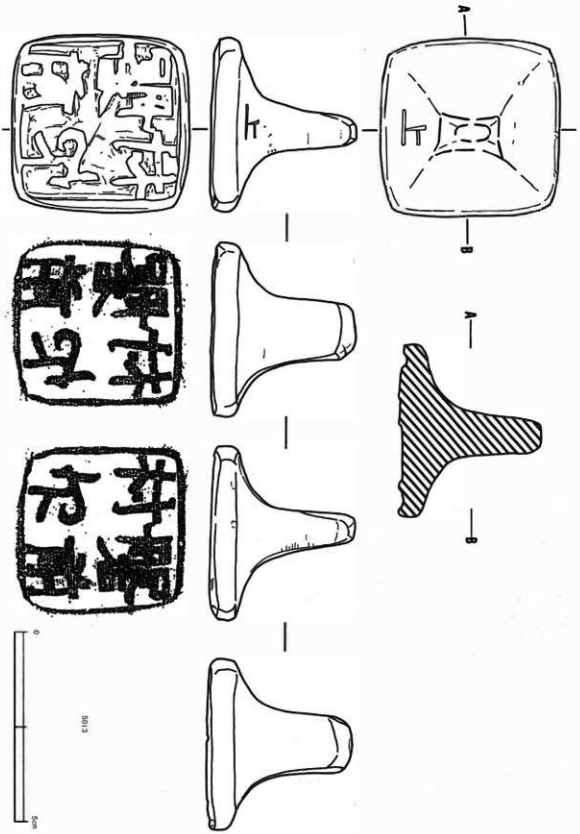
9. 金属製品

5012は提子（ひさげ）の金具である。銅製品である。90－67グリッドの遺構検出時に出土している。提子の容器部分の片口側と弦を連結するための金具である。提子の金具は他に平泉遺跡群では志羅山遺跡21次調査と66次調査で出土している。

5013は銅製の印章である。印面の大きさは縦4.7㎝、横4.7㎝で角はやや丸みを帯びておりほぼ正方形に近い形である。厚さは0.7㎝、印面から鈕頂部までの高さは3.7㎝、質量167.4ｇ、密度7.99ｇ／㎤で大きさのわりあいに非常に重量感がある。鈕の部分は弧状となっており、特に孔は穿たれていない（弧鈕無孔）。材質は銅で鋳造により製作され、型から取り出した後、細部を工具等で調整している。鈕脇部には、印の方向を明示する「上」の文字が刻印される。印面は陽刻、楷書体で「磐前村印」の文字が認められる。印部の



第42図　土製品、石製品、金属製品①（5001～5012）

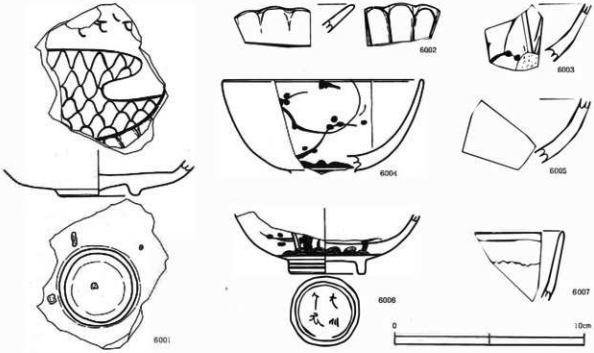


第43図　金属製品②（印章　5013）

凹部に、部分的に朱と思われる赤色顔料が残存しており、実際に使用した痕跡が認められる。印面の「磐前村印」は「いわさきむらいん」、あるいは「いわがさきむらいん」と読まれ、地名を表していると推定される。

10. 近世陶磁器

少量であるが近世の陶磁器が出土した。6001、6002は17世紀前半の肥前産磁器の皿である。別個体であるが、同じ文様と推定される。器面は灰色で貫須は深緑色を呈する。6003、6004、6006は1690～1780年の肥前産の磁器碗である。6005は肥前産、6007は瀬戸・美濃産の陶器碗である。どちらも18世紀前半頃のものである。



第44図　近世陶磁器（6001～6007）

番号	出土位置	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	重さ(g)	内面ナデ	色調	遺存度(%)	胎土	備考
1	50SE3 3層 P28	C3	14.2	—	3.0	130	指	灰白	100	密	内外面やや摩耗
2	50SE3 3層 P22	C3	14.0	—	3.3	180	指	灰白	100	密	内面に縦ボ目が残る
3	50SE3 3層 P24	C3	14.5	—	3.5	200	指	灰白	100	密	胎土に金雲母わずかに混入
4	50SE3 3層 P21-②	C3	14.2	—	3.2	160	指	灰黄	95	密	内面油煙付着
5	50SE3 3層 P5	C3	14.6	—	3.2	60	指	灰白	30	密	胎土に海綿状骨針、金雲母混入
6	50SE3 3層 P16	C3	16.2	—	3.0	140	指	褐灰	60	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
7	50SE3 3層 P35	C3	14.2	—	3.3	160	指	灰黄	90	密	胎土に海綿状骨針わずかに混入
8	50SE3 3層 P11	C3	14.9	—	2.7	150	指・皮	黄灰	80	密	胎土に海綿状骨針わずかに混入
9	50SE3 3層 P21-①	C3	14.2	—	2.8	100	指	黄灰	60	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
10	50SE3 3層 P30	C3	14.0	—	2.5	50	指	褐灰	30	やや粗	胎土に金雲母、海綿状骨針わずかに混入
11	50SE3 3層 P34	C3	14.8	—	2.8	65	指	褐灰	50	密	胎土に海綿状骨針わずかに混入
12	50SE3 3層 東半	C3	14.0	—	2.8	70	指	黄灰	40	密	内面わずかに油煙付着
13	50SE3 3層 西	C3	14.4	—	2.9	70	指	灰白	30	密	胎土に海綿状骨針わずかに混入
14	50SE3 3層 東半	C3	14.2	—	3.0	115	指・皮	灰黄	80	密	胎土に金雲母わずかに混入
15	50SE3 3d層	C3	14.4	—	2.8	50	指	淡黄	25	密	
16	50SE3 3層 東半	C3	14.1	—	2.9	130	指	にぶい黄	60	密	胎土に海綿状骨針わずかに混入
17	50SE3 3層 P23	C4	14.0	—	3.0	180	指	灰黄	100	密	口縁部内外面に油煙付着
18	50SE3 3層 P29	C5	13.8	—	2.6	180	指	灰白	95	やや粗	胎土に金雲母混入
19	50SE3 3層	C5	13.6	—	2.9	70	指・皮	褐灰	30	密	内底面皮による調整、口縁内面指調整
20	50SE3 3層 東半	C5	15.1	—	3.0	230	指・皮	褐灰	95	密	器厚が厚ぼったい
21	50SE3 3層 東半	D2	9.1	—	1.8	50	密	黄灰	75	やや粗	胎土に金雲母、海綿状骨針混入
22	50SE3 3層 P12	D2	14.4	—	2.9	170	指	灰白	100	密	全体的にやや摩耗
23	50SE3 3層 東半	D2	14.0	—	2.7	50	指	灰白	30	密	胎土に金雲母わずかに混入
24	50SE3 3層 P19	D3	9.1	—	1.9	50	指	灰黄	100	密	胎土に金雲母わずかに混入
25	50SE3 3層 P27	D3	9.3	—	1.8	60	指	黄灰	100	密	内面口縁部に油煙わずかに付着
26	50SE3 3層 P33	D3	8.4	—	1.7	60	指	黄灰	100	密	内面口縁部に油煙付着
27	50SE3 3層 P31	D3	8.4	—	1.6	45	指	にぶい黄	70	密	内面に油煙付着
28	50SE3 3層 P15	D3	9.3	—	2.1	45	指	灰白	60	密	外面に縦目がみえる
29	50SE3 3層 西半	D3	9.5	—	1.8	45	指	灰白	60	やや粗	胎土に金雲母、海綿状骨針混入
30	50SE3 3層 東半	D3	9.2	—	2.3	60	指	灰白	100	密	
31	50SE3 3層	D3	9.1	—	2.3	35	指・皮?	灰白	50	密	胎土に金雲母わずかに混入
32	50SE3 3層 P17	D3	8.6	—	1.5	45	不明	灰白	100	密	内外面摩耗している
33	50SE3 3層 東半	D3	9.0	—	2.1	30		灰白	40		
34	50SE3 3d層 P14	D3	13.9	—	3.0	190	指	黄灰	100	密	口縁外面こくわずかに油煙付着
35	50SE3 3層 P26	D3	14.3	—	3.3	195	指	黄灰	100	密	内外面油煙付着
36	50SE3 3層 P36	D3	14.9	—	2.6	95	指	灰白	50	密	外面に縦目痕 胎土に金雲母混入
37	50SE3 3層 P3	D3	13.6	—	2.6	20	指	淡黄	10	密	
38	50SE3 3層	D3	15.1	—	2.7	60	指	灰白	60	密	内外面摩耗著しい
39	50SE3 3層	D3	13.6	—	3.4	65	指・ヘラ	灰白	40	密	内底面ヘラ調整、口縁内面指調整
40	50SE3 3層	D3	14.4	—	3.0	60	指	黄灰	20	密、骨針微量	内外面油煙付着
41	50SE3 3層	D3	14.0	—	2.7	60	指	黄灰	20	密	内面油煙付着 胎土 金雲母混入
42	50SE3 3層	D3	15.5	—	3.0	60	指	淡黄	40	密	内面油煙付着 胎土 金雲母混入
43	50SE3 3層 東半	D3	11.7	—	1.9	80	指	灰白	60	密	内外面油煙わずかに付着
44	50SE3 3d層 P13	D4	14.0	—	3.0	150	指	黄灰	100	密	内面油煙付着
45	50SE3 3層 P26	D4	14.9	—	3.1	200	指	灰白	100	密	内面油煙付着 胎土に金雲母混入
46	50SE3 3層 P10	D4	13.8	—	2.9	115	指・ヘラ	灰白	80	密	内底面ヘラ調整、口縁内面指調整
47	50SE3 3層 P6	D4	15.0	—	3.0	185	指	灰白	100	やや粗	胎土に金雲母、海綿状骨針混入
48	50SE3 3層 P7	D4	14.3	—	3.0	70	指	灰白	25	やや粗	胎土に金雲母、海綿状骨針混入
49	50SE3 3層	D4	14.8	—	3.3	85	指	黄灰	50	密	胎土に金雲母、海綿状骨針わずかに混入
50	50SE3 3層 西半	D4	13.8	—	3.1	95	指・ヘラ	灰白	60	密	胎土に海綿状骨針混入
51	50SE3 3層 P32	ロクロ	9.2	5.8	2.2	65	ロクロ	灰白	80	粗(骨針多)	
52	50SE3 3層	ロクロ	8.9	6.2	1.6	40	ロクロ	褐灰	60	粗(骨針多)	
53	50SE3 3層	ロクロ	14.2	7.1	3.6	170	ロクロ	にぶい橙	90	粗(骨針多)	内外面摩耗している
54	50SE3 3層 P8	ロクロ	13.9	6.6	3.5	170	ロクロ	灰白	50	粗(骨針多)	
55	50SE3 3層 P20	ロクロ	14.4	6.9	3.6	265	ロクロ(ハケ)	灰白	100	粗(骨針多)	胎土に小豆大の輝1個混入
56	50SE3 P1	ロクロ	14.5	5.8	3.0	195	ロクロ	灰白	100	粗(骨針多)	
57	50SE3 3層 西半	ロクロ	13.8	6.6	3.8	100	ロクロ	灰黄	50	粗(骨針多)	内面摩耗している
58	50SE3 3層 西半	ロクロ	14.3	6.2	3.1	90	ロクロ	にぶい黄	40	粗(骨針多)	内面油煙わずかに付着
59	50SE3 3層 西半	ロクロ	15.2	9.0	3.1	175	ロクロ	灰白	70	粗(骨針多)	外面やや摩耗
60	50SE3 3層 西半	ロクロ	14.3	7.2	3.7	210	ロクロ(ハケ)	にぶい黄	100	粗(骨針多)	内外面やや摩耗している
61	50SE3 3層 P4	ロクロ	13.5	7.6	3.4	50		灰白	25	粗(骨針多)	内外面摩耗している
62	50SE3 3層 P9	ロクロ	14.7	6.3	2.4	65	ロクロ	灰白	50	粗(骨針多)	内外面非常に摩耗している
63	37SE2 底面NO.7	C3	12.7	—	(3.0)	140	指	灰白	100	密	胎土に金雲母わずかに混入

番号	出土位置	分類	法量(cm)				内面ナデ	色調	遺存度(%)	胎土	備考
			口径	底径	器高	重さ(g)					
64	37SE2 1層 北半	C3	15.3	—	3.4	145	指	淡黄	60	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
65	37SE2 1層 NO.9	C3	14.8	—	(2.8)	15	指	灰黄	5	密	
66	37SE2 5層 南半	C3	14.5	—	3.0	70	指	灰白	40	密	
67	37SE2 底面NO.11	C5	14.3	—	(3.0)	50	指	灰白	15	密	
68	37SE2 底面NO.4	C5	13.7	—	2.8	95	指	灰白	50	やや粗	胎土に細砂少量混入
69	37SE2 底面NO.13	D4	15.0	—	3.4	135	指→ヘラ	灰白	60	密	内底面ヘラ調整、口縁部指による調整
70	37SE2 底面NO.2	C5	14.8	—	3.2	230	指→ヘラ	灰白	90	やや粗	胎土に海綿状骨針、細砂少量混入
71	37SE2 底面NO.16	D3	10.0	—	1.6	80	指	黄灰	100	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
72	37SE2 底面	D3	9.7	—	1.8	65	指	灰白	95	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
73	37SE2 底面	D3	9.8	—	2.1	75	指	灰黄	60	やや粗	胎土に砂粒少量混入
74	37SE2 5層 南半	D3	10.2	—	1.7	50	指	灰黄	60	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混入
75	37SE2 底面NO.5	D3	15.7	—	3.2	240	指	灰白	100	密	
76	37SE2 底面NO.6	D3	14.1	—	3.3	220	指	灰白	100	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混入
77	37SE2 底面NO.14,NO.3	D3	15.7	—	3.0	230	指	灰白	100	やや粗	胎土に砂粒少量混入
78	37SE2 底面NO.10	D3	14.5	—	3.2	210	指	黄灰	95	やや粗	内面に油煙厚く付着
79	37SE2 底面	D3	13.8	—	2.8	190	指	灰黄	95	密	内面に油煙厚く付着
80	37SE2 底面NO.1	D3	14.9	—	3.0	150	指	灰白	60	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混じる
81	37SE2 9層	D3	14.1	—	3.0	80	指	灰白	40	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混じる
82	37SE2 9層	D3	16.0	—	3.3	190	指	灰白	70	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混じる
83	37SE2 底面	D3	16.4	—	2.8	90	指	褐灰	40	密	外面に縦目が残る
84	37SE2 2層 北半	D3	12.8	—	2.5	80	指	浅黄橙	60	密	胎土に金雲母わずかに混入
85	37SE2 底面NO.8	D4	15.2	—	2.3	240	指	淡黄	100	密	器厚が厚ぼったい
86	37SE2 NO.1	ロクロ	8.3	6.0	1.7	60	ロクロ	にぶい黄橙	95	粗(骨針多)	胎土に砂かほとんど混じらない
87	37SE2 2層 下南半	ロクロ	12.6	7.2	4.0	150	ロクロ	橙	60	粗(骨針多)	口縁部が角張る
88	37SE2 1層 北半	ロクロ	13.9	7.4	4.0	160	ロクロ	橙	60	粗(細砂多)	口縁部が角張る
89	37SE2 2層 下南半	ロクロ	12.8	7.2	2.6	120	ロクロ	浅黄橙	60	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
90	37SE2 NO.3	ロクロ	14.1	7.4	4.0	235	ロクロ	にぶい橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
91	37SE2 北半	ロクロ	13.6	6.7	4.5	170	ロクロ	浅黄橙	60	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
92	37SE2 底面NO.15	ロクロ	14.3	7.1	3.2	170	ロクロ	にぶい黄橙	80	粗(骨針多)	胎土に砂ほとんど混じらない
93	37SE2 1層 南半	ロクロ	14.2	6.8	3.3	110	ロクロ	浅黄橙	50	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
94	50SE1 NO.3	ロクロ	9.4	6.8	1.9	40	ロクロ	淡黄	30	粗(細砂多)	内外面摩耗
95	50SE1 NO.3	ロクロ	8.8	6.3	1.6	50	ロクロ	浅黄橙	80	粗(細砂多)	全体にゆがんでいる
96	50SE1 NO.9	ロクロ	9.9	7.2	1.9	50	ロクロ	浅黄橙	60	粗(細砂多)	内外面摩耗
97	50SE1 NO.12	ロクロ	9.0	6.3	1.9	40	ロクロ	浅黄橙	60	粗(細砂多)	内外面摩耗
98	50SE1 NO.13	ロクロ	9.8	6.9	1.7	40	ロクロ	にぶい黄橙	70	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
99	50SE1 NO.13	ロクロ	9.0	6.2	2.0	40	ロクロ	淡黄	60	粗(骨針多)	内外面摩耗
100	50SE1 NO.13	ロクロ	9.5	6.1	1.8	40	ロクロ	浅黄橙	60	粗(骨針多)	胎土に砂かほとんど混じらない
101	50SE1 NO.13	ロクロ	10.6	7.0	1.8	30	ロクロ	浅黄橙	30	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
102	50SE1 NO.13	ロクロ	9.9	7.3	2.2	90	ロクロ	にぶい黄橙	70	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混じる
103	50SE1 NO.14	ロクロ	8.9	5.2	1.8	50	ロクロ	浅黄橙	80	粗(骨針多)	内外面摩耗
104	50SE1 NO.15	ロクロ	9.0	6.6	1.8	60	ロクロ	浅黄橙	70	粗(骨針多)	内外面摩耗
105	50SE1 NO.19	ロクロ	7.7	6.0	1.7	20	ロクロ	にぶい黄橙	20	粗(骨針多)	胎土に砂かほとんど混じらない
106	50SE1 NO.14	C3	15.3	—	3.2	70	指	淡黄	40	密	内面に油煙ワイ付着
107	50SE1 NO.1	ロクロ	14.6	6.3	4.0	100	ロクロ(ヘラ)	浅黄橙	50	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
108	50SE1 NO.2	ロクロ	15.4	7.9	3.4	210	ロクロ	淡橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど含まない
109	50SE1 NO.4	ロクロ	13.8	7.0	3.1	215	ロクロ	浅黄橙	100	粗(骨針多)	ほとんど摩耗していない
110	50SE1 NO.5	ロクロ	15.8	8.5	3.1	210	ロクロ	浅黄橙	70	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
111	50SE1 NO.6	ロクロ	15.4	8.0	3.5	170	ロクロ	灰白	60	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
112	50SE1 NO.7	ロクロ	15.0	8.2	3.2	210	ロクロ	浅黄橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
113	50SE1 NO.8	ロクロ	15.3	8.0	4.0	230	ロクロ	浅黄橙	60	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
114	50SE1 NO.8	ロクロ	15.0	7.0	3.8	150	ロクロ	浅黄橙	50	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
115	50SE1 NO.9	ロクロ	15.1	8.7	3.4	240	ロクロ	灰白	60	粗(細砂多)	内外面摩耗
116	50SE1 NO.9	ロクロ	—	8.0	(3.0)	160	ロクロ	淡橙	60	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
117	50SE1 NO.10	ロクロ	14.4	—	(3.4)	50	ロクロ	浅黄橙	20	粗(骨針,細砂多)	外面摩耗
118	50SE1 NO.11	ロクロ	14.0	7.5	3.8	220	ロクロ	淡黄	90	粗(細砂多)	内外面摩耗
119	50SE1 NO.12	ロクロ	15.2	7.3	3.4	190	ロクロ	浅黄橙	90	粗(細砂,骨針多)	内外面摩耗
120	50SE1 NO.13	ロクロ	16.0	7.8	3.4	150	ロクロ	浅黄橙	60	粗(骨針多)	内外面摩耗
121	50SE1 NO.13	ロクロ	14.7	6.5	4.4	300	ロクロ	浅黄橙	100	粗(骨針多)	内外面摩耗　器形ゆがんでいる
122	50SE1 NO.14	ロクロ	15.0	6.5	3.6	100	ロクロ	浅黄橙	50	粗(骨針多)	内外面摩耗
123	50SE1 NO.16	ロクロ	15.2	7.3	3.6	90	ロクロ	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂をほとんど含まない
124	50SE1 NO.17	ロクロ	14.3	6.0	3.0	80	ロクロ	浅黄橙	30	粗(細砂多)	内外面摩耗
125	50SE1 NO.18	ロクロ	14.5	6.5	3.9	225	ロクロ	浅黄橙	70	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
126	50SE1 1層	ロクロ	14.7	8.0	3.6	120	ロクロ	浅黄橙	50	粗(骨針多)	胎土に細砂をほとんど含まない

番号	出土位置	分類	法量(cm)			内面ナデ	色調	遺存度(%)	胎土	備考
			口径	底径	器高	重さ(g)				
127	50SD8 集中東	C3	8.8	—	1.8	40	指	灰白	60	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混入
128	50SD8 集中東	C3	10.8	—	1.8	70	不明	灰白	95	やや粗	内外面摩耗 胎土骨針少量混入
129	50SD8 集中東	C3	15.8	—	3.5	200	指	灰白	100	やや粗	内外面摩耗
130	50SD8 集中東	C3	15.4	—	3.1	190	指	灰白	95	やや粗	内外面摩耗
131	50SD8 集中東	C3	16.0	—	3.4	190	指	灰白	70	やや粗	内外面摩耗
132	50SD8 集中東	C3	14.9	—	2.6	170	指	灰白	90	密	外面摩耗
133	50SD8 集中東	C4	14.6	—	3.2	70	指	灰白	25	密	体部外面に縦ミガキ目あり
134	50SD8 埋土	C4	13.8	—	2.8	60	指	浅黄橙	30	密	器形ゆがんでいる
135	50SD8 集中東	D3	15.0	—	3.0	80	指	浅黄橙	60	密	内外面摩耗
136	50SD8 埋土	C5	15.7	—	3.9	150	指	灰白	70	密	外面やや摩耗
137	50SD8 集中東	C5	13.6	—	3.4	115	指	灰白	60	密	内外面摩耗
138	50SD8 集中東	D3	10.1	—	2.1	45	指	浅黄橙	60	密	内外面摩耗
139	50SD8 集中東	D3	8.8	—	1.8	50	指	灰白	60	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
140	50SD8 集中東	D3	15.2	—	3.6	220	指・ヘラ	灰白	10	密	内底面ヘラ調整、口縁内面指調整
141	50SD8 集中東	D3	15.6	—	3.7	235	指・ヘラ	灰白	95	密	内底面ヘラ調整、口縁内面指調整
142	50SD8 集中東	D4	15.4	—	3.4	210	指・ヘラ	灰白	100	密	内底面ヘラ調整、口縁内面指調整
143	50SD8 集中東	ロ7	8.4	5.3	1.7	50	ロ7	浅黄橙	70	粗(骨針多)	器形ゆがんでいる
144	50SD8 集中東	ロ7	9.5	5.4	2.0	80	ロ7	浅黄橙	70	粗(骨針多)	胎土に細砂も多量に含む
145	50SD8 集中東	ロ7	9.3	6.2	1.8	70	ロ7	灰白	80	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針も多量に含む
146	50SD8 埋土	ロ7	9.9	7.3	1.6	50	ロ7	浅黄橙	50	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針も多量に含む
147	50SD8 埋土	ロ7	8.9	5.1	1.7	50	ロ7	にぶい黄橙	70	粗(骨針多)	内外面摩耗
148	50SD8 埋土	ロ7	9.2	5.9	2.0	60	ロ7	淡橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
149	50SD8 埋土	ロ7	14.1	5.8	1.5	60	ロ7	淡橙	100	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
150	50SD8 集中西	ロ7	9.2	6.5	1.5	60	ロ7	橙	80	粗(細砂,骨針多)	内外面摩耗
151	50SD8 集中東	ロ7	8.3	6.1	1.6	90	ロ7	浅黄橙	95	粗(細砂,骨針多)	内外面摩耗している
152	50SD8 集中西	ロ7	9.6	7.4	1.6	45	ロ7	浅黄橙	60	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
153	50SD8 集中東	ロ7	9.9	6.5	1.8	90	ロ7	灰白	95	粗(骨針多)	内外面摩耗している
154	50SD8 集中東	ロ7	8.4	5.8	1.2	40	ロ7	浅黄橙	70	粗(細砂多)	内外面摩耗している
155	50SD8 集中西	ロ7	13.9	6.6	1.5	60	ロ7	淡橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
156	50SD8 集中西	ロ7	9.3	4.5	1.9	60	ロ7	灰白	50	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
157	50SD8 集中西	ロ7	9.7	5.3	1.9	70	ロ7	橙	100	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
158	50SD8 集中東	ロ7	8.9	6.6	1.2	60	ロ7	浅黄橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
159	50SD8 集中東	ロ7	9.6	5.2	1.7	90	ロ7	浅黄橙	95	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
160	50SD8 埋土	ロ7	9.4	4.8	2.4	80	ロ7	灰白	95	粗(骨針多)	底部が突き出る
161	50SD8 集中東	ロ7	14.6	6.6	3.7	235	ロ7	にぶい黄橙	90	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
162	50SD8 集中東	ロ7	15.0	8.7	3.7	120	ロ7	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどなし
163	50SD8 集中東	ロ7	14.4	9.0	3.3	80	ロ7	浅黄橙	80	粗(細砂多)	内外面摩耗
164	50SD8 集中東	ロ7	14.4	8.2	3.5	140	ロ7	浅黄橙	50	粗(骨針多)	内外面摩耗
165	50SD8 集中西	ロ7	14.0	6.7	3.6	100	ロ7	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
166	50SD8 集中西	ロ7	13.9	8.0	3.5	90	ロ7	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
167	50SD8 集中西	ロ7	14.7	8.0	3.0	220	ロ7	浅黄橙	100	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
168	50SD8 集中西	ロ7	14.3	7.0	3.8	195	ロ7	浅黄橙	90	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
169	50SD8 埋土	ロ7	14.3	7.4	3.5	140	ロ7	浅黄橙	50	粗(細砂多)	ほとんど摩耗していない
170	50SD8 集中東	ロ7	14.5	6.8	3.4	180	ロ7	浅黄橙	100	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
171	50SD8 集中東	ロ7	14.2	6.5	3.8	90	ロ7	淡橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ごく少量
172	50SD8 集中東	ロ7	14.6	6.0	3.3	100	ロ7	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
173	50SD8 集中東	ロ7	14.6	5.6	3.9	85	ロ7	浅黄橙	50	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
174	50SD8 集中西	ロ7	15.4	8.4	4.0	110	ロ7	橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
175	50SD8 集中東	ロ7	13.1	7.5	3.1	100	ロ7	灰白	50	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
176	50SD8 集中東	ロ7	14.0	8.0	3.4	220	ロ7	淡橙	95	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
177	50SD8 集中東	ロ7	14.0	6.2	2.7	80	ロ7	浅黄橙	40	粗(骨針多)	内外面摩耗している
178	50SD8 集中東	ロ7	15.0	5.7	3.3	170	ロ7	浅黄橙	80	粗(骨針多)	内外面摩耗している
179	50SD8 集中東	ロ7	15.0	7.5	3.5	235	ロ7	浅黄橙	90	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
180	50SD8 集中東	ロ7	16.0	8.0	4.0	190	ロ7	浅黄橙	70	粗(細砂多)	内外面摩耗
181	50SD8 集中東	ロ7	15.0	7.1	3.3	145	ロ7	浅黄橙	50	粗(細砂多)	内面摩耗
182	50SD8 集中東	ロ7	14.5	6.4	3.4	200	ロ7	灰白	80	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
183	50SD8 集中西	ロ7	14.8	7.8	2.9	205	ロ7	浅黄橙	100	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
184	50SD8 集中東	ロ7	14.5	9.5	3.2	230	ロ7	淡橙	90	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
185	50SD8 集中東	ロ7	13.8	7.4	3.0	160	ロ7	浅黄橙	90	粗(骨針多)	内外面摩耗
186	50SD8 集中東	ロ7	14.9	6.7	3.0	150	ロ7	灰白	70	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
187	50SD8 集中西	ロ7	14.7	7.7	2.9	180	ロ7	浅黄橙	100	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
188	50SD8 集中東	ロ7	15.1	7.5	4.0	175	ロ7	浅黄橙	95	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
189	50SD8 集中西	ロ7	15.0	8.4	3.6	225	ロ7	橙	90	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入

番号	出土位置	分類	法量(cm)				内面ナデ	色調	遺存度(%)	胎土	備考
			口径	底径	器高	重さ(g)					
190	50SD8 集中西	ロクロ	14.5	6.8	3.3	100	ロクロ	浅黄橙	60	粗(骨針多)	内外面摩耗
191	50SD8 集中東	ロクロ	14.4	5.8	3.6	175	ロクロ	浅黄橙	80	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
192	50SD8 集中東	ロクロ	14.8	6.8	4.1	205	ロクロ	灰白	90	粗(骨針多)	内外面摩耗している
193	50SD8 集中東	ロクロ	12.5	6.1	3.8	200	ロクロ	淡橙	95	粗(骨針多)	底部が突き出している
194	50SB3 P116埋土	C3	14.4	—	3.0	175	指	灰白	100	密	外面わずかに摩耗
195	50SB3 P116埋土	C3	13.3	—	2.8	225	指	浅黄橙	100	密	器形ゆがんでいる
196	50SB3 PP23	C3	14.0	—	2.6	170	指	浅黄橙	100	密	胎土に海綿状骨針少量混入
197	50SB3 P116埋土	C5	15.0	—	2.9	120	指	灰白	70	密	外面に縦ミガキ目残る
198	50SB3 PP14	C5	13.5	—	2.7	25	指	灰白	10	密	
199	50SB3 PP116埋土	D2	13.7	—	3.3	200	指	灰白	100	密	
200	50SB3 PP90柱根	D3	8.8	—	2.1	30	指	灰白	50	粗(骨針多)	ロクロかわらけの胎土に似る
201	50SB3 PP116埋土	D3	14.3	—	2.9	150	指	浅黄橙	90	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
202	50SB3 P116埋土	D4	14.8	—	3.1	135	指	灰白	60	やや粗	胎土に海綿状骨針微量混入
203	50SB3 PP23	D4	14.6	—	3.1	195	指	浅黄橙	100	やや粗	胎土に海綿状骨針微量混入
204	50SB3 PP50	ロクロ	12.9	6.3	3.3	50	ロクロ	橙	25	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
205	50SA1(88-63) 埋土	C3	12.6	—	2.9	25	指	灰白	5	やや粗	胎土に海綿状骨針少量混入
206	50SA1(88-63) 埋土	C3	13.8	—	2.8	35	指	灰白	5	密	
207	50SD1 埋土	C5	14.0	—	2.8	50	指	灰白	10	密	
208	50SA10 埋土最上層(88-69)	D3	8.4	—	1.3	20	指	灰白	20	やや粗	胎土に海綿状骨針わずかに混入
209	50SK1 埋土	D3	14.4	—	2.5	40	指	灰白	15	やや粗	内外面摩耗している
210	50SA1(88-63) 東側埋土	D3	16.4	—	2.9	25	指	灰白	10	密	内外面に油煙付着
211	50SK2 埋土	D4	9.4	—	1.6	50	指	灰白	100	密	体部外面に縦ミガキ目痕あり
212	50SD1 埋土	D4	15.0	—	2.8	25	指	灰白	5	密	
213	50SA1 埋土(86-63)	ロクロ	9.6	5.1	1.9	50	ロクロ	浅黄橙	70	粗(細砂多)	胎土に海綿状骨針少量混入
214	50SD1 埋土	ロクロ	8.4	7.0	1.8	214	ロクロ	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
215	50SK3 1層	ロクロ	8.4	6.1	1.7	25	ロクロ	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
216	50SE2 上層	ロクロ	8.2	5.1	1.5	40	ロクロ	灰白	70	粗(骨針多)細砂多	内外面摩耗している
217	50SK3 1層	ロクロ	9.0	5.8	1.8	45	ロクロ	浅黄橙	60	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
218	50SK3 1層	ロクロ	8.8	5.2	1.8	35	ロクロ	浅黄橙	50	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
219	50SA2 埋土	ロクロ	—	5.9	(1.4)	25	ロクロ	浅黄橙	10	粗(骨針)細砂多	内外面摩耗
220	50SA2 埋土	ロクロ	—	6.4	(1.6)	10	ロクロ	浅黄橙	5	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
221	50SK3 1層	ロクロ	13.1	5.2	3.7	115	ロクロ	浅黄橙	40	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
222	50SK3 1層	ロクロ	15.6	6.1	4.5	145	ロクロ	灰白	50	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない
223	50SK 1層東	ロクロ	13.1	8.0	3.1	35	ロクロ	浅黄橙	10	粗(骨針多)	胎土に細砂少量混入
224	50SA1 埋土(88-63)東側	ロクロ	13.8	7.0	3.8	70	ロクロ	浅黄橙	30	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
225	50SE2 1層	ロクロ	13.8	5.6	4.1	55	ロクロ	灰白	25	粗(骨針多)	胎土に細砂ほとんど混入しない
226	50SA1 埋土(88-63)	ロクロ	12.9	6.5	3'9	30	ロクロ	灰白	15	粗(骨針多)	胎土に細砂の混入ほとんどない

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1001	常滑	片口鉢	体下～底	37SE2 2層	12C	灰褐	内面摩耗している
1002	常滑	片口鉢	体部	90-65検出時	12C	明赤褐	1001と同一 備体か 内面摩耗
1003	常滑	片口鉢	体部	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰赤	1001、1002と同一 備体か
1004	常滑	片口鉢	口縁部	50SB1 布掘中	3型式?	灰	口唇部面取りなし 内面自然釉
1005	常滑	片口鉢	口縁部	98-69検出時	3型式?	灰	口唇部面取りなし
1006	常滑	片口鉢	体部	87-63検出時	12C	灰	内面摩耗著しい
1007	常滑	片口鉢	体部	50SB1 布掘中	12C	灰	内面やや摩耗
1008	常滑	片口鉢	体部	37SD9 埋土(90-62)	12C	灰	内面やや摩耗
1009	常滑	三筋壺	体下～底	81-62 ベルトカット	12C	にぶい赤褐	沈線は細い 櫛目状か?
1010	常滑	広口壺	口縁部	50SE3 3層	12C	にぶい赤褐	口縁内面に沈線状のくぼみがない
1011	常滑	広口壺	口縁部	91-62検出時	12C	にぶい褐	口縁内面に沈線状のくぼみがある
1012	常滑	広口壺	胴部	37SE1 1層	12C	暗オリーブ	37SE1は現代のかくらん 外面自然釉
1013	常滑	広口壺	体部上半	37SD9 埋土(88-69)	12C	褐	器厚が厚ぼったい 外面自然釉
1014	常滑	広口壺	体部上半	37SE2 2層 下部角平	12C	暗灰黄	外面上半自然釉
1015	常滑	広口壺	体部上半	87-67 検出時	12C	オリーブ	外面自然釉
1016	常滑	広口壺	体部下半	96-68 検出時	12C	灰	
1017	常滑	広口壺	体部上半	37SE1 埋土	12C	暗オリーブ	外面自然釉
1018	常滑	広口壺	体部	85-65 表土	12C	灰オリーブ	
1019	常滑	広口壺	体部	42SD1 埋土	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1020	常滑	広口壺	体部	87-62 表土	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1021	常滑	広口壺	体部上半	93-67 検出時	12C	暗オリーブ	外面自然釉

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1022	常滑	甕	体部上半	50SD2 埋土 (83-67)	16型式	オリーブ黒	粗い胎土　12C前半か
1023	常滑	甕	体部下半	37SE1 埋土	12C	暗褐	42SD1 埋土(85-67)からも出土
1024	常滑	甕	体部下半	42SD1 埋土(85-67)	12C	暗褐	1023と同一個体　88-70表土からも出土
1025	常滑	甕	体下～底	97-69 検出時	12C	黒褐	底部～底辺部の破片
1026	常滑	甕	体部下半	97-69 検出時	12C	黒褐	1025と同一個体
1027	常滑	甕	体部下半	37SE1 1層	12C	褐	緻密な胎土
1028	常滑	甕	体部下半	87-62 表土	12C	黒	
1029	常滑	甕	体部下半	90-64 検出時	12C	褐灰	
1030	常滑	甕	体部上半	98-69 検出時	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1031	常滑	甕	体部上半	50SD2 埋土 (83-67)	12C	オリーブ灰	外面自然釉
1032	常滑	甕	体部下半	37SE2 3層 南半	12C	褐灰	
1033	常滑	甕	肩部	37SE1 埋土	12C	オリーブ黄	外面自然釉
1034	常滑	甕	肩部	88-61 37SD9 埋土	12C	灰	外面自然釉
1035	常滑	甕	体部上半	98-69 検出時	12C	灰	外面摩耗？
1036	常滑	甕	肩部	92-63 検出時	12C	浅黄	
1037	常滑	甕	体部上半	50SD2 埋土 (83-67)	12C	暗オリーブ	外面自然釉
1038	常滑	甕	体部上半	50SD2 埋土 (83-67)	12C	灰オリーブ	器厚が薄く　広口壺の可能性もある
1039	常滑	甕	体部下半	86-62 表土	12C	灰オリーブ	
1040	常滑	甕	体部下半	86-69 表土	12C	灰オリーブ	
1041	常滑	甕	体部下半	50SA1 埋土 (86-63)	12C	黒褐	外面に自然釉の流れ
1042	常滑	甕	体部下半	88-68 検出時	12C	褐灰	内外面摩滅
1043	常滑	甕	体部下半	50SD1 埋土	12C	にぶい黄	
1044	常滑	甕	体部下半	90-63 検出	12C	暗褐	外面に自然釉の流れ
1045	常滑	甕	体部下半	89-64 攪乱	12C	黒褐	外面に窯体付着
1046	常滑	甕	体部下半	42SD1 埋土	12C	褐灰	
1047	常滑	甕	体部	95-68 検出時	12C	褐	内面に自然釉付着
1048	常滑	甕	体部下半	37SD9 埋土(90-62)	12C	灰	
1049	常滑	甕	体部下半	42SD1 埋土(86-67)	12C	褐	
1050	常滑	甕	体部下半	37SD9 埋土(91-62)	12C	灰	内外面摩滅
1051	常滑	甕	体部下半	50SD8 埋土	12C	灰	内外面自然釉　外面は自然釉が剥落
1052	常滑	甕	体部下半	50SE3 1～2層	12C	灰	外面に指ナデ？による調整
1053	常滑	甕	体部下半	87-63 検出時	12C	褐灰	内面自然釉
1054	常滑	甕	体部	37SD9 埋土(91-62)	12C	にぶい褐	
1055	渥美	壺系統？	口縁部	50次調査区内表採	12C	灰	片口部分のつけ根の破片
1056	渥美	片口鉢	口縁部	50SE3 3層	12C	灰	1057と同一個体
1057	渥美	片口鉢	完形	50SE3 3層	12C	灰	閉面合成で完形の状態を示した　内面著しく摩耗
1058	渥美	片口鉢	体下～底	37SE1 埋土	12C	灰	内面摩耗, 外面にヘラケズリ調整がない
1059	渥美	片口鉢	体部下半	37SD9 埋土(90-62)	12C	灰白	内面摩耗
1060	渥美	片口鉢	口縁部	50SE3 3層	12C	灰	50SD2 埋土からも出土　1061と同一個体
1061	渥美	片口鉢	口縁部	50SE3 3層	12C	灰	片口部付けねの破片　1066と1067と同一個体
1062	渥美	片口鉢	高台部	50SK1 埋土	12C	灰白	高台部が剥がれたもの
1063	渥美	片口鉢	口縁部	50SB1 布掘中	12C	灰白	口唇部面取りあり
1064	渥美	片口鉢	口縁部	50SE3 1～2層	12C	褐灰	口唇部欠損
1065	渥美	片口鉢	体部	50SD1 埋土	12C	褐灰	内面摩耗
1066	渥美	片口鉢	高台部	50SK1 埋土	12C	灰白	高台部が剥がれたもの
1067	渥美	片口鉢	高台部	50SK1 埋土	12C	灰白	高台部が剥がれたもの
1068	渥美	壺	体下～底	50SD2 埋土 (83-67)	12C	灰白	外面底辺部に回転ヘラケズリ
1069	渥美	壺	肩部	93-66 検出時	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1070	渥美	壺	肩部	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1071	渥美	壺	体部上半	93-67 検出時	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1072	渥美	壺	体部上半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰オリーブ	外面自然釉
1073	渥美	壺	体部下半	90-64 検出時	12C	灰	1074と同一個体
1074	渥美	壺	体部下半	91-67 検出時	12C	灰	
1075	渥美	壺	体部下半	50SD1 布掘中	12C	灰	外面に自然釉の流れ
1076	渥美	壺	体部	50SE3 3層	12C	灰	外面上半に自然釉　1077と同一個体
1077	渥美	一括	体部	50SE3 3層	12C	灰	下側破断面に漆付着
1078	渥美	壺	体部下半	50SD5 埋土(85-67)	12C	灰白	
1079	渥美	壺	体部上半	50次調査区内表採	12C	灰	
1080	渥美	壺	体部上半	50次調査区内表採	12C	褐灰	外面に横走する沈線がある
1081	渥美	一括	体下～底	37SE1 1層	12C	灰褐	
1082	渥美	甕	口縁部	50SD8 埋土	12C	灰褐	口縁部かなり開く
1083	渥美	甕	口縁部	90-62 検出時	12C	灰	口縁部が立つ器形
1084	渥美	甕	口縁部	37SE1 1層	12C	灰白	
1085	渥美	甕	口縁部	50SE3 3層	12C	灰	

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1086	須美	壺	口縁部	90-65 検出時	12C	灰黄褐	
1087	須美	壺	口縁部	90-63 検出	12C	灰	外面に灰釉刷毛塗り
1088	須美	壺	口縁部	37SE1 埋土	12C	灰	
1089	須美	壺	口縁部?	37SE2 1層	12C	灰褐	口縁部破片と思われる
1090	須美	壺	口縁部	50SE3 3a層	12C	灰	
1091	須美	壺	肩部	37SE1 埋土	12C	褐灰	
1092	須美	壺	肩部	37SE1 1層	12C	灰	外面に灰釉刷毛塗り
1093	須美	壺	体部下半	37SE2 1層	12C	灰褐	1094～1101と同一個体
1094	須美	壺	体部下半	37SE2 埋土 上部	12C	灰褐	
1095	須美	壺	体部下半	88-66 攪乱	12C	灰褐	
1096	須美	壺	体部	89-67 攪乱	12C	灰褐	
1097	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰褐	
1098	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰褐	
1099	須美	壺	体部下半	90-64 検出時	12C	灰褐	50SD1 埋土からも出土
1100	須美	壺	体部下半	50SD2 埋土(93-67)	12C	灰褐	
1101	須美	壺	体部下半	88-64 検出	12C	灰褐	
1102	須美	壺	体部下半	50SD5 埋土(85-67)	12C	暗灰	1103、1104と同一個体
1103	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-67)	12C	暗灰	
1104	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	褐灰	
1105	須美	壺	体部下半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰	1106～1108と同一個体
1106	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰	
1107	須美	壺	体部下半	88-61 検出時	12C	褐灰	
1108	須美	壺	体部上半	37SD9 埋土(91-62)	12C	灰	
1109	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	黄灰	1110と同一個体
1110	須美	壺	体部上半	50SD5 埋土(85-67)	12C	黄灰	
1111	須美	壺	体部下半	50SB1 布掘り中	12C	灰オリーブ	1112と同一個体
1112	須美	壺	体部上半	90-64 検出時	12C	灰	
1113	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	褐灰	1114と1115と同一個体
1114	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-67)	12C	褐灰	
1115	須美	壺	体部下半	50SB1 布掘中	12C	灰	
1116	須美	壺	体部下半	37SD9 埋土(90-62)	12C	灰	1117、1118と同一個体
1117	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰	
1118	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰	
1119	須美	壺	体部	37SE1 埋土	12C	灰	外面に灰釉の飛沫付着
1120	須美	壺	体部上半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰オリーブ	外面に灰釉の刷毛塗り
1121	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰	
1122	須美	壺	体部下半	90-68 検出時	12C	灰白	外面に自然釉
1123	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(86-67)	12C	灰	
1124	須美	壺	体部下半	85-62 検出	12C	灰	
1125	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰	内面に自然釉
1126	須美	壺	体部下半	90-68 検出時	12C	黒	
1127	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(86-67)	12C	灰白	
1128	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	褐灰	
1129	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰	
1130	須美	壺	体部下半	50次調査区表採	12C	灰	
1131	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰	
1132	須美	壺	肩部	50SE3 1～2層	12C	灰白	外面に釉付着、刷毛塗りか
1133	須美	壺	体部下半	50SE3 1～2層	12C	暗灰	
1134	須美	壺	体部下半	37SE1 1層	12C	黄灰	
1135	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	暗灰	
1136	須美	壺	体部下半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰白	内面に自然釉の飛沫付着
1137	須美	壺	体部下半	42SD1 埋土	12C	灰	
1138	須美	壺	体部下半	91-67 検出	12C	灰	内面に自然釉付着
1139	須美	壺	体下～底	37SE2 1層	12C	暗灰	内面に自然釉付着
1140	須美	壺	体下～底	37SE1 埋土	12C	灰褐	50SD7埋土(85-68)からも出土
1141	須美	壺	体部下半	37SE1 1層	12C	にぶい褐	
1142	須美	壺	体部下半	85-62 検出時	12C	黒	
1143	須美	壺	体部下半	37SD9 埋土(91-62)	12C	灰	
1144	須美	壺	体部下半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰	
1145	須美	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	暗オリーブ	外面に自然釉
1146	須美	壺	体部上半	87-66 検出時	12C	灰オリーブ	外面に自然釉
1147	須美	壺	体部下半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰白	
1148	須美	壺	体部下半	50次調査区表採	12C	褐灰	
1149	須美	壺	体部上半	50SD5 埋土(85-67)	12C	暗オリーブ	外面に自然釉
1150	須美	壺	体部上半	90-68 検出時	12C	暗オリーブ	外面に自然釉

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1151	縄文	壺	体部上半	91-67 検出時	12C	灰オリーブ	外面に自然釉
1152	縄文	壺	体部下半	91-62 検出時	12C	灰	
1153	縄文	壺	体部上半	37SE1 埋土	12C	灰オリーブ	外面に自然釉
1154	縄文	壺	体部上半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰	
1155	縄文	壺	体部下半	85-62 検出時	12C	黄灰	
1156	縄文	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰	
1157	縄文	壺	体部下半	37SE1 1層	12C	褐灰	
1158	縄文	壺	体部下半	91-62 検出時	12C	褐灰	
1159	縄文	壺	体部下半	50SB3 PP20埋土	12C	褐灰	
1160	縄文	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	黄灰	
1161	縄文	壺	体部下半	90-63 検出時	12C	灰白	
1162	縄文	壺	体部下半	90-62 検出時	12C	暗灰	
1163	縄文	壺	体部下半	37SD9 埋土(91-62)	12C	褐	内面に自然釉
1164	縄文	壺	体部上半	86-68 検出時	12C	灰	輪積み部分が剥落
1165	縄文	壺	体部上半	88-67 検出時	12C	灰オリーブ	外面に釉付着
1166	縄文	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	黒褐	内面にも押印あり
1167	縄文	壺	体部下半	37SE1 1層	12C	灰	
1168	縄文	壺	体部下半	50SD1 埋土	12C	褐	
1169	縄文	壺	体部上半	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰	
1170	縄文	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-67)	12C	灰	
1171	縄文	壺	体部上半	98-67 検出	12C	灰	薄手の破片
1172	縄文	壺	体部下半	84-67 かくらん	12C	灰	
1173	縄文	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-67)	12C	暗灰	
1174	縄文	壺	体部下半	96-69 検出時	12C	褐灰	
1175	縄文	壺	体部上半	42SD1 埋土	12C	灰オリーブ	外面に自然釉
1176	縄文	壺	体部下半	42SD1 埋土(86-67)	12C	灰	
1177	縄文	壺	体部下半	37SD9 埋土(91-62)	12C	灰	
1178	縄文	壺	体部下半	37SE1 埋土	12C	灰	
1179	縄文	壺	体部下半	37SD9 埋土(90-62)	12C	褐灰	
1180	縄文	壺	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	12C	灰	
1181	須恵器系	杯	体部下半	37SE1 1層	12C	褐灰	胎土 橙色を呈する ロクロ調整
1182	須恵器系	壺	体部	42SD1 埋土(85-67)	12C	灰	内面被熱？によりはじけている
1183	須恵器系	壺	体部	50SE3 1～2層	12C	褐灰	
1184	須恵器系	壺	体部	93-66 検出時	12C	暗褐	内面 横位 斜位になでている
1185	須恵器系	壺	体部	93-66 検出時	12C	灰	内面なで調整
1186	須恵器系	壺	体部	37SD9 埋土(88-61)	12C	灰	内面にもタタキ目がある
1187	須恵器系	壺	体部	42SD1 埋土	12C	灰	やや軟質の胎土
1188	水紹	片口鉢	体下～底	37SE2 2層	12C前半？	赤黒	胎土 赤褐色を呈する
1189	瀬戸系	壺	体部	50SB1 布掘中	13C以降？	黒褐	東北地方在地産の13～14Cの陶器か？

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1190	須恵器	坏	体部	87-68 検出時	9～10C	褐灰	胎土に海綿状骨針混入する
1191	須恵器	坏	底部	42SD1 埋土(85-68)	9～10C	褐灰	底面回転糸切痕
1192	須恵器	坏	体部	90-62 検出時	9～10C	灰	壺の体部片の可能性もある
1193	須恵器	壺	体部	50SK1 埋土	9～10C	灰	
1194	須恵器	壺	肩部	50SE3 1～2層	9～10C	灰黄	37SD9 埋土(91-62)からも出土
1195	須恵器	壺	体部	50SE3 1～2層	9～10C	黒褐	内面にカキ目とアテ具痕
1196	須恵器	壺	体部	50SE2 埋土	9～10C	暗灰	1194, 1195と同一個体
1197	須恵器	長頸壺	肩部	89-63 検出時	9～10C	灰	
1198	須恵器	壺	体部	50SK3 1層	9～10C	暗灰	長頸壺の可能性もある
1199	須恵器	大甕	体部	37SD9 埋土(91-62)	9～10C	灰	胎土 赤褐色
1200	須恵器	大甕	体部	50SE3 1～2層	9～10C	灰	胎土 赤褐色
1201	須恵器	大甕	体部	91-62 検出時	9～10C	灰	胎土 赤褐色
1202	須恵器	大甕	体部	90-63 検出時	9～10C	灰	胎土 灰色
1203	須恵器	大甕	体部	86-69 検出時	9～10C	灰	胎土 灰色
1204	須恵器	大甕	体部	50SB1 布掘中	9～10C	黒褐	内面アテ具痕 胎土 赤褐色
1205	須恵器	大甕	体部	50SB1 布掘中	9～10C	灰	内面アテ具痕 胎土 赤褐色

番号	種類	器種	部位	出土位置	太宰府分類	太宰府の年代観	その他
2001	白磁	碗	底部	91-63 検出時	II	11C後半～12C前半	化粧土あり　外面高台は露胎
2002	白磁	碗	口縁部	91-67 検出時	IV	12C	玉縁口縁
2003	白磁	碗	体部	50SE1 表採	IVか	12C	全体に摩滅している
2004	白磁	碗	体部	50SD5 埋土(85-67)	IVか	12C	
2005	白磁	皿	口縁部	37SD9 埋土(91-62)	VII	11C後半～12C前半	化粧土あり
2006	白磁	皿か	体部	PP586 掘方	VIか	11C後半～12C前半	化粧土あり　細片のため確実に皿かどうか不明
2007	白磁	皿	口縁部	50SE3 3層 P8	VI1b	12C	内面に白堆線あり
2008	白磁	四耳壺	完形	50SE3 3層	III系	12C	外面全体と口縁内面に漆のしみ込んだ布付着
2009	白磁	″壺	体部	37SE1 1層	II系	11C後半～12C前半	化粧土あり　大形の壺か
2010	白磁	四耳壺	体部	37SD9 埋土(90-62)	III系	12C	底辺部の破片
2011	白磁	四耳壺	体部	50SA13 埋土	II系	11C後半～12C前半	内面無釉　化粧土はっきりしないが釉に貫入が入る
2012	白磁	四耳壺	体部	37SD9 埋土(90-62)	II系	11C後半～12C前半	内面無釉　化粧土
2013	白磁	四耳壺	体部	37SD9 埋土(90-62)	II系	11C後半～12C前半	内面無釉　化粧土
2014	白磁	壺	体部下半	37SE2 1層	III系	12C	小形の壺
2015	白磁	四耳壺	口縁部	50SD5 埋土(85-67)	III系	12C	
2016	白磁	四耳壺	体部	42SD1 埋土	III系	12C	外面摩滅している
2017	白磁	四耳壺	体部	37SD9 埋土(88-61)	III系	12C	
2018	白磁	四耳壺	体部	37SD9 埋土(88-61)	III系	12C	全体に摩滅
2019	白磁	蓋	下半部	50次調査区内表採	III系	12C	外面下部無釉　蓋と考えられる
2020	青白磁	皿	口縁部	50SD3 埋土	青白磁	12Cか	薄手のつくり
2021	青白磁	碗？	体部	50SB1 布掘中	青白磁	12Cか	小破片のため器種ははっきりしない
2022	青白磁	皿	体部	50SD5 埋土(85-67)	青白磁	12Cか	二次被熱している
2023	青白磁	皿	体部	37SE1 埋土	青白磁	12Cか	2022と同一個体
2024	青磁	碗	口縁部	42SD1 埋土(85-68)	I 3	12C	
2025	青磁	碗	口縁部	89-69 検出時	I	12C	文様の有無はっきりしない
2026	青磁	皿	底部	50次調査区内表採			
2027	陶器	″壺	体部	89-61 検出時	陶器	12Cか	外面に褐釉　2028と同一個体
2028	陶器	壺	体部	89-61 検出時	陶器	12Cか	内面には薄い釉
2029	陶器	壺	口縁部	50次調査区内表採	陶器	12Cか	外面緑色がかった釉
2030	陶器	壺	体部	50SD2 埋土(93-67)	陶器	12Cか	外面に褐釉の流れあり　2031～2034同一個体
2031	陶器	壺	体部	96-68 検出時	陶器	12Cか	外面に褐釉　内面無釉
2032	陶器	壺	体部	50SD2 埋土(93-67)	陶器	12Cか	かなり大形の壺
2033	陶器	″壺	体部	50SD2 埋土(92-68)	陶器	12Cか	
2034	陶器	壺	体部	50SD2 埋土(92-68)	陶器	12Cか	
2035	染付	皿	完形	86-69 検出時	—	15C後半～16C	底面に砂付着　端反りの皿　小野B1類
2036	染付	皿	体部下半	42SD1 埋土(85-68)	—	15C後半～16C	端反りと思われる　小野B1類か

番号	器種	出土位置	その他
3001	軒平瓦	85-61 検出時	右端に三巴文であとは陰刻の刻銘文が連続　灰色の硬い胎土
3002	平瓦	37SE1 埋土	灰色の硬い胎土
3003	平瓦	37SE1 埋土	灰色の硬い胎土
3004	平瓦	37SE2 2層	黒色～橙色の軟い胎土
3005	平瓦	50SE3 1～2層	灰色の硬い胎土
3006	平瓦	89-68 検出時	断面が赤褐色の硬い胎土　水沿産か
3007	丸瓦	37SE1 1層	灰色で中や軟い胎土
3008	平瓦	50SD5 埋土	黒色～橙色の軟い胎土　全体に摩耗著しい

番号	器種	出土位置	法量(cm) 現存長	最大幅	厚さ	その他
4001	下駄	50SE3 3層 東半	23.1	12.5	3.6	連歯下駄　取上げNO.13
4002	下駄	50SE3 3層 東半	21.2	10.5	2.6	連歯下駄　歯が摩耗している　石足　取上げNO.10
4003	箆	50SE3 3層	24.5	6.4	0.8	図の裏面 炭化している　取上げNO.7
4004	糸巻	50SE3 3層	19.5	1.9	1.3	図の下端部欠損　取上げNO.16
4005	刀子の柄？	50SE3 3層	6.7	2.8	1.6	確実に刀子の柄かどうか不明
4006	扇子の骨	50SE3 3層	12.4	1.7	0.4	上半部欠損
4007	ものさし	50SE3 3層	11.2	1.6	0.5	鯨尺 相当か　腐食著しい
4008	櫛	50SE3 3層	4.5	3.7	0.8	
4009	不明	50SE3 3層 東半	31.1	5.9	3.3	黒漆塗り　底面両端に布付着　取上げNO.15

番号	器種	出土位置	法量(cm)			その他
			最大長	最大幅	厚さ	
4010	不明	50SE3 3層	46.1	2.4	1.1	図の上端部は欠損しており、本来はまだ続く　取上げNO.9
4011	不明	50SE3 3層	36.9	3.0	1.1	刀の形代か？
4012	宝塔塔？	50SE3 3層	7.0	1.3	0.1	文字は確認できない
4013	宝塔	50SE3 3層	7.3	3.4	2.8	宝塔の笠、半分に欠損
4014	曲物の底	50SE3 3層	19.9	4.1	0.9	取上げNO.8
4015	箸	50SE3 3層	9.0	0.5	0.4	
4016	箸	50SE3 3層	9.1	0.5	0.4	
4017	箸	50SE3 3層	8.9	0.6	0.4	
4018	箸	50SE3 3層	14.0	0.7	0.5	
4019	箸	50SE3 3層	13.5	0.7	0.7	
4020	箸	50SE3 3層	15.3	0.5	0.5	
4021	箸	50SE3 3層	16.2	0.5	0.4	
4022	箸	50SE3 3層	17.9	0.6	0.4	
4023	箸	50SE3 3層	18.6	0.7	0.5	
4024	方形曲物	50SE3 3層	25.6	4.1	0.5	折敷と思われる　綴りの樹皮が残存
4025	折敷底板	50SE3 3層	33.7	16.0	1.0	スクリーントーン部分は炭化した部分　取上げNO.6
4026	方形曲物	50SE3 3層	23.7	6.3	0.3	折敷と思われる　綴りの穴がある
4027	折敷底板	50SE3 3層 東半	26.4	5.1	0.4	取上げNO.11
4028	折敷底板	50SE3 3層	27.9	2.5	0.3	釘穴あり
4029	折敷底板	50SE3 3層	29.2	3.9	0.5	
4030	折敷底板	50SE3 3層	30.9	3.2	0.5	
4031	折敷底板	50SE3 3層	29.5	12.6	0.5	板加工痕が顕著　取上げNO.17
4032	折敷底板	50SE3 3層	33.3	14.0	0.8	取上げNO.3
4033	折敷底板	50SE3 3層 東半	32.0	10.4	0.7	取上げNO.14
4034	折敷	50SE3 3層	31.2	1.7	1.1	縁の部分が残存
4035	折敷の縁	50SE3 3層	21.9	1.1	0.4	
4036	折敷の縁	50SE3 3層	19.3	0.8	0.4	
4037	折敷の縁	50SE3 3層	14.5	1.1	0.5	
4038	折敷の縁	50SE3 3層	15.2	1.1	0.4	
4039	折敷の縁	50SE3 3層	16.0	1.0	0.5	
4040	折敷の縁	50SE3 3層	14.6	1.1	0.6	
4041	墨書木片	50SE3 3層	16.2	1.3	0.4	墨書のある木片　取上げNO.22
4042	墨書木片	50SE3 3層	18.9	2.0	0.5	箱？の側板か　墨書がある　取上げNO.21
4043	墨書木片	50SE3 3層	8.7	2.2	0.4	墨書がある
4044	墨書木片	50SE3 3層	4.0	1.5	0.1	墨書がある　取上げNO.20
4045	墨書木片	50SE3 3層	3.1	1.9	0.4	墨書がある
4046	墨書木片	50SE3 3層	4.5	1.5	0.4	墨書がある
4047	墨書木片	50SE3 3層	11.7	0.8	0.3	墨書がある
4048	墨書木片	50SE3 3層	10.8	2.0	0.3	墨書がある　取上げNO.19
4049	墨書木片	50SE3 3層	9.7	2.1	0.1	墨書がある
4050	折敷底板	50SE3 3層	29.2	6.6	0.4	墨書がある
4051	不明	50SE3 3層	23.5	1.0	0.6	
4052	不明	50SE3 3層	7.8	0.9	0.2	
4053	不明	50SE3 3層	10.7	1.4	0.6	
4054	不明	50SE3 3層	11.2	0.9	0.3	
4055	不明	50SE3 3層	10.7	0.9	0.6	
4056	不明	50SE3 3層	26.8	1.6	1.0	図の上部 削って尖らせている
4057	不明	50SE3 3層	23.6	2.7	1.9	杭か？　取上げNO.5
4058	不明	50SE3 3層	32.4	1.7	1.1	釘穴？がある
4059	不明	50SE3 3層	41.5	1.9	0.9	
4060	不明	50SE3 3層	15.3	1.5	0.4	
4061	不明	50SE3 3層	14.7	2.1	0.6	
4062	不明	50SE3 3層	18.0	2.5	1.1	
4063	不明	50SE3 3層	9.7	1.5	1.7	面取りしている
4064	不明	50SE3 3層	10.5	1.5	0.6	
4065	不明	50SE3 3層	15.5	1.6	0.8	

番号	器種	出土位置	法量(cm)			その他
			最大長	最大幅	厚さ	
4066	不明	50SE3 3層	13.6	1.4	0.3	
4067	不明	50SE3 3層	14.4	1.8	0.2	
4068	不明	50SE3 3層	31.0	2.9	0.9	
4069	不明	50SE3 3層	28.0	1.8	0.5	
4070	不明	50SE3 3層	22.0	2.8	1.5	
4071	不明	50SE3 3層	63.6	2.8	3.4	製材している　取上げNO.12
4072	不明	50SE3 3層	12.5	2.3	0.8	
4073	不明	50SE3 3層	10.5	2.0	0.8	取上げNO.1
4074	不明	50SE3 3層	13.8	1.9	0.5	
4075	不明	50SE3 3層	9.2	1.5	0.4	釘穴あり
4076	不明	50SE3 3層	9.3	5.4	0.5	
4077	不明	50SE3 3層	13.8	3.7	0.6	
4078	不明	50SE3 3層	15.1	4.0	0.7	取上げNO.2
4079	不明	50SE3 3層	20.0	3.3	0.4	取上げNO.4
4080	不明	50SE3 3層	5.4	3.2	1.6	
4081	不明	50SE3 3層	5.7	2.3	0.5	
4082	不明	50SE3 3層	3.8	4.3	0.4	
4083	不明	50SE3 3層	5.4	3.4	0.4	
4084	不明	50SE3 3層	8.2	3.9	0.2	取上げNO.18
4085	不明	50SE3 3層	4.2	2.3	2.3	自然の樹皮が残る
4086	不明	50SE3 3層	15.9	1.8	0.5	端部が炭化している
4087	不明	50SE3 3層	14.1	1.5	0.4	端部が炭化している
4088	不明	50SE3 3層	12.1	1.5	0.7	端部が炭化している
4089	不明	50SE3 3層	12.6	1.1	0.5	端部が炭化している
4090	不明	50SE3 3層	9.3	1.7	0.4	端部が炭化している
4091	方形曲物	37SE2 底面直上	16.1	7.3	0.3	縦りの樹皮が残る　取上げNO.12
4092	部材	37SE2 埋土	109.8	10.5	7.5	腐食著しい　取上げNO.1
4093	部材	37SE2 埋土	107.4	11.1	7.2	取上げNO.2
4094	部材	37SE2 埋土	109.5	11.0	7.7	加工痕顕著　取上げNO.3
4095	部材	37SE2 埋土	88.5	6.6	4.5	他の部材よりも小形　取上げNO.7
4096	部材	37SE2 埋土	111.9	11.1	8.1	取上げNO.4
4097	部材	37SE2 埋土	111.0	11.4	8.2	腐食著しい　取上げNO.5
4098	部材	37SE2 埋土	111.6	10.8	7.6	図の上部にえぐりあり　取上げNO.6

番号	器種	出土位置	その他
5001	柱状高台	90-68 検出時	柱状高台かわらけの高台部　橙色を呈する　底面回転糸切
5002	土製鈴	37SE2 2層	火鉢, 手あぶりの脚か　本体から剥落している
5003	大型土師	93-66 検出時	火鉢, 手あぶりの類か　手づくねかわらけと同じ胎土
5004	羽口	90-68 検出時	羽口の先端部　12Cのものかどうかは不明
5005	羽口	93-69 検出時	12Cのものかどうかは不明
5006	羽口	91-67 検出時	12Cのものかどうかは不明
5007	羽口	調査面②(92-68)	溝には連構者を付していない　12Cの可能性が高い
5008	磁石	42SD1 埋土(86-67)	4面使用　12Cのものかは不明
5009	ガラス玉	93-67 検出時	12Cのものかどうかは不明, 確実にガラス製か否か未同定
5010	碁石?	37SE2 2層	白色の石　12Cの可能性が高い
5011	碁石?	50SK1 埋土	白色の石　12Cの可能性が高い
5012	量子の金具	90-67 検出時	銅製品　提子の片口部に付つ金具　12Cのもの
5013	印章	50SE3 3層	銅製品　印面に「磐前村印」とある

番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6001	磁器皿	88-68 検出時	—	4.0	(2.1)	灰色	染付	肥前	17C前半	6002と同じ文様
6002	磁器皿	42SD1 埋土(86-87)	—	—	(1.2)	灰色	染付	肥前	17C前半	
6003	磁器碗	86-69 検出時	—	—	(3.0)	白色	染付	肥前	1690~1780年	
6004	磁器碗	85-69 検出時	10.6	—	(4.9)	白色	染付	肥前	1690~1780年	
6005	陶器碗	93-64 表採	—	—	(3.1)	淡黄色	透明釉	肥前	18C前	
6006	磁器碗	91-67 検出時	—	4.0	(3.2)	白色	染付	肥前	1690~1780年	外底面に「大明年製」
6007	陶器碗	86-69 検出時	—	—	(3.2)	灰色	鉄釉, 黄灰釉	瀬戸・美濃	18C前半	尾呂茶碗

第Ⅳ章　まとめ

1．遺構

(1) 12世紀の検出遺構

今回の50次調査区においては、重複関係、軸方向から12世紀の遺構が4時期に分けられる。Ⅰ期→Ⅱ期→Ⅲ期古→Ⅲ期新である。Ⅲ期については新、古どちらに所属するか判らないもの、両方にまたがっていると判断される遺構は単にⅢ期の所属とする。

Ⅰ期　概ねN－17°－Eの軸方向
　塀　50ＳＡ2、50ＳＡ13、　建物　50ＳＢ6、50ＳＢ10、50ＳＢ19
　井戸　50ＳＥ3もⅠ期所属の可能性があるが、確定できない。

Ⅱ期　塀、溝はN－3°－Eの軸方向、建物は概ねN－19°－E
　塀　50ＳＡ5、50ＳＡ7　溝　50ＳＤ8　建物　50ＳＢ5、50ＳＢ8、50ＳＢ9
　塀、溝と建物の軸方向が異なるのが問題点といえる。

Ⅲ期　新、古に分けられる。軸方向は概ねN－11°－E
　Ⅲ期古　塀　50ＳＡ6、50ＳＡ8　建物　50ＳＢ4、50ＳＢ17
　Ⅲ期新　建物　50ＳＢ3、50ＳＢ16　井戸　37ＳＥ2
　Ⅲ期（新、古どちらか不明のもの、または新、古両方にまたがるもの）　塀　50SA1、50SA10、50SA12　建物　50SB7、50SB18

(2) 12世紀の遺構についての課題

今次調査区では12世紀の遺構は4時期の変遷に分けられる。しかし現段階ではこの変遷と㈶埋文センターの報告書で示された、堀内部地区の中心建物群の変遷とはすり合わせをおこなっていない。これについては直接重複する遺構が少なく、切り合い関係から判断するのは難しい状態である。唯一、今回のⅢ期古に属する50ＳＢ4が中心建物群の28ＳＢ4（42ＳＢ1）と重複し、50ＳＢ4が新しいことが判っている。また中心建物群は重複するどの建物も軸方向は正方位であり、今次調査区のように、様々な角度を示してはいない。このように軸方向から遺構の同時性を判断するのも難しい状況である。よって、ここでは中心建物群と今次調査区の遺構についての変遷のすり合わせはおこなわず、平成12年度以降の調査で得られる成果に期待し、それらと合わせた全体の遺構変遷を示したい。

また今次のⅡ期に属する塀50ＳＡ5は、以前の調査で検出されているＬ字形の塀23ＳＡ1の東辺の北側の延長線上にある。材の並び方も共通しており、両者は同一の塀の可能性が指摘できる。この塀の存在から、堀内部地区をさらに囲画する、軸方向がほぼ正方位の約120m四方の塀の存在が想定される。この想定の塀の北辺、西辺は現在まだ未検出であり、その実証には今後の調査での検出が必要となる。

また上の囲画する塀とは別に、軸方向がN－11°－Eの塀50ＳＡ1が、西側に長く伸びることが以前の調査の図面から判断できた。この長さは今回検出分も合わせて約60m分にも及ぶ。この50ＳＡ1を北辺とし、また今回検出の50ＳＡ10、50ＳＡ12を東辺とし、軸方向がN－11°－Eの塀で、堀内部地区を方形に囲画し

ている可能性がある。この塀の存在の実証も上と同様に今後の調査での検出が必要である。

(3) 近世の遺構

今次の調査区では藩政時代の「平泉御蔵場」に関連する遺構が検出された。「御蔵場」とは年貢米を納入し集積、出荷する施設である。

建物は50ＳＢ１、50ＳＢ２、50ＳＢ11、50ＳＢ12、50ＳＢ13、50ＳＢ14、50ＳＢ15が属する。

溝は42ＳＤ１が「平泉御蔵場」に属する。42ＳＤ12、50ＳＤ２、50ＳＤ３、50ＳＤ４、50ＳＤ５、50ＳＤ６、50ＳＤ７は近世以降の所属であるが「平泉御蔵場」に属する遺構か判断できない。近代の所属の可能性もある。

2. 遺物

出土遺物の多くは12世紀のものである。特筆すべき遺物には銅印「磐前村印」（掲載番号5013）と、ほぼ完形の漆の染みた布の付着する白磁四耳壺（掲載番号2008）がある。

銅印は国立歴史民俗博物館の永嶋正春教授に自然科学的分析を依頼しており現在分析中である。その結果については今後の柳之御所遺跡関係の刊行物に掲載したい。

なお銅印の印面は文字の彫り込みが浅く、写真などで見ると、かなり磨耗しているような印象を受ける。しかし実際に実物を観察すると、ほとんど印面の磨耗が無いことが看取される（斎藤、羽柴の観察）。今後この印章の議論の中で、使用の頻度の点から「磨耗度」が問題になろうから、この点を記述しておく。

白磁四耳壺は、ほぼ完形であるということに加え、漆の染みた布の付着の意味が注目される。だが、現在この意味についてはっきりした答えを見つけかねている状況である。今後広く、美術工芸の分野などから事例を調べる必要がある。また布、漆の自然科学的分析を行う必要もある。

また木製品では、折敷にある墨書の内容が未解読でこれも課題として残っている。そして、特異な漆塗りの木製品（掲載番号4009）、刻み目のある棒状製品（掲載番号4010）の用途、製品名の解明も課題である。

提子の金具（掲載番号5012）は平泉遺跡群では志羅山遺跡21次、66次調査に続く３例目の事例である。宴会儀礼の具体的な姿を復元する上で重要な資料といえる。

12世紀の遺物の他に16世紀、近世の遺物が少量ではあるが出土している。12世紀以外の遺構の所属の時期を決定するためには欠くことのできない遺物である。12世紀の遺構構成を知るためには、12世紀以外の遺構を抽出する必要があるのである。今後も12世紀以外の遺物についても注目していく必要がある。

本書は柳之御所遺跡第50次調査についての概要を示した「概報」である。今後の調査の進展、研究の深化によって、本書に記された内容に訂正が必要とされる部分が生じる可能性も高い。「第Ⅳ章　まとめ」に示した課題も含め、第１次３ヵ年計画の終了以後に刊行予定の本報告において、訂正、課題について対応したい。

第Ⅴ章　付編

岩手県平泉町柳之御所遺跡出土銅印

国立歴史民俗博物館
平川　南

一、出土銅印

1．釈文

「磐　村
　前　印」

2．保存状態

保存状態はきわめて良好で、銅色の輝きは出土後に若干失われているが、現状でも部分的に光沢をとどめている。

3．印の特徴

(1) 印面の法量

本印は、縦4.7cm、横4.7cm、高さ3.7cm、重量167.4ｇ。従来知られている古代印に関していえば、郷印の法量約3.3cmよりも郡印の平均的数値に近い。

(2) 印面の形状

本印は、８～９世紀代の四隅の鋭い正方形の印面ではなく、やや隅丸の方形である。さらに本印の印面は明瞭な反りが認められ、外郭が印文よりやや低くなっている。

(3) 彫り方

印面の文字の彫り方はきわめて浅く、鋳出後にタガネ工具で部分的に字画の切れ目を補ったり、底部をさらっており、字画の断面が逆U字形を呈する。一方、８～９世紀代の出土印は、彫りが深く、字画の断面が逆V字形となっている。

(4) 鈕の形状

本印の鈕は弧鈕無孔である。８～９世紀代の現存印によるかぎり、弧鈕無孔は公印（倉印・郡印・軍団印など）に共通し、私印は原則として菩鈕有孔である。郷印は菩鈕有孔であり、いわば私印の範疇に位置づけられている。

参考までに、伝世印である宮城県七ヶ浜町鼻節神社蔵「国府厨印」は、縦4.1cm、横4.1cm、高さ3.9cm、重量124.2ｇである。鈕の形状（弧鈕無孔）は、現在知られている古代印のなかで、「磐前村印」に最も近似している。

(5) 字体

本印の字体は楷書体である。一般に、郡印は８世紀後半の一時期に楷書体の郡印がつくられるものの、平安期のものは中央の八省印や各国印と同じ篆書体であり（郡印の字体の変遷については拙稿「古代郡印論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集、1999年参照）、公印は篆書体が基本であったと考えられる。これに対して、郷印を含む私印は一般に楷書体であり、その点からすると私印的な要素が強い。

ただし郡印にも例外があり、正暦２(991) 年の文書に押印された「添上郡印」は楷書体である。この楷書体は、８世紀半ばにつくられる楷書体の郡印とは明らかに異なり、印影をみる限り筆画に全く勢いがなく、線質は太く平板である。本印の字体も太く平板であり、その点で「添上郡印」と共通した特徴をもっている。

(6) 鋳造技術

本銅印は現段階ではX線透過撮影を実施していないが、「磐前村印」の見かけの密度は7.99≒8.0g/cm³である。

これまでの全国各地の出土印・伝世印の永嶋正春氏による分析結果は、古代印はほぼ7.0g/cm³前後、近世印はほぼ8.5g/cm³前後という大きな傾向を示している。

この密度の相違は、鋳造技術の差を端的に示唆している。古代印と想定される銅印は、X線透過撮影によると、全面に平均的な鬆（ス）がみられるのに対して、近世印はその傾向を見い出すことはできない。この銅印全体に細かな鬆が入る鋳造技術が、古代印の密度をおおむね7.0g/cm³台にしており、その重量を軽く仕上げているとみられている。一方、近世印は鬆が全面的に認められず、そのために資料密度は8.5g/cm³台を示し、ずっしりした重量感があるのである。〔永嶋正春「非破壊手法による銅印の科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』79集　1999年〕

結局、本銅印は、その鋳造技術の面から判断すると、古代印と近世印の中間的位置、または若干近世に傾斜しているともとらえられるであろう。この点は銅印の技術史的変遷の上で、きわめて注目すべき資料といえる。

まとめ

本印「磐前村印」は、現段階では、日本古代印のなかで村印として初めての例である。本村印は、郷印に比して、一まわり大きい。法量の点からいえば、郡印の平均的数値に近いのである。

鈕の形状においても、郷印がすべて菩鈕有孔であるのにくらべ、郡印は「児湯郡印」の変形鈕を除けば、出土印「山邊郡印」のように弧鈕無孔であり、この点でも本印は郡印などの公印に近い。

ところで、こうした古代印の法量・形状および字体などに関する規制、律令制下の文書行政に伴うものであった。こうした律令文書行政が変容した10世紀以降、国印・郡印などの印影による字体と印面の大きさなどをみる限り、大きく変化し、次第にその識別基準が厳密さをなくしていくのではないかと推測できる。

しかし、それを決定できる実物資料がこれまで現存していなかった。すなわち、古代印の変遷をみるためには、10世紀以降の実物資料に関する鈕の形状や印文の彫り方そして鋳造技術全体に及ぶ観察が不可欠な条件である。本銅印は、12世紀後半という明確な年代を有している出土資料だけに、その意義ははかりしれない。

また法量の点で、郷印を上回り、郡印相当であり、鈕の形状も私印特有の菩鈕有孔ではなく、倉印・郡印などに見られる公印特有の弧鈕無孔である。つまり、８・９世紀代の公印を意識した形状になっている。

一方、字体やその鋳造技術の点では、明らかに８～９世紀代の出土印と異なる。字体は楷書体であり、彫り方は浅く、字画の線が太く、８世紀代の鋭い字画とは異なっている。しかも鋳造技術の点で、８～９世紀代の古代印特有の印全体にわたる細かな鬆を認めることができず、重量と密度はむしろ近世印に若干傾斜しているといえる。これまでの研究では、８～９世紀代の出土印と近世印との比較で、その差を論じてきた。しかし、今回、12世紀後半の出土印が登場したことにより、鋳造技術は古代末に変質を遂げ、それ以降、その技術が近世印に継承されていったのではないかという見通しを得ることができた。

現段階ではまだ、分析データ数が少なく性急な結論を下すことは慎まねばならないが、一定の傾向を見通すことは十分に意義がある。したがって、上記のような傾向を現段階では指摘しておくこととする。

以上のように、「磐前村印」はあらゆる意味において、古代印の終焉を象徴する貴重な資料といえる。

二、「村」と地名「磐前」

印の釈文「磐前村印」は訓み「いわさきのむらのいん」、磐前は、石崎・岩崎などの表記と通じるであろう。

古代における村については、一般的に次のように述べられている。

まず、律令期の村については、山田英雄氏が、「村は郷とは別個の考え方に基づく区画であって、人口の数によるものであるよりは、開拓された地域を主体にし、その地域がひとつのまとまりをもっているならば、既存の行政区画にはこだわらない性格を有している」と指摘している（「律令成立期の地方問題」『古代の日本』9、1976年）。

つぎに王朝国家期の村については、斉藤利男氏によれば、11世紀前半に『和名類聚抄』郷が解体し、郡の内部は一般に「村」で構成されるようになるが、この「村」は中世の村には連続せず、12世紀に再度解体して新たな村（これが中世の村）を分出する過渡的なものだったとされる。

また、村は中世村落とは異なり、10世紀王朝国家の村落共同体の特質を基本的な点で残した解体期の古代村落と評価したほうがよいという（「11～12世紀の郡司・刀禰と国衙支配」『日本史研究』205号、1979年9月号）。

「磐前村印」の「磐前」という地名は、次のように推測される。

平泉柳之御所遺跡出土の折敷墨書（平成2年度、第28次調査）は、人々に給与されることになった絹織物のリストを書き留めた日記であると報告されている。その人名のなかに「石崎次郎殿」という地名を冠した人物がみえる。

入間田宣夫氏は「石崎次郎殿」「石川三郎殿」「石川太郎殿」などが、奥六郡〔伊沢（胆沢）・和賀・江刺・稗抜（稗貫）・志波（紫波）・岩井（磐井）〕の地名を名乗る根本被官（家人）層であったと推定している。石崎は、伊（胆）沢郡内のうち、建武年間の文書に、金色堂御読経田五段の在所と記されていた（奥州平泉文書79）（「平泉柳之御所遺跡出土の折敷墨書を読む」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要』XⅠ（平成2年度）1991年、『平泉柳之御所遺跡出土の折敷墨書を読む（続）」同センター『紀要』XⅦ（平成8年度）1997年）。

三、全体の意義

① 本鋼印「磐前村印」は、日本古代印のなかで村印として初めての例である。

② その特徴は公印と私印両方の要素をあわせもっている。古代印はあくまでも律令国家の文書行政にともなってその存在意義を有したものである。10世紀以降の古代印は形式化し、それ以前の公印のなかの国印・郡印との間の厳密な区分や、公印と私印との識別基準もしだいに失われていったと想定できる。12世紀後半という明確な年代をもつ本鋼印は上記の特徴をよく表している。

③ 鋳造技術の面からいっても、これまで8～9世紀代の古代印と近世印の分析データの知られるなかで、本鋼印が両者の中間的位置を示す点が注目される。

奥州藤原氏三代によって築かれた平泉は、あらゆる面で古代国家の政治体制および京の文化を積極的に受容したとされている。古代印はいわば古代国家の最も象徴的存在であった。その意味において奥州藤原氏が支配下の奥六郡内の地域名の鋼印を作成したことはきわめて象徴的な施策と評価できるであろう。

〔付記〕まだ、出土後まもない段階であり全体にわたる詳細な観察と分析を終えていないので、小稿はあくまでも一応の見通しを述べた中間報告であることをお断りしておきたい。

表1　郡印の印面法量（縦×横）

印　文	文　書　名	文書の年代	西暦	文書出典	印面	縦（mm）	横（mm）
宇治郡印	山背国宇治郡加美郷家地売買券	天平20年8月26日	748	大古3－112～113	方形	49	48
阿拝之印	伊賀国阿拝郡柘植郷墾田売買券	天平勝宝3年4月12日	751	大古3－500～501	〃	42	42
坂井郡印	越前国坂井郡司解	天平宝字2年正月12日	758	大古4－257～258	〃	54	51
宇治郡印	矢田部造麻呂家地売券	〃　5年11月2日	761	大古15－127～129	〃	45	44
十市郡印	大和国十市郡池上郷家地売買券	〃　5年11月27日	761	大古4－520～522	八角	43	42
山田郡印	山田郡弘福寺田校出注文	〃　7年10月29日	763	大古5－459～461	方形	47	44
足羽郡印	越前国足羽郡司解	天平神護2年9月19日	766	大古5－543～544	〃	49	49
津高郡印	備前国津高郡苑垣村常地畠売券	宝亀5年11月23日	774	大古6－577	〃		
愛智郡印	近江国八木郷墾田売券	延暦15年11月2日	796	平1－16	〃	45	45
郡賀郡印	紀伊国郡賀郡司解	承和12年2月5日	845	平1－79	〃	49	49
伊都郡印	紀伊国在田郡司解	仁寿4年6月7日	854	平1－115	〃	41～42	41～42
名草郡印カ	紀伊国直川郷墾田売券	貞観3年2月25日	861	平1－130	〃	46	46
添下郡印	大和国矢田郷長解	元慶3年5月27日	879	平1－173	〃	42	42
添上郡印	東大寺上座慶贊愁状	延喜11年4月11日	911	平1－206	〃	38	43
高市郡印	因幡国東大寺領高庭荘坪付	天慶3年9月2日	940	平1－251	〃	46	45
足羽郡印	越前国足羽郡庁牒	天暦5年10月23日	951	平1－263	〃	46	45
紀伊郡印	法勝院領目録	安和2年7月8日	969	平2－302	〃	46	45
平群郡印	法隆寺僧某家地売券	正暦2年10月23日	991	平2－352	〃	41	43
添上郡印	大和国添上郡牒	正暦2年3月14日	991	平2－349	〃	49	48
答志郡印	石部松春畠地等売券	天喜2年10月28日	1054	平10－4934	円形	径45	
可児郡印	大宰大貳藤原経平宅解	承暦2年12月22日	1078	平3－1160	方形	43	41

表2　郷印の印面法量（縦×横）

印　文	現　所　在	印面	縦（mm）	横（mm）
伊保郷印	豊田市郷土資料館	方形	33	33
余戸郷印	印影一個人	方形	32	32
次田郷印	天理大学付属図書館	方形	34	34

坂井郡印　天平宝字二年（758）

阿拜之印　天平勝宝三年（751）

宇治郡印　天平廿年（748）

山田郡印　天平宝字七年（763）

十市郡印　天平宝字五年（761）

宇治郡印　天平宝字五年（761）

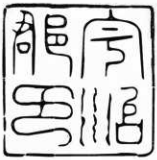
愛智郡印　延暦十五年（796）

津高郡印　宝亀五年（774）

足羽郡印　天平神護二年（766）

図1　郡印〔印影資料〕の変遷（その1）

高草郡印　天慶三年（940）



宇治郡印　承和十四年（847）

那賀郡印　承和十二年（845）

平群郡印　正暦二年（991）

紀伊郡印　安和二年（969）

足羽郡印　天暦五年（951）

可兒郡印　承暦二年（1078）

答志郡印　天喜二年（1054）

添上郡印　正暦二年（991）

図2　郡印〔印影資料〕の変遷（その2）

奈良

資料名称	「次田郷印」	残存形態	伝世	資料番号	156
古印の状態	完存	補修の状況			
出土遺跡					
出土遺構		遺構等の年代			
伝来の経緯	加藤千陰の蒐集印を、のちに根岸武香が入手。「根岸武香珍蔵」と漆描きした箱内に用箋があり、もとは「御笠郡印」と共に大安寺内の菅原天満宮に納められていたとの由来を記す。1967年頃、村口四郎氏の書籍類と共に購入したか。				
現所在（寄託を含む）	名称（氏名）　天理大学附属図書館				
原所在	名称（氏名）				
法量	現存高　34 mm　印側高　mm　重量 63.91 g 印面　縦　34 mm × 横　34 mm（方形の場合） 長径　mm × 短径　mm（円形・楕円形の場合）				
形状・形態	鈕の形状	蕃鈕有孔			
	印面の形状	方形			
	印類	陽刻			
	輪郭	有郭			
	材質	青銅			

御笠郡印

兒湯郡印

山逢郡印

図3　郡印〔出土・伝世資料〕の印影

（資料は以下、すべて『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集 ―日本古代印の基礎的研究，1999年，より引用。）

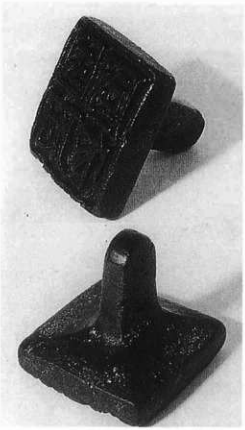
愛知

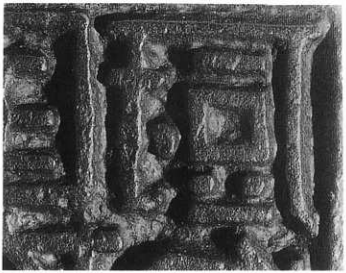
資料名称	「伊保郷印」①	残存形態	伝世	資料番号	111
古印の状態	完存	補足の状況			
出土遺跡					
出土遺構		遺構等の年代			
伝来の経緯	元は個人蔵であった。1971年３月１日、豊田市の市制20周年に当たり同市に寄贈されて今に至る。				
現所在（寄託を含む）	名称（氏名）　豊田市郷土資料館				
原所在	名称（氏名）				
法量	現存高　34 mm　印側高　1-5 mm　重量　58.4 g 印面　縦　33 mm × 横　33 mm（方形の場合） 長径　mm × 短径　mm（円形・楕円形の場合）				
形状・形態	鈕の形状	蓋鈕有孔			
	印面の形状	方形			
	印顆	陽刻			
	輪郭	有郭			
	材質	青銅			

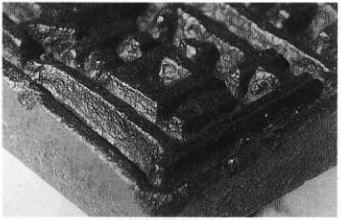
資料名称	〈印影〉「余戸郷印」	残存形態	伝世	資料番号	186
古印の状態	補足の状況				
出土遺跡					
出土遺構		遺構等の年代			
伝来の経緯	明治期に慧日寺から古物商へ流出した古印四点を個人が購入し、安田善次郎氏（安田財閥創設者）に献呈、安田文庫（現在は存在せず）に収蔵された。戦後、所在不明。現在、会津若松市在住の個人が印影のみ所蔵。				
現所在（寄託を含む）	名称（氏名）　〈印影〉個人				
原所在	名称（氏名）　慧日寺				
法量	現存高　mm　印側高　mm　重量　g 印面　縦　32 mm × 横　32 mm（方形の場合） 長径　mm × 短径　mm（円形・楕円形の場合）				
形状・形態	鈕の形状				
	印面の形状	方形			
	印顆	陽刻			
	輪郭	有郭			
	材質				

伊保郷印

〔『豊田の文化財』1985年，豊田市教育委員会〕







「国府厨印」 宮城県七ケ浜町 鼻節神社蔵

縦41×横41×高さ39mm
重量124.1515g

永嶋正春「非破壊手法による網印の科学的研究」
『国立歴史民俗博物館研究報告79集
日本古代印の基礎的研究』1999年

写 真 図 版

柳之御所遺跡全体図

柳之御所遺跡第50次調査区

写真図版1　航空写真

50SB1 (E→)

50SB1 (W→)

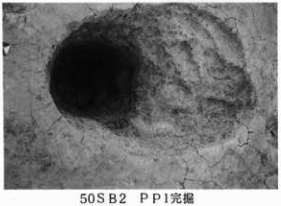
50SB1 PP3断面

50SB1 PP14断面

50SB1 布掘内集石

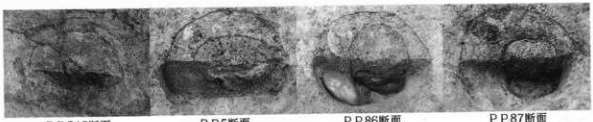
50SB1 集石断面

50SB2 PP1断面

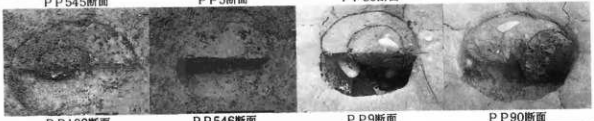


50SB2 PP1完掘

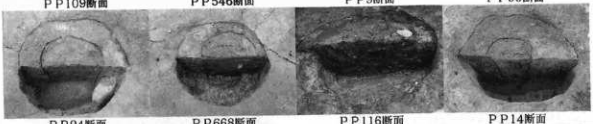
写真図版2 50SB1、SB2



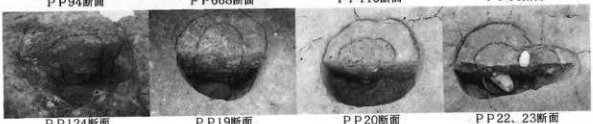
ＰＰ545断面　ＰＰ5断面　ＰＰ86断面　ＰＰ87断面



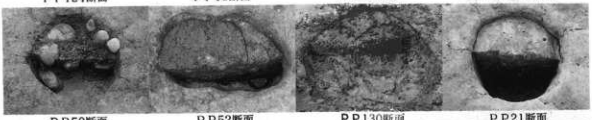
ＰＰ109断面　ＰＰ546断面　ＰＰ9断面　ＰＰ90断面



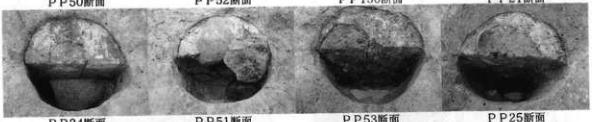
ＰＰ94断面　ＰＰ668断面　ＰＰ116断面　ＰＰ14断面



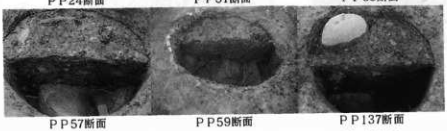
ＰＰ124断面　ＰＰ19断面　ＰＰ20断面　ＰＰ22、23断面



ＰＰ50断面　ＰＰ52断面　ＰＰ130断面　ＰＰ21断面



ＰＰ24断面　ＰＰ51断面　ＰＰ53断面　ＰＰ25断面



ＰＰ57断面　ＰＰ59断面　ＰＰ137断面

写真図版３　５０ＳＢ３柱穴断面

かわらけ集中（50ＳＥ1）検出

かわらけ集中　断面

50ＳＥ2　断面

50ＳＥ2　完掘

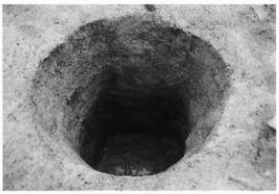
37ＳＥ2　断面

37ＳＥ2　完掘

37ＳＥ2　部材、かわらけ出上状況

37ＳＥ2　部材出上状況

写真図版4　50SE1、50SE2、37SE2



50SE3　完掘（N→）

50SE3　完掘（E→）

50SE3　断面（上位）

50SE3　断面（中位）

50SE3　断面（下位）

白磁四耳壺出土状況

白磁四耳壺出土状況

白磁四耳壺出土状況

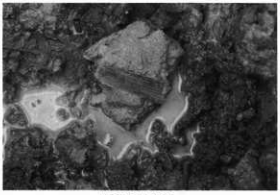
写真図版5　50SE3①

白磁四耳壺出土状況

印章出土状況

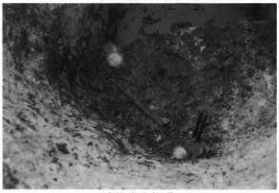
印章出土状況

墨書出土状況



墨書出土状況

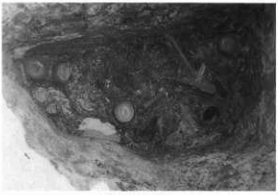
墨書出土状況



遺物出土状況

漆塗り製品出土状況

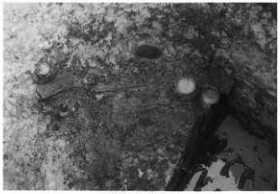
写真図版6　50SE3②



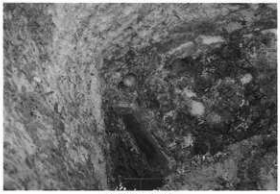
遺物出土状況

遺物出土状況

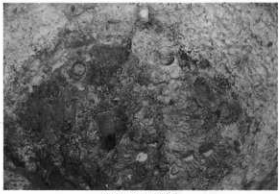
遺物出土状況



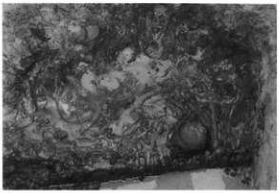
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

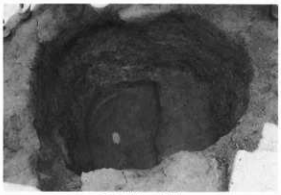


遺物出土状況

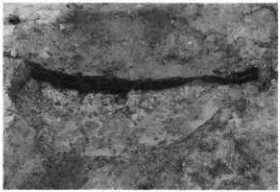
遺物出土状況

写真図版7　50SE3③

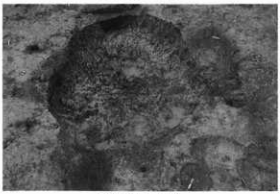
50SK1　断面



50SK1　完掘

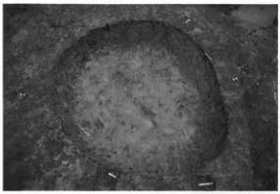


50SK2　断面

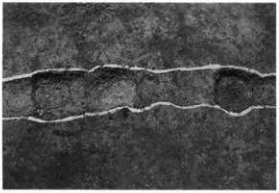


50SK2　完掘

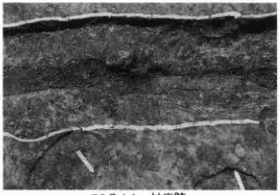
50SK3　断面



50SK3　完掘



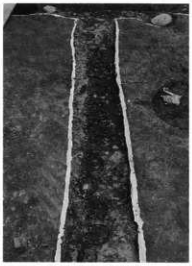
50SA1　材痕跡



50SA1　材痕跡

写真図版8　50SK1～3、50SA1

50SA1　検出



50SA2　材痕跡

50SA2　材痕跡

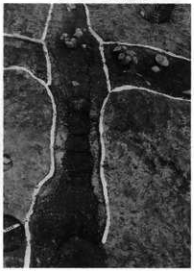
50SA2　検出

50SA2　材痕跡　東西辺

50SA2　屈曲部分

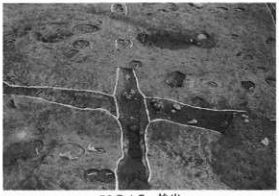
50SA3　検出

50SA4　検出

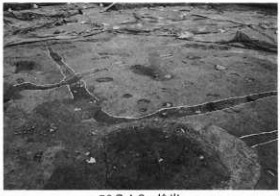


50SA5　材痕跡

写真図版9　50SA1～5

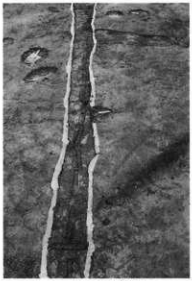


50ＳＡ5　検出

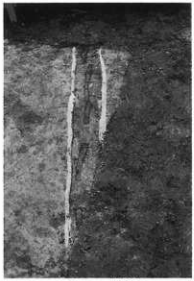


50ＳＡ6　検出

50ＳＡ7　検出

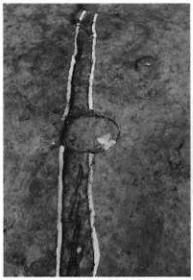


50ＳＡ7　材痕跡



50ＳＡ7　材痕跡

50ＳＡ8　材痕跡



50ＳＡ8　材痕跡

50ＳＡ8　検出

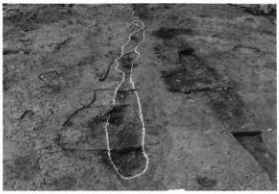
写真図版10　50SA5～8

50SA9 検出

50SA10 検出 (W→)

50SA10 検出 (S→)

50SA10 検出 (E→)



50SA12 検出

50SA13 検出

50SD1 断面

50SD2 断面

写真図版11 50SA9~13、50SD1、2

50SD3　断面

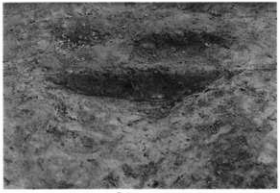
50SD4　断面

42SD1, 50SD5, 50SD6　断面

42SD1　断面

42SD1, 50SD5, 50SD6　完掘

42SD1　完掘



50SD7　断面

50SD8　完掘

写真図版12　50SD3～8、42SD1

50ＳＤ8　かわらけ集中（東）

50ＳＤ8　かわらけ集中（西）

50ＳＤ8　完掘（W→）

50ＳＤ8　完掘（E→）

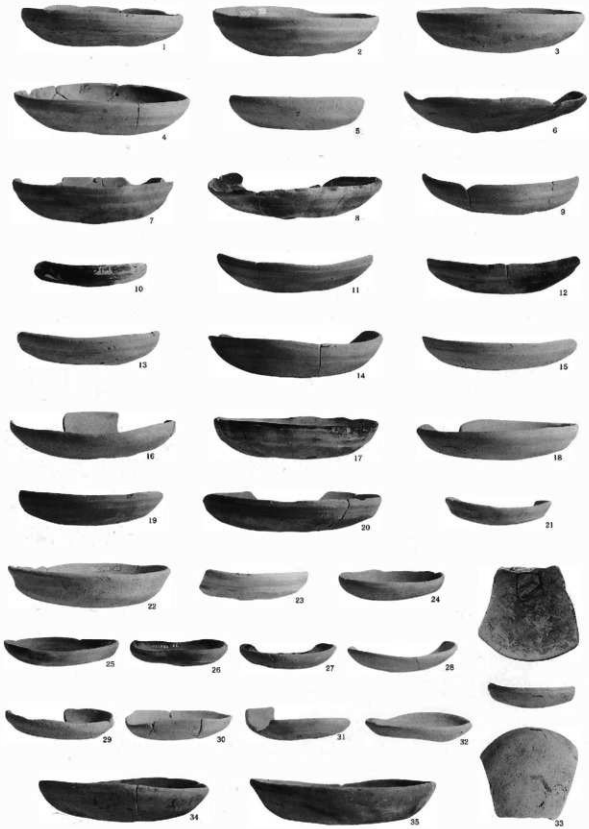
92-68　グリッド内溝断面

37ＳＤ9　断面

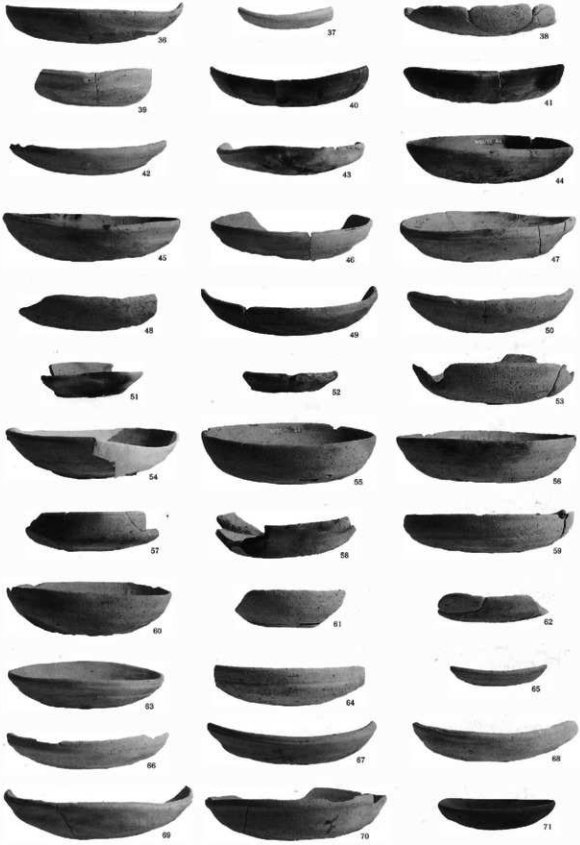
42ＳＤ12　断面

調査区より南方を望む

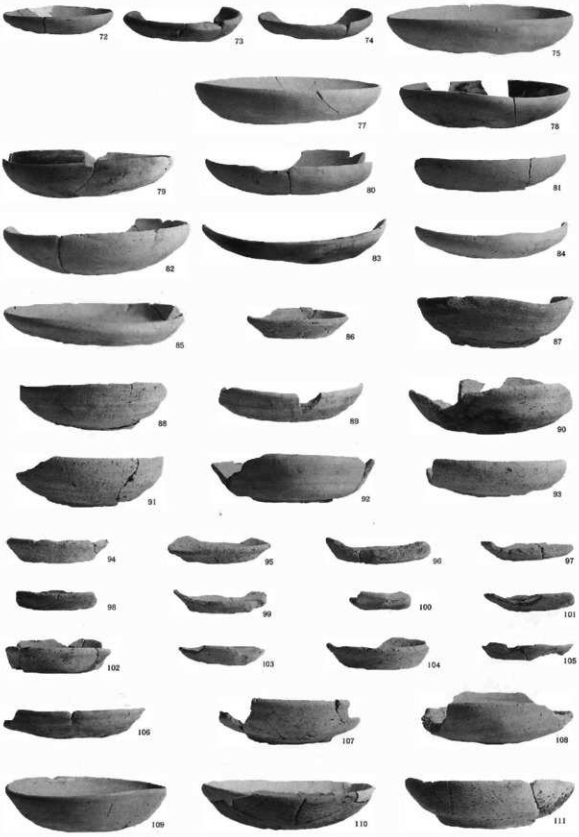
写真図版13　50SD8、37SD9、42SD12



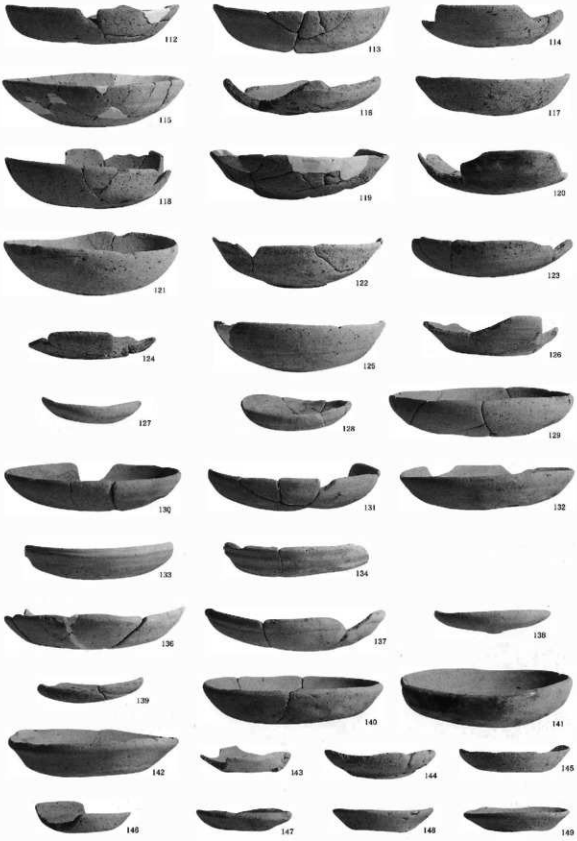
写真図版14　かわらけ①（1～35）　S＝約1/3



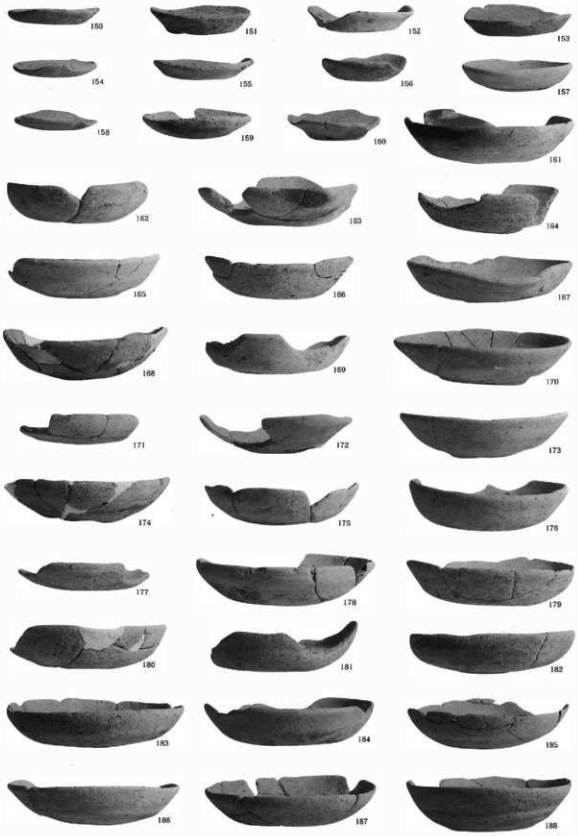
写真図版15　かわらけ②（36～71）　S＝約1/3



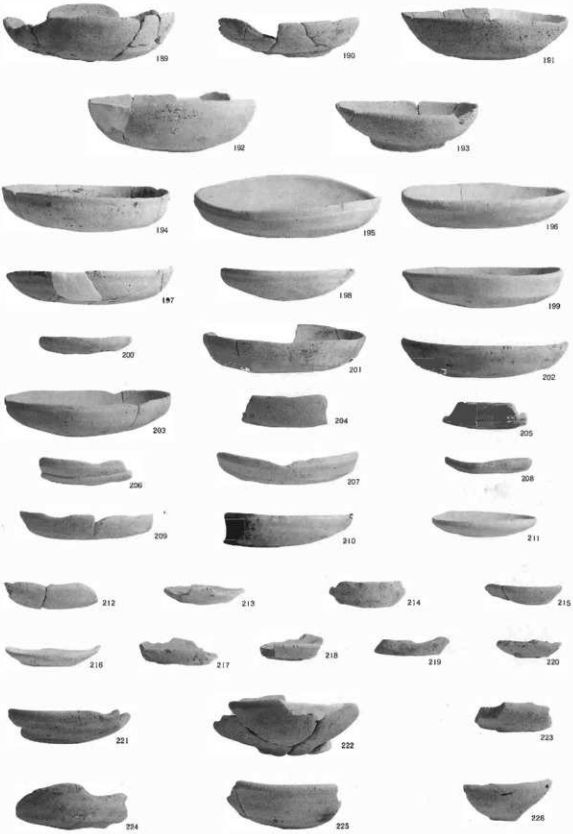
写真図版16　かわらけ③（72～111）　S＝約1/3



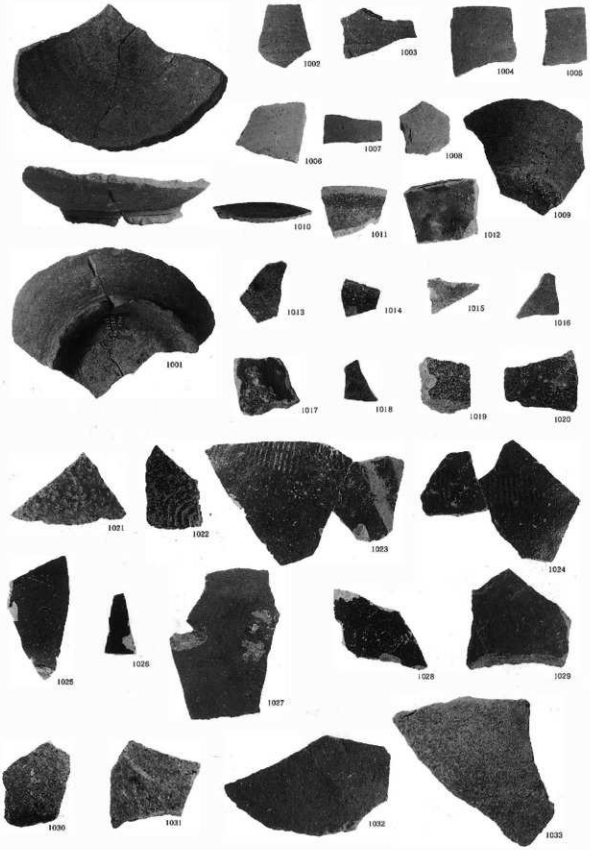
写真図版17　かわらけ④（112～149）　S＝約1/3



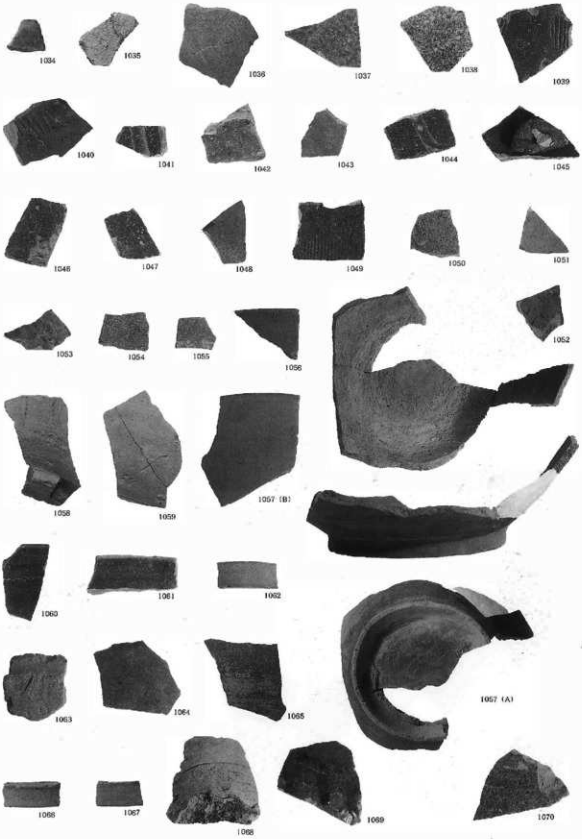
写真図版18　かわらけ⑤（150～188）　S＝約1/3



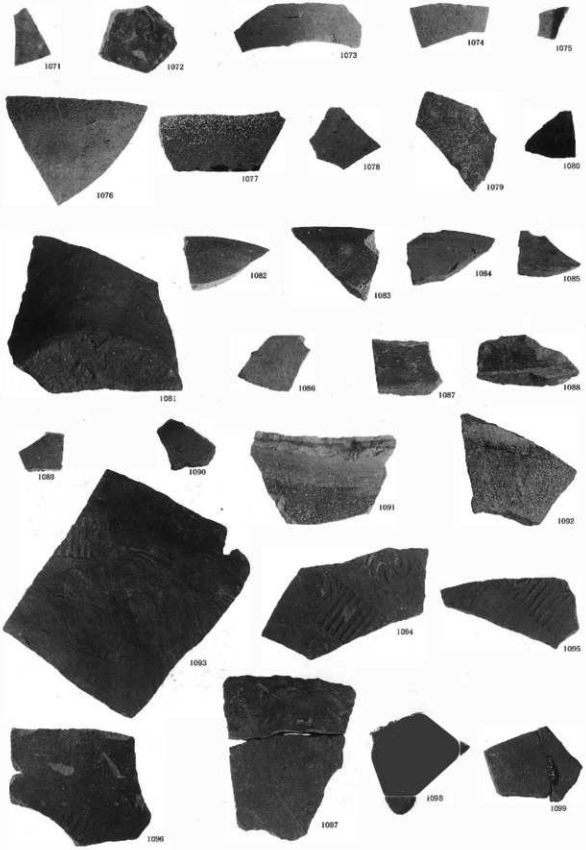
写真図版19　かわらけ⑥（189～226）　S＝約1/3



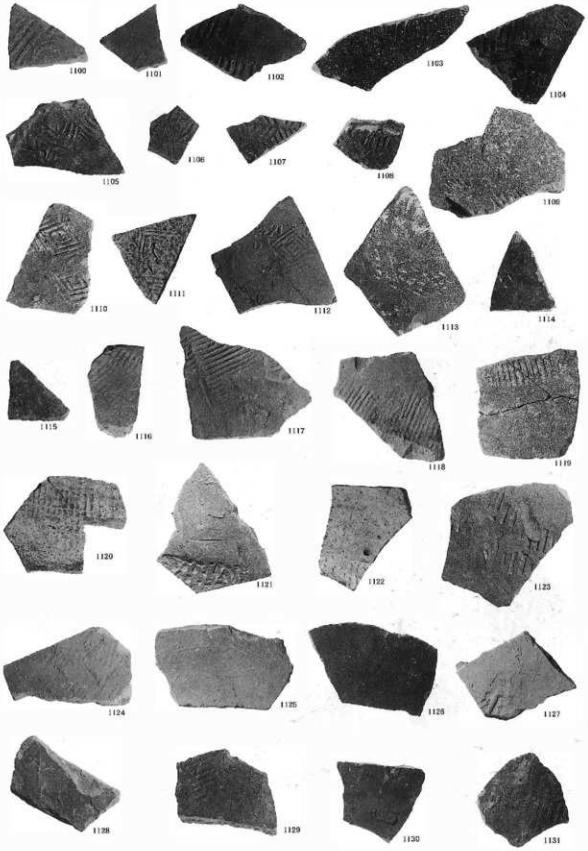
写真図版20　国産陶器①（1001～1033）　S＝約1/3



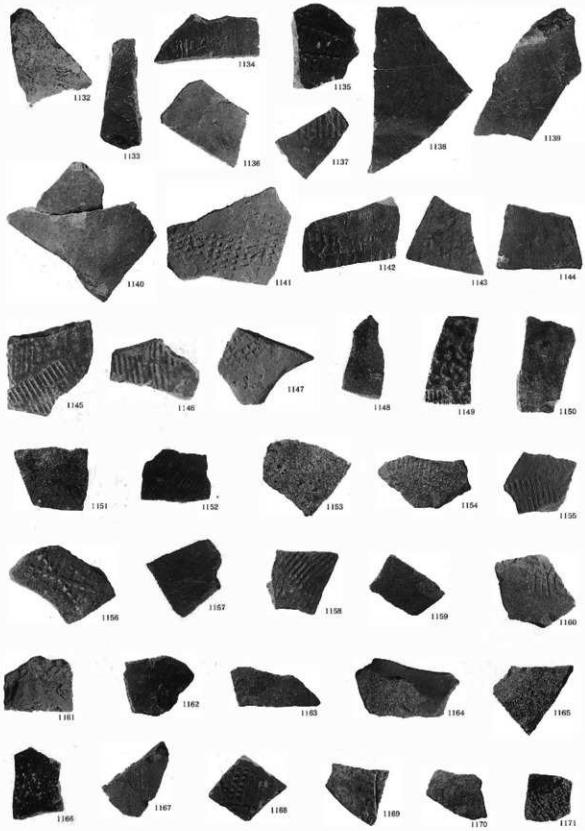
写真図版21　国産陶器②（1034～1070）　S＝約1/3



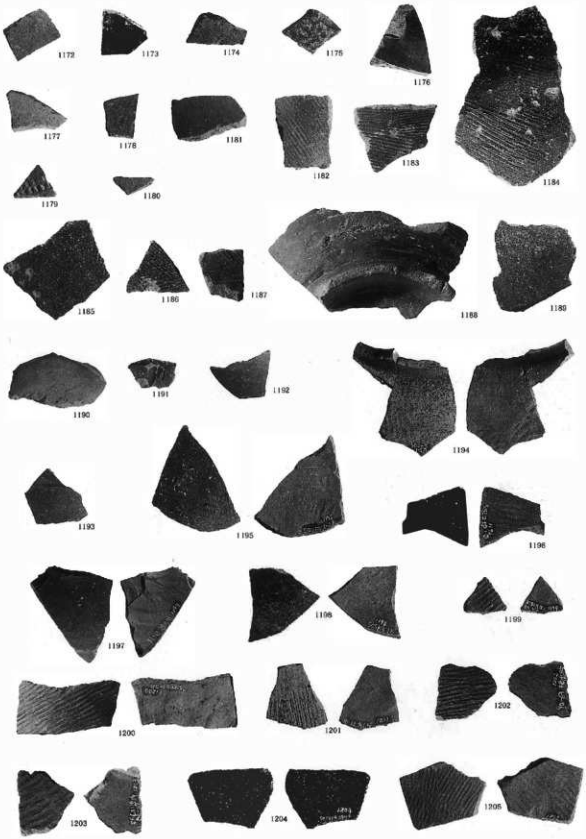
写真図版22　国産陶器③（1071～1099）　S＝約1/3



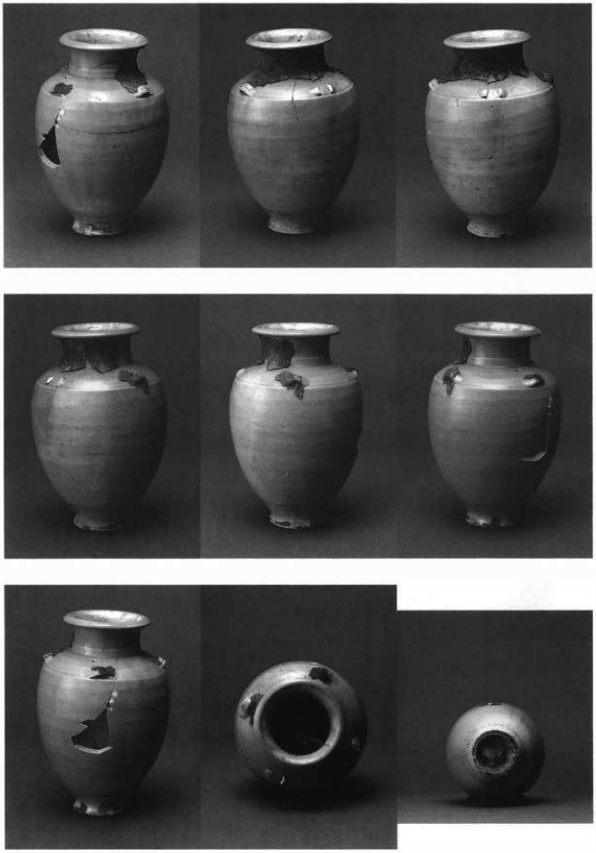
写真図版23　国産陶器④（1100～1131）　S＝約1/3



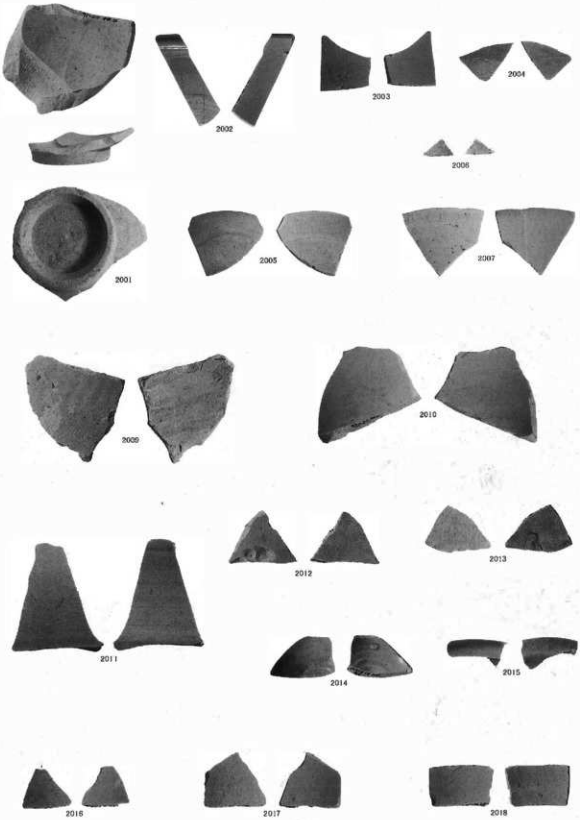
写真図版24　国産陶器⑤（1132～1171）　S＝約1/3



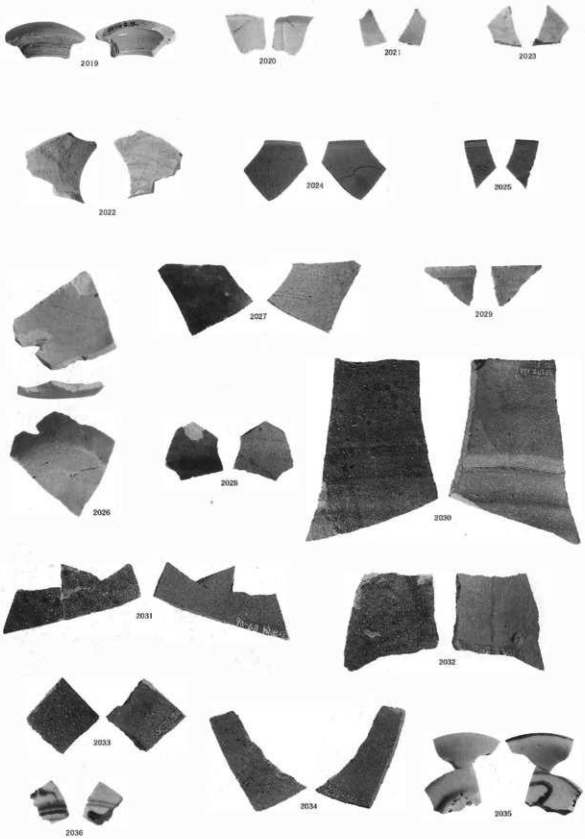
写真図版25　国産陶器⑥・須恵器（1172～1205）　S＝約1/3



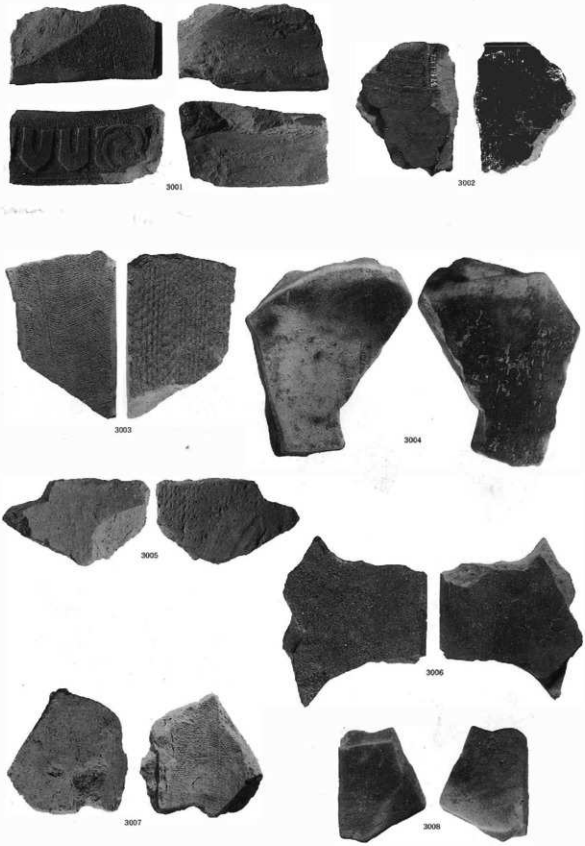
写真図版26　中国産陶磁器①（白磁四耳壺　2008）



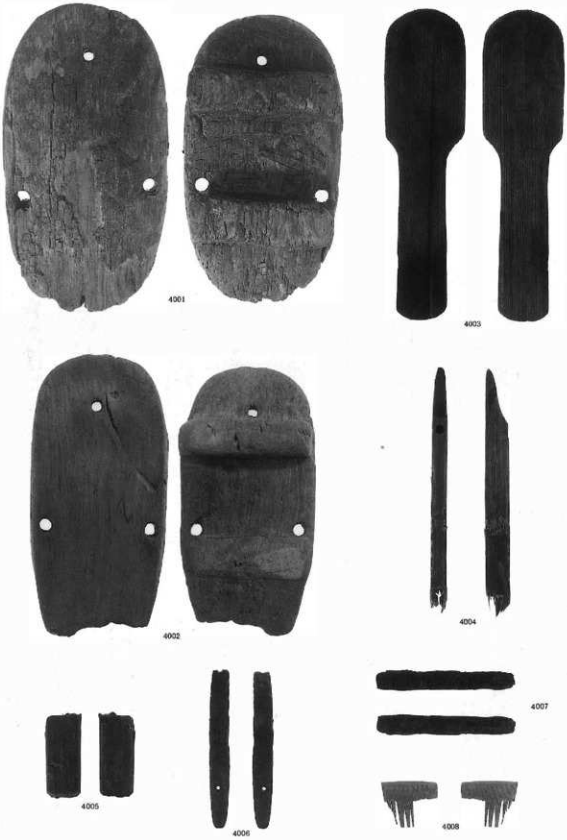
写真図版27　中国産陶磁器②（2001～2018）　S＝約1/3



写真図版28　中国産陶磁器③（2019～2035）　S＝約1/3



写真図版29　瓦（3001～3008）　S＝約1/3

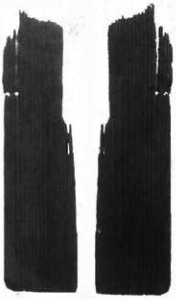


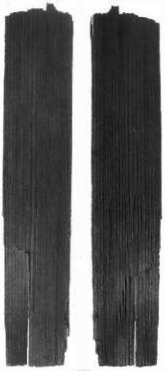
写真図版30　木製品①（4001～4008）　S＝約1/3

写真図版31　木製品②（4009～4023）　S＝約1/3

4024

4025


4026


4027

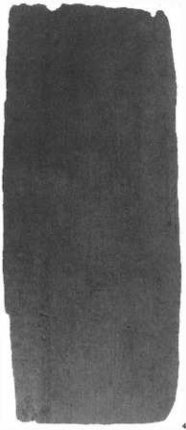
4028

写真図版32　木製品③（4024～4028）　S＝約1/3

4029

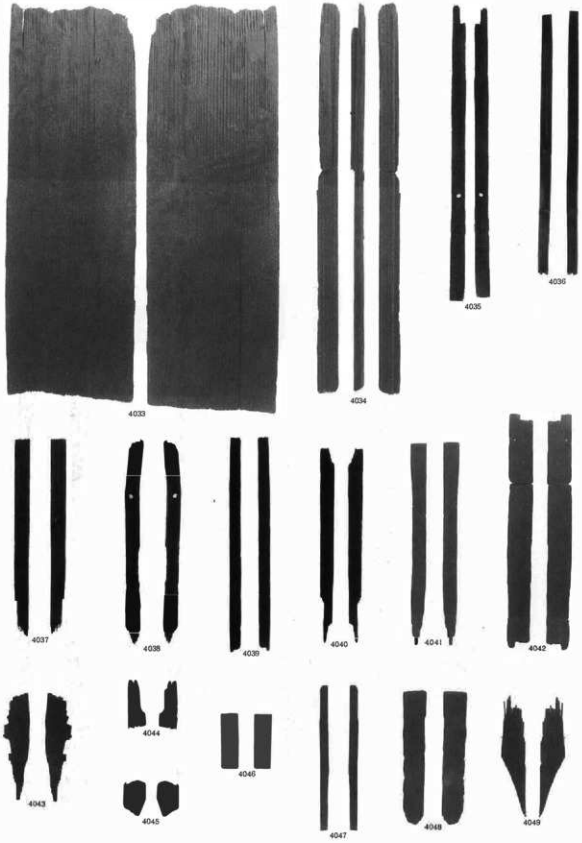
4031

4030

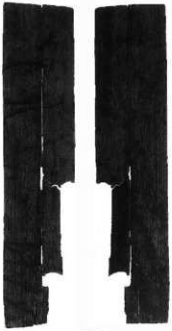


4032

写真図版33　木製品④（4029～4032）　S＝約1/3

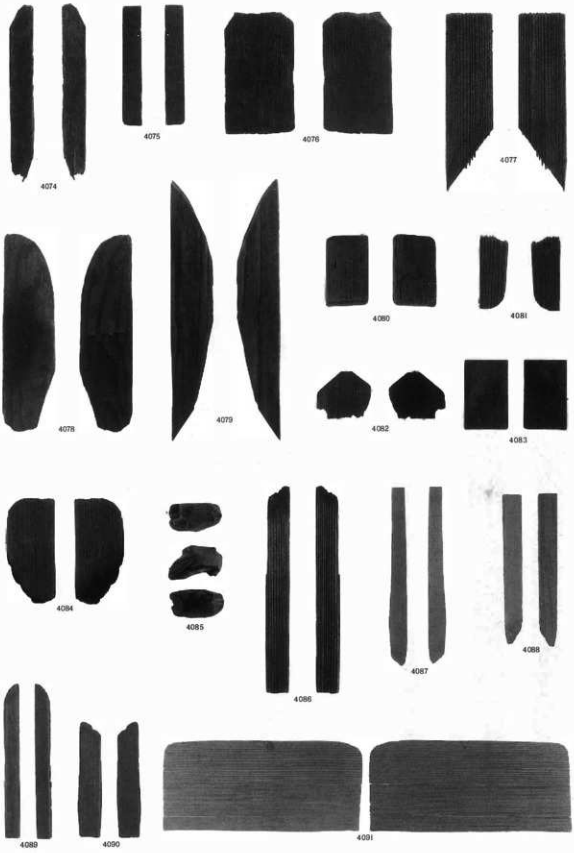


写真図版34　木製品⑤（4033～4049）　S＝約1/3

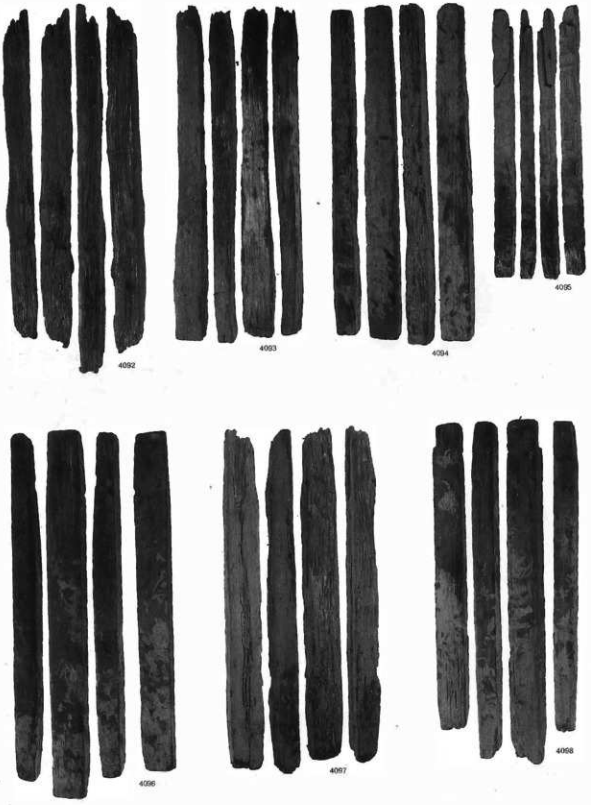


写真図版35　木製品⑥（4050～4061）　S＝約1/3

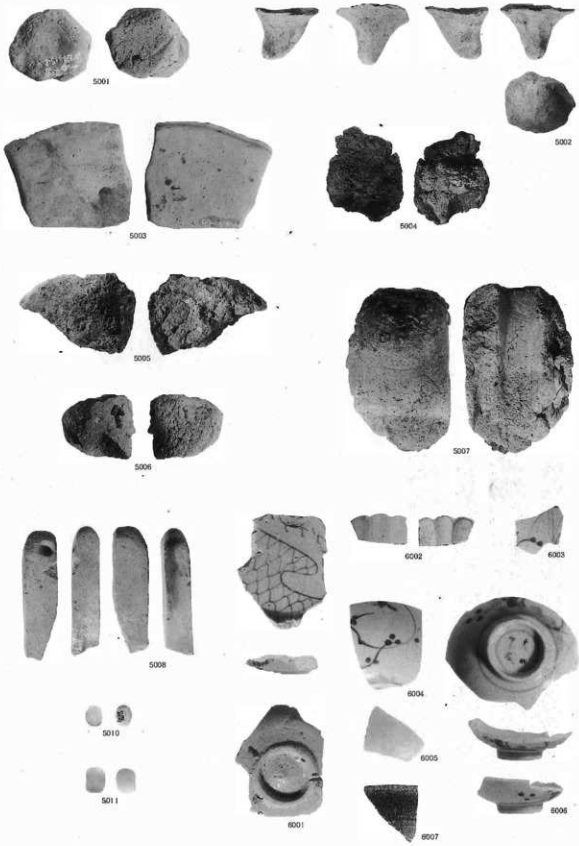
写真図版36　木製品⑦（4062～4073）　S＝約1/3



写真図版37　木製品⑧（4074～4091）　S＝約1/3



写真図版38　木製品⑨（4092～4098）　S＝約1/12



写真図版39　土製品、石製品、近世陶磁器(5001～5011、6001～6007)　S=約2/5

写真図版40　金属製品(5013、5012、5009)　5009と5012はS=1/1

報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐん　やなぎのごしょいせき
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書　柳之御所遺跡
副書名	第50次発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書
シリーズ番号	第107集
編著者名	斎藤邦雄　羽柴直人
編集機関	岩手県教育委員会
所在地	岩手県盛岡市内丸10－1
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	いわてけんにしいわいぐんひらいずみちょうひらいずみあざやなぎのごしょ 岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳之御所126-34ほか	03402		38度59分28秒	141度7分35秒	第50次 19990513 ～ 19991031	1,800	史跡整備にむけた内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳之御所遺跡	奥州藤原氏に関連する居館跡	12世紀	掘立柱建物跡　12棟 塀跡等　13基 溝跡　1条 土坑　3基 井戸状遺構　3基 土器集中区　1基	かわらけ 国産陶器（渥美・常滑他） 中国産陶磁器 金属製品（提子の金具・銅印） 各種木製品（櫛・下駄・物差し・糸巻他）	・漆布に覆われた白磁四耳壺 ・「磐前村印」と刻印された銅印 ・墨書資料8点
		近世以降	溝跡　9条 掘立柱建物跡　7棟		
		時期不詳	掘立柱建物跡　9棟以上 柱列　8条		

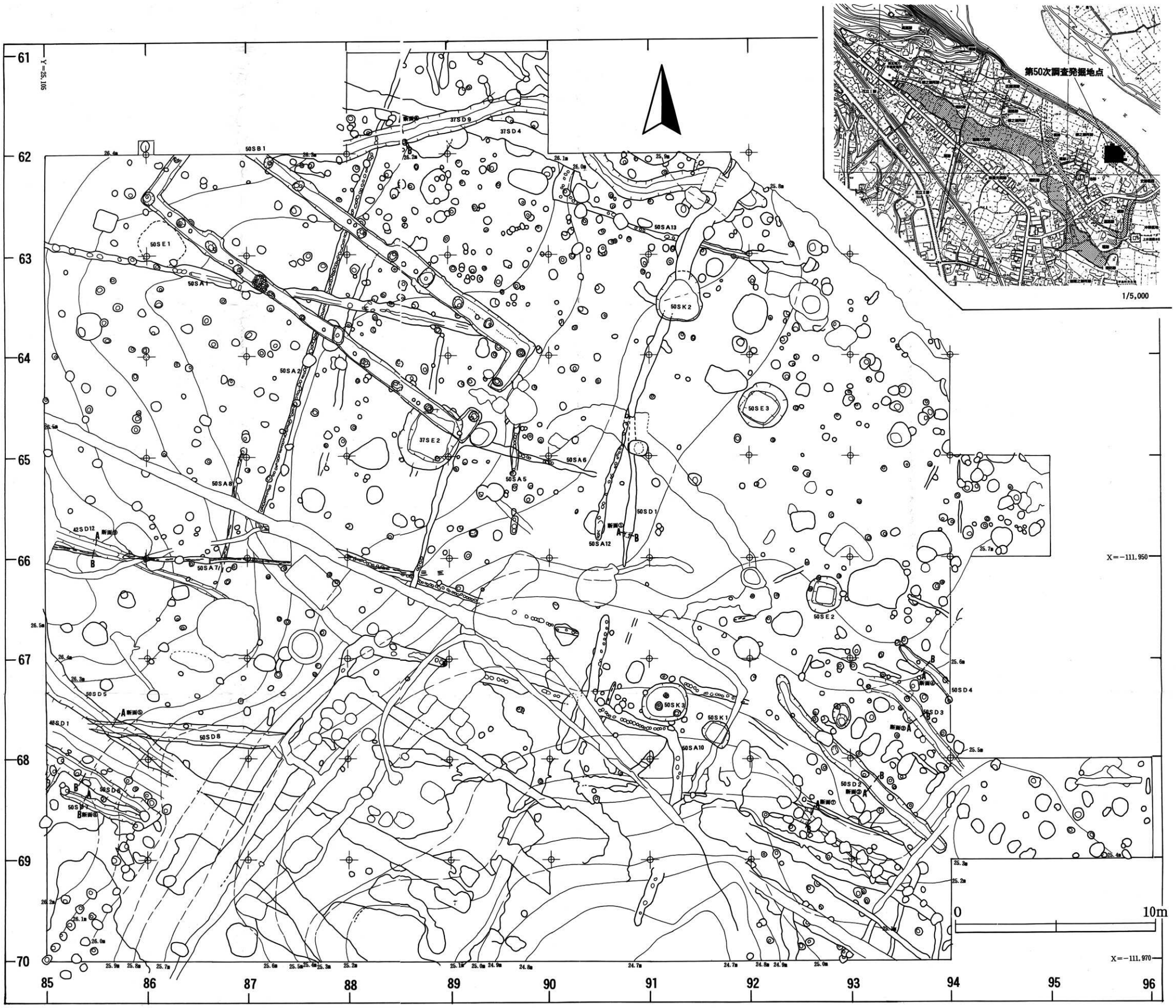
岩手県文化財調査報告書　第107集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

―第50次発掘調査概報―

平成12年3月31日発行

発　行　岩手県教育委員会
岩手県盛岡市内丸10－1
編　集　岩手県教育委員会事務局文化課
印　刷　杜陵高速印刷株式会社
盛岡市川目町23－2



柳之御所遺跡第50次調査遺構配置図